

死を生きる
(三)

水野吉治遺稿集

はじめに

岩 高 宏

私と水野吉治さんは、1997年に主の下に召された私の亡き妻、敦子を通して知り合いました。敦子が召されてからは、「芙蓉の会」と「あしの会」を通して交わりを深めるようになりました。その模様は、記念誌「死を生きる」(1)及び「死を生きる」(2)に記されています。

記念誌「死を生きる」(1)の中で、私は「歴史を生きる」という一文を書きましたが、その中で述べたように、私たちは皆『歴史』の中で生きているのです。毎日のニュースで見ると、私たちが生きている世界の中では、毎日のようにいろいろな出来事が起こっています。別な見方をすれば、私たちが歴史を作っているのです。

「死を生きる」(3)の中にも様々な出会いや歴史が語られていますが、それらの出来事を通して我々が生き、世界の歴史が作られていくのです。

「死を生きる」(1)と(2)が会員の皆さんからの文章を集めたのに対し、この「死を生きる」(3)はすべて水野吉治さんが書かれた作品より、遺稿集としてまとめられました。

この遺稿集には、水野さんが最もその心身のエネルギーを集中して取り組まれた以下のような文章群が収められています。

- (1) 若き日の水野さんの人生を決定した「死と生と、キリスト教と禪との出会い」。
 - (2) 「教育者として」学生や子供たちと全力をあげて関わった姿。
 - (3) 独自の視点から現代という時代の中で起こっている「人類の狂気を見つめる」考察。
 - (4) キリスト者として深く「キリストの愛と復活」について掘り下げた洞察。
 - (5) 自らの認知症に正面から向き合う中から書かれた「死を生きる」生きざまと思案。
- この遺稿集をお読み下さる方々には「歴史の中で生きた」水野吉治さんの稀有な生きざまと思想にふれていただけることと確信いたします。

目次

はじめに 4

第一章 「死と生と、キリスト教と禅との出会い」

死から見る 6

死ぬこと・生きること 14

第二章 「教育者として」

一つへの道 中学教師として 16

K子先生の死 28

オニトケ先生の取り組み 38

Y先生塾を聞く 48

一つへの道（終回） 58

且旦塾の勉強 60

第三章 「人類の狂気を見つめる」 69

第四章 「キリストの愛と復活」

いわゆる一神教について 86

神の国は見える形ではない 93

アーミツシユの生き方 101

アーミツシユの赦し 103

第五章 「死を生きる」

死を生きるゝ自己と認知症 112

N君へのメール 126

生きる意味ゝ華嚴の滝からのメッセージ 134

あとがき 150

水野吉治年譜 152

第一章 「死と生と、キリスト教と禅との出会い」

死から見る

1950年9月15日午後2時50分、大阪の旧朝日会館で、「情婦マノン」という映画の上映中、18歳の男性Aが、睡眠薬アドルムを、致死量の20錠飲み干しました。やがて、意識が朦朧もうろうとなり、ふらふらと外へ出て、北へ向かって、歩き始め、桜橋の交差点付近で倒れます。はじめは、酔っ払いが路上に寝ているのだと思われていましたが、数時間して、不審に思った通行人が、救急車を呼んだときには、こと切れていました。Aは、倒れる瞬間まで、手帳に、遺書を書き続けていました。その末尾には、

「ぼくは尊敬するB子さんの所へ行く」と書いてありました。

Aは、高校3年生のとき、新聞部長をしていて、私は1年生部員でした。彼が自殺を遂げたのは、私が、2年生のときでした。彼の自殺は、私に対して、問いを突き付けました。

「人間は、何のために、生きているのだろうか」

「人生の意味は何だろうか」

「死とは、何だろうか」

時とともに、その問いは、薄らぐどころか、ますます、強烈になり、鋭くなって、私を追いつめてゆくのでした。高校3年になって、私の内に、ある不安が、だんだん大きくなってくるのに気がつきました。

「このまま行くと、Aと同じ道をたどることになるのではないか。」

恐怖が、私をおそいました。

「とにかく、何でもいいから、答えが欲しい。」

私は、キリスト教の洗礼を受けました。しかし、聖書を読み、教理を学んで、納得してから、受けたわけではありません。自分をだましたのです。偽りの光でもいいから、自分の暗黒を照らしてほしかったのです。「卑怯だぞ！」という内心の声に対しては、耳をふさいでいました。

内なる暗黒は、ますます深くなり、私は、答えのない問いに、追い立てられていました。卒業を目前にして、私は、この先、どう生きて行つたらいいのか、途方に暮れていました。とりあえず、大学に進学しなければなりません。一般の学部を選んだとしても、勉強する意味が、全く分かりません。

「神学部へ行けば、どうにかなるのではないか」という淡い期待を抱きました。両親は、案

の定、反対しました。嵐のような猛反対のなか、私に迷いが生じました。幸か不幸か、高校の担任は、熱心なキリスト教徒でした。両親に会いに、家に来てくれました。担任の説得で、両親は、不承不承、神学部へ行くことを許してくれました。

神学部に入ったものの、はたして、ものみごとに、期待は裏切られました。答えが与えられるどころか、次から次へと、新しい問いに直面させられることになったからです。

神学部というのは、修道院のようなどころかと想像していたのですが、まったく違っていました。

学生たちは、割合純粋な気持ちで、神学部に入ってくるようでした。私のように、家がキリスト教でない学生も、かなりいました。なかには、充分家族の理解が得られぬまま、学費が払えず、アルバイトと奨学金に頼って、なんとか

生活している学生もいました。それだけに、勉強に対しては、真剣に取り組んでいました。

教授たちも、それにこたえて、熱心に教えているようでしたが、一部の教授には、人生の根源的な意味や、死の問題に対して、学生とともに、追求してゆこうという姿勢が見られませんでした。キリスト教という出発点を与えられたら、あとは、その延長線をたどって、敷衍ふえんして行くだけ、というような安易さが感じられました。自分の学問的業績や、社会的地位と生活の安定に結びつくことにしか関心がないような感じさえしました。神学部のチャペルでなされる説教のなかには、ほとんど、注解書の受け売りであったり、他人の説教集からの、缺はきみと糊のりのつぎはぎ細工に過ぎないものもありました。

唯一の例外は、神学部の松村克己先生と、文学部の三井浩先生でした。両先生によって、私は、本当の学問の深さ・おもしろさに、目が開かれました。

私が、神学部に期待していたのは、修道院のように、労働と祈りのなかで、人生の意味を問うことによって、人生の根源と究極を体得する生活でした。そんな私の期待に対して、神学部での生活は、あまりにも軽薄で、浮ついたものでした。その私の心には、自殺した先輩Aの姿がありました。Aの残した課題に、私は答え得ていない、という負い目がありました。

卒業後1年間、教会の伝道師をしているうちに、「僻地教育」という理想に出会い、山間部の公立中学の教師になりました。真冬、生徒とともに、トイレの便器を掃除しながら、「神学部時代にやりたかったことは、これだったのだ」と思いました。それでも、まだ何か、もの足りないものを感じていました。それが何であるのか、分からぬまま、模索を続けるうち、出合ったのが、坐禅でした。

作務さむ（＝労働）と、聞法もんぽう（＝真理を学ぶこと）とは、坐禅修行に欠かせない大事な要素で

すが、聞法に関しては、禪について書かれたどの本を読んでも、どこことなく、ウソっぽいものを感じていました。浅いのです。立派そうな言葉は、いろいろ並べられていても、その著者の「いのち」が、まったく感じられないのです。

私が求めていたのは、いくら立派そうな言葉を並べていても、しよせん、他人の受け売りに過ぎないような宗教書ではありませんでした。教会や寺院で聞く話も薄っぺらで、「聞くだけ時間のムダ」という感じがしました。私がほしかったのは、『本物』でした。人生の根源と究極を体得させてくれる人物でした。自殺した先輩Aの残した問いに答えられるのは、『本物』だけだったからです。

『本物』とは、職業的学者でも、職業的宗教家でも、ありません。彼らのほとんどは、アママがいいだけで、内容はゼロなのです。口が上手で、人をだますことにたけているので、彼ら

自身も、自分の才にだまされています。彼らの書いた本が売れ、彼らの話に、人が集まって来さえすれば、世間は、彼らが『本物』だと信じてしまいます。新聞・テレビ・ラジオに出る『有名人』は、世間が作り上げた虚像です。その実像は、純真な子ども目の目にしか見抜けません。それは、あわれな『裸の王様』なのです。

でも、私は、やっと『本物』に出合うことができました。

一人は、京都安泰寺の内山興正先生でした。もう一人は、能勢の山奥に住んでおられた池部素子先生でした。お二人とも、社会的地位や生活の安定など問題にせず、ひたすら、真理を生きることに一筋でした。その姿勢だけで完結していました。世間の肩書も、物質的豊かさも、いっさい必要としない自由人でした。

京都と言えば、観光客目当ての金儲けの寺院が多いなか、内山先生の安泰寺は、壇家を持たず、托鉢によって入るお金だけで、雲水たちの

食費をまかない、私のような外部からの参禅者たちを無料で宿泊させ、食事を提供していました。私は、安泰寺で、純粹に坐禅ざぜんだけを行まなじることをを学びました。

池部素子先生は、農耕と坐禅の生活のなかで、問題を持つて訪れる人たちに、人生の意味を説き、生きる姿勢を示しておられました。人は、先生のお話を聞いているうちに、先生のように燃えている愛と真心に触れて、雷にうたれたような衝撃を感じるのでした。

思えば、内山先生も、池部先生も、『いのち』をかけて、真理を説いておられました。私は、その『いのち』を自分のものにならなければ、死んでも死に切れないと思いました。しかし、私と両先生の間には、越えがたい深淵が横たわっているように思えました。両先生の『いのち』と、どうしても、一つになれないのです。両先生のお話を何年聞いても、坐禅を何年しても、何かが、ひらけないのです。それ以来、ずっと、『サ

トリ』がほしい」と思い続けました。両先生には、はっきりとした『サトリ』体験があるのに、私には、ないと、そう思い込んでいました。

私が、内山先生と池部先生の「サトリ」体験から学んだことは、

『サトリ』とは、時間の中に閉じ込められている、ちっぽけな自分から、「永遠の中に生かされている、大きな自分」に目覚めることだ』ということです。

内山先生は、沢木興道こうどう老師に従って修行中、「もの足りない」という思いに追い回され、何とか「もの足りる」境地に達しようとして、「もの足りよう」の思いの荒れ狂いに、二十数年間というもの、七転八倒しちてんぱつとうされました。そして、ある年の十二月一日から八日まで、京都の安泰寺で行われた接心せつしん（＝坐りずめに坐禅をすること）の際、沢木老師から、次のように言われました。「仏法（真理）は、無量無辺むりょうむへん（＝永遠）。小さな

お前のおもわくを、もの足りさすもので、あろうわけがない」と。

この言葉によつて、かみなりに打たれたように、「サトリ」が、内山先生の全身をつらぬきました。内山先生は、「その瞬間、過去二十数年間の『イバラの道』が、走馬灯そうまどうのようによみがえつてきて、涙が出てしかたがなかった」と、述懐じゆわいしておられます。

内山先生は、「永遠」の中に、抱き取られ、「永遠」の中に、生かされている自分を見いだしたのでした。「サトリ」を「つかもう、とらえよう」としていた自分が、「サトリ」に「つかまれ、とらえられて」いたのです。これは、驚天動地きやうてんどうち、主客転倒しゆかくてんとう、天地逆転ともいふべき、大変動でした。内山先生の言い方を借りれば、「私がサトリをつかむ」のではなく、「サトリで、私をする」のが真実だったのです。まさに、天動説が、地動説に変わったような、「コペルニクスの転回」でした。

私も、その「コペルニクスの転回」を体験したくて、京都の安泰寺に、かよいました。片道二時間かけて、安泰寺に行き、坐禅ざぜんや作務さむ（＝労働）に参加しました。冬は、凍こてつくような坐禅堂の寒さの中で、足の痛みに耐えて、「早く放禅鐘ほうぜんしょう（＝坐禅終わりの合図）が、鳴らないかなあ。家に帰つて、こたつに足を突っ込んだら、さぞ暖かいだろうなあ」などと、そればかりを待つている自分を、情けなく思っていました。あまりのつらさに、

「自分の坐相ざそう（＝坐禅の姿勢）は、どこか間違っているのかもしれない。坐禅の理解が足りないのにちがいない。坐禅の作法も、もっとしっかり覚えなければならぬ」と思つて、安泰寺にかよう電車の中で、一所懸命、内山先生や、沢木老師の書かれたものを読みました。

池部先生は、昭和13年（1938年）5月こ

ろ、「死の体験」(臨死体験)をされました。先生が38歳のころです。

夜、床について、ウトウトしておられたとき、呼吸困難になり、やがて、心臓も止まってしまいました。

体が硬直状態になった、その自分を、「本当の自分」が見下ろしているのです。その「本当の自分」とは、「何ともたとえようのないほど輝いた、美しい大空」のようであり、「澄みきった川床の真砂(まさご)に映っている陽光の静かさ」とでも言うべきもので、「何の区切りもない、時空を超えた存在のすべて」でした。「美の果てにあったもの」(p27f)

どのくらい時間がたったのか、ふと気が付くと、心臓が、再び、脈打ちはじめていました。いつの間にか、いつもの肉体の自分になっていたました。

その2年後、昭和15年(1940年)、池部先生ご夫妻は、すべてを捨てて、能勢の山奥に

入り、坐禅と農耕の生活を始められました。

先生が里のほうへおりてゆかれたとき、誰か女の人が、3、4枚向こうの麦畑で、畦あげあぜあげをしていました。その人は、一服の腰のぼしに、長い鍬くわの柄えの先に、両手とあごを乗せて、こちら向きに立っていたので、先生は、お辞儀をされましたが、その人は気付かず、ジツとしていました。

そのとき、先生は、ハッとされました。意識の底のほうで、お辞儀の返しをアテにしている自分が見えてきたのです。

それ以来、先生は、「返し」をアテにしない「愛」を、生涯かけて、行まよじらることを、始められました。

私は、その先生の姿勢に、いつも、「捨て身」を感じていました。ただ、ひたすら、相手のために、ささげて、ささげて、ささげ尽くす、先生の「愛」に、打たれるばかりでした。その「愛」に包まれ、見渡す限り「愛」ばかりという世界を、味わわせていただきました。

気付いたら、もう、「サトリ」など、どうでもよくなっていました。実は、「愛」こそが、「サトリ」でした。

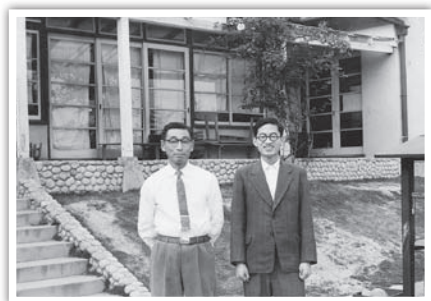
「愛」は何も求めません。ただ、与えるだけです。仕えるだけです。もう、「自分」はありません。「他人」もないのです。「与える」とか「仕える」ということもなくなります。あるのは、「愛」だけです。

しかし、肉体をもつて、地上に生きている限り、「愛」が見えなくなるときが、しょっちゅうあります。「欲」の雲におおわれてしまうのです。それでも、「愛」がなくなったわけではありません。「愛」を行(ぎょう)ずれば、たとえ、「愛」が見えなくても、私は、「愛」に生かされているのです。ささげ尽くされた先生の「愛」を、胸によみがえらせれば、それが分かるのです。

(2006年2月～6月『はまなす』第114～118号)



関西学院教会



伝道師時代、長久牧師と

死ぬ人と・生きる人

私 「君は死について考えたことがあるか」

A 牧師 「死はいつも意識している」

私 「それは自分の死か、他人の死か」

A 牧師 「両方だ」

私 「自分の死をどういうふうを意識している?」

A 牧師 「自分が死ぬ時の様子を頭の中で描いている」

私 「自分が死んだあとの様子か、死ぬ前の様子か」

A 牧師 「両方だ」

私 「死んだあとの様子をどのように描いている?」

A 牧師 「臨終から始まって、葬儀、火葬ぐらいまでかな」

私 「テレビか映画の映像のように描くんだ

な」

A 牧師 「そうだ」

私 「その映像を見ている君自身は生きているのか、死んでいるのか」

A 牧師 「死んでいる自分には何も見えないから、生きている自分が見えることになる」

私 「その生きている自分は、その時どこにいるんだ」

A 牧師 「頭の中だな」

私 「じゃあ、その頭を生かしている本体の肉体が死ねば、自分は消えてしまうわけだ」

A 牧師 「そういうことになる」

私 「見ている自分が消えれば、この世界も時間もすべて消えてしまう」

A 牧師 「自分にとっては消えても、世界も時間も実際には残っているんじゃないのか」

私

「残っているかどうかを確かめる自分は消えてしまっているから、確かめようがない」

A 牧師

「つまり世界も時間も自分の頭が作ったものだというわけか」

私

「その通り。君は坐禅をしたことがあるか」

A 牧師

「坐禅の恰好だけはしたことがある」

私

「坐禅していると時間が気になるのは知っているだろうか？」

A 牧師

「そう。まだ終わらないのか、あと何分か、としょっちゅう考えてしまう」

私

「自分が作っているものだから気になる。世界も時間も自分が作ったものだということに気づかせるのが坐禅の力だ。作るのを止めれば、世界も時間もなくなる」

A 牧師

「頭を生かしている本体の肉体が死ねば、すべてがなくなるといふのは分かるが、死んでしまつては元も子もなくなるんじゃないのか」

私

「生きながら死ぬ、死にながら生きるこ
とができればいいだろうか？」

A 牧師

「なるほどそれが坐禅か」
(2009年8月『はまなす』第156号)

わたしは、あなたたちのために立てた
計画をよく心に留めて、とまは言われる。
それは平和の計画であって、災いの計画ではない。
将来と希望を手えることである。

エッセイ書局刊

第二章 「教育者として」

一つへの道

「中学教師として」

「水野先生。親から電話があったよ。生徒が騒いで、授業が後ろの生徒まで聞こえないと云うんだ。」と教頭が云う。

公立中学校の英語教師1年目のことである。

教頭に云われるまでもなく、いつかは親から苦情の電話があるだろうということは分かっていた。

「静かにしなさい」といくら大きな声で云っ

ても、効き目がない。授業を面白く分かりやすくするために、ゲームのようなことをしたり、英語の歌を取り入れたり、あれこれ工夫を凝らして見るのだが、空回りに終わる。おどしたり、すかしたり、しまいには「いったいどうすれば君たちは静かに授業を受けてくれるんだ。僕もやり方が間違っていたら教えてくれ」と真剣に生徒に向かって聞いたこともある。

もう疲れ果ててしまい、授業に行くのが怖くなった。下宿へ帰って、明日の授業のことを考えると、夜寝床に入っても眠れない。睡眠不足のまま学校へ行って、やかましい授業にへとへとになり、また下宿に帰って眠れない夜を過ごす。

そんな毎日が続く中、とうとう教頭に親から電話があったことを告げられたのだ。

下宿に帰って考えた。「自分は教師に向いていないのだ。学校をやめよう。」

その時頭に浮かんだのは恩師の三井浩先生のことであった。あるとき教育学の講義の中で先生は、ご自身の体験について次のような話をされた。

中学校に新任教師として赴任したその1日目、教頭に案内されて教室に入り、教頭は職員室に帰ってしまった。教壇に立って自己紹介をしようとしたが、生徒が騒ぎだし、教室は蜂の巣をつついたようになった。いくら制止しても、立ち歩くもの、果てはナイフを振り回すものまで出る始末である。しばらく教壇で立ち往生していたが、意を決して教室を出た。教頭の後を追って、「自分にはとても勤まらないので、やめさせてほしい」と云おうとしたのである。

職員室に向かって廊下を歩くうちに、「今や

めたら一生後悔しなければならぬぞ」という内心の声を聞いて、立ち止まった。そして、教室に帰り、何とか1時間授業をした。それが教師としての第1歩であった。

それから毎時間、必死に努力を続け、工夫を重ねて、分かりやすい授業・生徒全員が参加できる授業を模索し始めた。

その苦悩の姿に同情した生徒が、先生の努力に協力してくれ、やがて、できる生徒ができてい生徒の勉強を見てくれるようにまでなった。

三井先生はご自分の体験をこのように語って下さったのである。

私はそれを思い出して、三井先生に相談しようと思った。

京都の三井浩先生宅にうかがった。私の授業中学生徒が騒いで手が付けられないこと、とても勤まらないので教師をやめようかと思っていることをお話しした。

先生はじつと聞いてくださった後、「すこし肩の力を抜いたらどうか」とおっしゃった。

「いまの君の状態では、君自身も苦しいだろうし、生徒にとつても窮屈で面白くないだろう。いつそ生徒と遊ぶつもりになつてはどうか。」

「いえ。これ以上ゆるめると、どんなことになるか分かりません。收拾が付かなくなります。」
 「今でも收拾が付かない状態なんだから、それを、どうしよう、こうしよう、等と思わず、すべてを手放して、楽になつたらどうか。」

「だからやめようかと思っています。」
 「やめて本当に楽になるのかね。」

そう先生に言われてハッとしたり。やめることは簡単であるが、その後、重い重い敗北感を背負つて人生を歩まねばならない。他の職業にかわつても、みずから押しした落ち武者の烙印は消えないのだ。次なる理想も展望もなく、ただ単に苦しいからやめるといふのでは、その苦しきも本当には解決せぬまま、また新たな苦しみを

背負い込むだけである。

学校をやめるといふことだけは、どうにか思ひ止まることできたが、さて今後どうすればよいのであろうか。先生のお宅を辞して帰る途中考へた。

先生は、肩の力を抜いて遊べとおっしゃる。すべてを手放せとおっしゃる。その通りにすれば、底なき深淵に真つ逆様に落ちてゆくような恐怖感がわく。その恐怖感が体を硬直させる。そして肩に力が入るのだ。

先生は、いつか、教育学の講義の中で、この世界の根本実在は何かという問題についてお話しになった。根本実在。そこからこの世のあらゆる現象が生まれ、そしてその中へ消えてゆく根本実在。それさえ体験し、実感できれば、恐怖はなくなる。すべてがゆるされ、力みは消え、実在の中で、ただ遊ぶことができる。自在を得、自分の好きなようにして、それでも道に外れていない。そこでは遊びと教育が一つである。

しかしそこに到達するにはどうすればいいのか。今の私にその答えは見えない。かといって、立ち止まることは許されない。歩き続ける中で、答えは与えられるかもしれない。いや、歩き続けるそのことが、すでに、根本実在に支えられ、導かれているということなのかもしれない。ただ歩くことよってのみ、それは体得されるのであろう。

相変わらず授業は騒がしかったが、三井浩先生のご助言で、とても気が楽になっていた。そして生徒の様子が見え出した。

それまでは、必死になって授業をしていたので、生徒がよく見えていなかったのだ。ただ静かにさせようと、それだけに心を奪われて、一人一人の動きや反応を見きわめることができていなかった。まして、一人一人の生徒が、授業中、何を感じ、何を思っているかというようなことにまで心を配る余裕はなかった。

授業内容といえば、ただ分からせよう、覚えさせようということだけに終始していた。一人一人の生徒に応じたきめ細かな指導など、思いも及ばなかった。一クラス五十人の生徒の数に圧倒され、懸命に孤軍奮闘していた。

そこでは生徒は、いわば敵であった。騒がれたら、敵に負けたことになる。静かにさせることができれば、わが方の勝利である。敵は、数においても体力においても、圧倒的に優勢であるので、毎日負け戦になるのは当然であった。仮に生徒を静かにさせることができて、その上、英語を分からせ、覚えさせることができたとしても、それは、とりもなおさず、生徒を捕虜にし、奴隷にすることに成功したことを意味する。生徒の自由を奪うことができれば、私が完全に勝利したことになる。それで私の教育が成功したことになるのだと思っていた。

この考えが間違っていることは、頭では分かり過ぎるほど分かっていたのだが、いざ五十人

の生徒を前にすると、そんな当たり前のことなどはどこかに吹っ飛んでしまつて、落ち着きを失い、目を血走らせて、傷ついた獣のように、唸り声をあげ、噛み付き、そして最後は尻尾をまいて、すごすごと退散する。それが毎日の授業だった。

しかし今、三井先生に言われたように、少し肩の力を抜いてみると、生徒と対立し、敵対している自分の力みが分かつてきた。そして生徒が見え始めたのだ。

それまでは、一人一人の生徒の能力を考えず、一律に分からせようとしていた。指名するときにも、機械的に当ててゆくだけで、私の質問が、その生徒にとつてむずかし過ぎはしないだろうか、などと考えることさえしなかった。その結果生徒が答えられず、次々と「分かりません」という答えが返ってくる度に、いらだち、絶望していた。私が懸命になればなるほど、生徒との距離は開いて行くのだった。

それが見え出ししてきたある日、一人の生徒が「先生。がんばれ」と声をかけてきた。思いがけなかった。嬉しかった。生徒は見抜いていたのだ。私の力みを。そして私の疲れを。

生徒をよく見れば、いろんなことが分かつてきた。

どんなにできない生徒でも、授業が分かりたいと思っている。そして分かれば喜びを感じる。

しかし、その喜びが全く与えられぬまま、ただ机の前に座って授業を受けることが、どれほど退屈で、つらいことか。そして「私語はいけない」「寝てはだめ」「じっと座っている」と言われれば、これはもう地獄である。「分からなくてもいい。ただ座っているだけでいい」と言うのなら、「死人になれ」と言うのと同じである。一方、教師のほうは、生徒に何とか分からせよう、そのために楽しい授業をしよう、と必死になっている。そして生徒が分かってくれ、学

ぶ喜びを味わってくれば、こんな嬉しいことはない。逆に「分らない」と無言で訴えている生徒の顔を見るほど、つらく、淋しいことはないのである。

「分きたい」という者と「分かせたい」という者が一緒にいるのに、どうしてそこに「分かった」「分かせた」という喜びが生まれないのであろうか。

新婚の夫婦が一緒にいれば、もうそこに理想の家庭が実現している、と思うのは幻想である。私の教師1年目は、確かに教師とクラスの新婚時代であった。なかでも1学期はまさに蜜月であった。生徒は可愛くて、まるで自分の弟や妹のような気がした。一人っ子の私には、それがとても嬉しかった。

ところが夏休みが終わって2学期に入ると、様子ががらりと変わった。生徒が私の言うことを聞かなくなっただけである。

生徒は、1学期のあいだ、私を観察していて、

「この先生は、生徒が何をしても怒らない」という結論に達したのだ。そういえば、私は、生徒が私語していても、「きつと勉強のことを話しているのだろう。たとえそうでなくても、クラスの雰囲気をやかにするようなことを話しているのだろう」と思って、注意するどころか、むしろほほえましい気持ちで、それを許していた。「自分は生徒を信頼している。生徒も自分を信頼してくれている」という甘い夢に酔っていた。

その私の頭に水をかけて甘い夢を醒ましてくれたのは、生徒であった。目が覚めてみると、可愛い、いとしい新婚の相手の姿はなく、そこにあるのは、自分にやいばを向けてくる、恐ろしく、手ごわい敵の姿であった。その敵と苦闘していると、思い込んだ時、私はまた悪夢になされていった。その悪夢の中で、「先生、がんばれ」と言う声を聞いた。それも生徒であった。悪夢は醒めつつあった。

校内体育大会のリハーサルのあと片づけで、先生も生徒も忙しくしているとき、一人の男子生徒が綱引きの綱で遊んでいた。

「おい、何をしている。早く片付けないか。」朝からの疲れで少々いらいらしながら、その生徒に注意した。しかし、それを無視して、相変わらず遊んでいる。「聞こえないのか。やめろ」と怒鳴ると、その生徒は振り向いて、「文句あるのか」と言った。喧嘩腰である。こちらも後に引けない。

「やめろと言っているんだ。」

「何だと?」

「やめるんだ。早く片付けろ。」

言い争っているうちに、気がつく、その男子生徒の仲間のグループが、回りを取り囲んでいた。

「おい、先公。おれたちをなめてんのか。」「痛い目に合わせしてやるうか。」

口々に罵りながら、輪を縮めてくる。10人ほどの体格のいい中学生達に囲まれて、私は観念した。

その時だった。一人の先生が走ってきて、間に入ってくれた。そしてはげしい剣幕で、「おまえたち、何をしているんだ」と怒鳴りつけた。一瞬、それにひるんだグループが、氣勢をそがれている間に、その先生は、さっと私を囲みから連れ出してくれた。

「危ないところでしたな。あれは札つきのグループですよ。」

職員室に帰って、話を聞くと、これまでにそのグループの被害にあっている先生は、かなりいるとのことだった。

「連中に、弱みを見せた途端、やられてしまうんですよ。連中に対して、土下座してあやまらされた先生もいます。」

シヨックだった。

あれほど騒がしかった授業もようやく静かに

なり、軌道に乗ってきたような気がしていた矢先だった。

授業さえうまく行けば、それで教育が成功したと思っていた。

しかし、授業は教育の一部分にすぎない、ということに気が付いた。授業以外の場面の方が、はるかに広く、まだ深いのだ。授業がうまく行っていると思うのは、うわべしか見えていないだけなのである。

知識の伝達だけが教育だ、というような思い込みに、知らず知らずはまりこんでいた。知識だけ教えていればよいということは、教育者の陥りやすい落とし穴で、そこはぬるま湯にっかっているようないごちの良さがある。そこから抜け出さない限り、本当の教育はありえないということがおぼろげに感じられてきた。

1日の授業が終わり、クラブ活動の指導や会議がすむと、机の上にたまった未処理のテスト

や事務書類をかばんに詰め込んで、学校の近くの簡易食堂に飛び込む。慌ただしく夕食をかき込むと、1キロほど離れたところにある隣保館に急ぐ。夜間学習が待っているのだ。

全く読み書きの出来ない親たちのための識字学級。勉強の遅れた小中学生たちのための補習。同和地区の歴史と現状を学び、解放への運動を組織する解放学級。教員を何班かにわけて、毎晩交代で教えに行くのだ。

時には糾弾会があり、深夜から明け方まで、野次と怒号のなかで、差別された者の怒りと悲しみを学ぶ。

そして、いくら疲れて帰宅しても、明日の授業の準備は手を抜くことが出来ない。テストや事務書類は、未処理のまま、また学校へ抱えて行くことになる。

授業の合間に外部から電話が入る。生徒が万引きしたというのだ。学校をさぼって盛り場をうろついていた生徒が万引きしたらしい。担任

は現場へ走る。

その処理が終わらないうちに、次の電話が入る。本校の生徒と他校の生徒が集団で乱闘しているという。職員室にいた教員で授業のないものは、全員現場へ急行する。もうパトカーが来ていて、生徒の姿はなく、凶器として使われたらしい鉄パイプや自転車のチェーンが散乱している。学校へ帰ると、欠席している生徒の家に電話して、事件と関係があるかどうか調べる。

給食の時間になり、すでに校舎の各階にリフトで運ばれているパンやおかずを、当番の生徒が取りに来る。あるクラスの当番が「自分のクラスの給食が足りない」と職員室に言いに来た。誰かが授業中に教室を抜け出してリフト室に入り込み、給食を盗み出したらしい。調理場にある食材で急場をしのいでもらう。緊急に会議が開かれ、明日からリフト室の見張りに立つ教員の割り当てをする。

乱闘事件の調査と指導に当たる人員も確保し

なければならず、ほとんどの教員が空き時間無しになる可能性が出てきた。

自分の授業はきちんとやらなければならないし、空き時間は事件の処理に追われ、テストや事務はたまってゆく一方である。立ち止まって考えている暇はない。とにかく走り続けなければならぬ。

この頃のことを、今振り返って見ると、よく体が続いたものだと思う。若さだけではない。何かを支えられたとしか言いようがない。吹き荒ぶ嵐の海の中で、力尽きて、今にも沈みそうになりながら、見えない不思議な何かに引っ張られ、引き上げられたとしか、考えられない。それは何だったのだろうか。

新学期、授業を始める前に、生徒に対して、これから1年間どのように授業を進めてゆくかという、教師としての姿勢を、はっきり示しておかねばならない。私の失敗はすべて、4月段

階にそれをやっておかなかったことに起因している。すべて行き当たりばったり、出たとこ勝負であった。1年間の教育計画は立ててはいるが、それは生徒に伝達する知識の目録に過ぎず、肝心の教育そのものではなかった。

教師は、どういう姿勢で生徒に向かうのかを、はつきりと、みずから自覚しなければならぬ。教師の使命は、生徒に分からせることである。分らせるためには、生徒が教師のほうをよく見て、教師の言うことをよく注意して聞かなければならない。そこに「厳しさ」ということが必要になってくる。私に足りなかったのはこの「厳しさ」であった。その「厳しさ」とは、まず教師自身に対する「厳しさ」でなくてはならない。

教師に、教える内容が備わっているは当然である。しかし、その内容が完全に自分自身のものになっていなかったことは、教えてみて初めて分かった。いかに自分が「あいまいに」「適

当に」勉強してきたかが、暴露された。学生時代身につけた知識が、いかに狭く、浅く、歪んだものであるかを思い知らされた。

あることを教えようとする場合、その背景や周辺や、さらにその発展・展開まで含めて、その3倍の分量の知識や理解がなければならぬ。1時間の授業に対して3時間の準備が必要だということである。

しかも授業というのとは一回きりのものである。あるクラスでうまくいった方法が、他のクラスでも通用するということはない。まして去年の授業をそのまま今年も繰り返せるなどということとは絶対にありえない。しかし、これが教師の陥りやすい幻想である。ベテランになると、ろくに準備もせぬまま授業に挑む。表面的にはそれでスムーズに行っているようだが、生徒の内面には新しい発見も感動もない。生徒の内面は教師の内面の投影である。教師の側に新しい発見や感動がないから、生徒の側にそれが無いの

である。教師自身の発見や感動を伝えることが教育だからである。

この反省に基づいて、私は年度初めに「授業の進め方」というプリントを作って生徒に配った。授業に入る前に、私自身の姿勢をはっきりさせ、生徒の理解を求めた。私の授業が徹底して「厳しい」ものだということへの理解を求めたのである。それはプロとしての厳しさである。教師も師匠としてプロなら、生徒も、弟子としてプロでなくてはならない。両者とも「甘え」は許されないのである。

卒業式の前日、準備が終わって職員室で休んでいるところへ、気がかりな情報が入ってきた。例の非行グループが不穏な動きをしているというのである。どこかへ集まって、何か相談をしているという。明日の卒業式が終わったら、教職員を襲撃する計画らしい。これまで「世話」になった「返礼」として、厳しく生徒指導をし

た先生を中心に「必殺リスト」まで作っているという。

職員室に居合わせた教員が対策を考え始めた。彼らのことであるから、凶器になるものを持つてくる可能性は十分ある。それを校門でチェックすべきかどうかというのである。晴れの儀式の場で、そんなことはできないという意見があった。それでは警察に守ってもらうしかないだろうという声もあった。教育が無力であることをみずから認めることになるから、警察力に頼むということはずべきでないという意見がでた。いや、どうせ無力なのだから、素直に無力を認めたらいいという意見もでた。議論は延々と続くが、いつこうに出口は見えてこない。

夜が更けてきて、朝からの疲れが眠気を誘う。結論の出ないまま、みんな家路についた。

翌朝、卒業式が始まると、そのグループはそろって遅れてきた。式の最中は、特に目だった動きはなく、スムーズに進行して閉式となり、

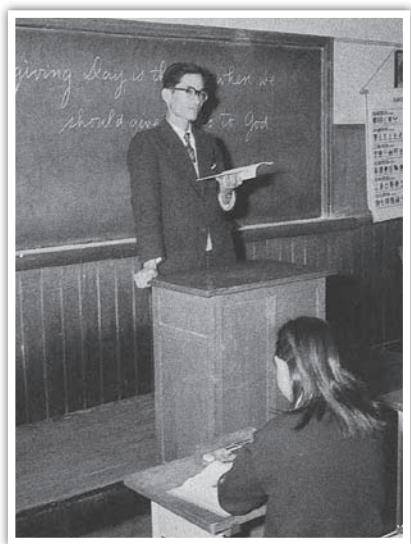
ホームルームに移った。これも無事に終わり、在校生の見送りを受けて、クラスごとに順に校門を出てゆく。これさえ終わればまず一安心である。

最後のクラスが校門を出て、ほっとして職員室に帰ってきたとき、あのグループがまた校門を入ってきたのである。リーダー格の生徒を先頭に、職員室に向かってきた。職員室に緊張が走る。まずリーダー格の生徒が職員室に飛び込んできた。生徒指導主任のところへ走ってゆく。その先生をかばおうとして、回りの先生が立ち上がった。

その時、思いがけない光景が展開し、みんなは自分の目を疑った。その生徒が先生にしがみついて泣いている。泣きじゃくりながら「先生、有難うございました」と叫んでいる。続いて他の生徒も、担任をはじめ、一人一人の先生に礼を言い、握手を始めた。生徒はみんな泣いている。中には「もうおれたち、この学校で勉強

出来へんねんやな」と別れを惜しんでいる生徒もいる。「いや、おまえたち、いつ来てもいいんやで」と言う先生も、懸命に涙をこらえている。「教育」は無力ではなかった。「教育者」としてはみずからの限界を感じ、疲れ果てて投げやりになったこともあった。しかし「教育」は無力ではないということをおの生徒たちが教えてくれたのであった。

(1998年1月～8月)『はまなす』第17～24号



「K子先生の死」

異変はその朝起こった。

K子先生が出勤するために、自宅のガレージにある車に乗り込み、エンジンをかけるために、キーを回そうとした。

その瞬間、急に心臓が激しく動悸を打って、胸が苦しくなり、運転席に倒れこんだ。

しばらくじっとしていると、動悸がおさまったので、キーに手をかけると、また発作が起きた。

学校に欠勤の電話連絡をした後、タクシーを呼んで、病院に行った。

心臓に異常はないとのことであった。

翌朝、出勤しようと、車に乗って、キーに手をかけると、また発作が起きた。そして、欠勤。

次の日も、その次の日も、同じ状態が続いて、ついに入院ということになった。

これを聞いて、我々には思い当たることがあった。

K子先生が欠勤する前日、授業中に、K子先生と一人の男子生徒が、言い争いになった。

その生徒は、授業が始まって、教科書も出そうとせず、ウオークマンを聞いていた。K子先生が注意すると、「ウオークマンを聞いてなぜ悪い。誰にも迷惑をかけていない」と言う。

「みんな勉強している所で、一人だけ好きなことをするのは許されない」とK子先生が言うのと、「別に許してもらわなくてもいいから、ほっとけ。好きな音楽を聞いているのを邪魔するな」と言う。

これ以上話しても無駄だと思ったK子先生は、その生徒を職員室に連れてゆこうとした。

するとその生徒は、K子先生の足を蹴った。

この騒ぎを見ていた他の生徒の何人かが、隣の教室へ行つて、男の先生を呼んできた。

それを見ると、その生徒は興奮状態になり、暴れ出して、K子先生を何度も蹴った。生徒は、すぐ男の先生に取り押さえられたが、K子先生

はショックで真っ青になり、その場にうずくまってしまうた。

怪我はかすり傷程度であつたので、保健室で簡単な治療を受けた後、平静を取り戻し、すぐまた授業をして、勤務時間が終わると、帰宅した。その時には、我々は、まさか入院というようなことになるとは予想もしていなかつた。

この種のトラブルは、程度の差こそあれ、毎日起こっている。教師に対する反抗、授業妨害、教室を抜け出して他の教室に入り込み、そこでも授業をかき乱す。教師のほうも、生徒が騒ぎを起こせば、すぐ駆けつけるといふ態勢が出来ている。

しかしK子先生の場合は少し事情があつた。

男子生徒に暴力を振るわれたK子先生は、それまで自分の授業に絶対の自信を持っていた。

1時間の授業のために、何時間もかけて準備をしていた。プリント作り、教材研究、小テス

トの採点、次のテストの準備に追われながらも、1週間に1度は教科書以外の教材を作つて、楽しい授業を心がけていた。学級担任・クラブ顧問としての仕事、校務分掌の仕事と、目の回るような忙しさの中でも、授業の準備は決して手を抜くことはなかつた。

「K子先生。少し息を抜かないと、倒れてしまふよ」と言うと、

「楽しいから、あまり疲れないんです」と言う。確かにK子先生が暗い顔をしているのを、誰も見掛けたことはなかつた。たまたま廊下を通つていて、K子先生の授業の様子が見えたとき、先生も生徒も楽しそうに勉強していた。他の授業のときはざわついているクラスも、K子先生の授業になると、静かに勉強に集中しているようだった。

K子先生の授業の特色は、生徒に対する質問にあつた。出来る生徒に対しては、よく考えないと答えられない難しい質問をし、出来ない生

徒に対しては、必ず答えられるやさしい質問をした。一人一人の生徒の能力と個性に応じた質問は、ベテラン教師でもなかなか出来るものではない。授業の進度が気になって、画一的な質問になり勝ちである。K子先生は50人の生徒一人一人の能力と個性を把握した上で、50通りの質問を用意しているのである。

放課後、職員室で授業の準備をしているK子先生を見ると、左に生徒の名簿、右に質問の下書きを置いて、指名の準備をしていた。その姿は、芸術家が納得いくまで作品に手を加えているようであった。その時ふっと、我々は何となく、K子先生に、ある危うさのようなものを感じていた。不幸にもその予感的中してしまったのが、今回の事件であった。

自分の授業に完璧を期し、そのために全精力を注いでいたK子先生だけに、ウオークマンで授業に背を向ける生徒が一人いただけでもショックだったのに、その生徒に足で蹴られた

ことは致命的だった。心に受けた傷は、K子先生が気づかないほど深いところにまで達していた。

我々が病院にK子先生を見舞ったとき、別人のようになっていている先生を見て、一瞬病室を間違えたのかと思った。それほどK子先生は変わり果てていた。入院してまだ1週間にもならないのに、すっかりやつれていた。以前の、はきはきしたK子先生ではなくなっていた。声にも表情にも、力が無くなっていた。まるで、抜け殻のようだった。《ただごとではない》我々はそう思った。

K子先生が今年度一杯休職すると、校長から発表があったのは、夏休み前の職員会議であった。理由は「心身症のため」ということである。

「心身症で片付けられるような簡単な事件かよ」いつもの顔ぶれがいつもの居酒屋に集まった。

「K子先生はあまり神経質過ぎたのだろうか」

「自分の授業中に生徒がウオークマンを聞くということとは、自分の授業に対する冒涇だと感じたのではないか」

「ウオークマンを聞くだけじゃなくて、授業中私語をしたり、ガムをかんだり、トランプをしたり、たばこを吸ったりしている生徒がいても、注意もしない先生がいる」

「そういう先生は自分の授業に対する誇りというものをもっていないのじゃないか」

「俺たちは、人に誇れるような授業をしているかい」

「合格点が付けられるような授業は、あまりしていないなあ」

「じゃあ、生徒に騒がれてもあきらめるのか」

「騒がれない授業をすればいいじゃないか」

「騒がれない授業ってどんな授業だ」

「面白い授業だろう」

「教師は芸人であれというわけか」

「教師は教育のプロでなければいけないが、芸人である必要はないと思う」

「芸人だって、弟子を教育するじゃないか」

「弟子が客席で師匠の芸を楽しむだけだったら、プロの芸人にはなれないぜ」

「そうだ。お客さんにはなれても、弟子にはなれない」

「つまり生徒をお客さんにするような教育は、本当の教育ではないということだな」

「じゃあ、K子先生は生徒をお客さんにしていったのか」

「そこは難しいところだ」

「マナーの悪いお客に注意したら、蹴られたんだらう？」

「生徒を客扱いしてくれないと、生徒が思ったからさ」

「K子先生は、生徒をお客さんだとは思っていないから注意したんだ」

「あれだけの準備をして完璧を期していた自信

作を、生徒が評価してくれなかった失望が大きかったんだろうな」

「じゃあ、やっぱり生徒を観客にしていたんだ」

「授業というものは一つの作品なんだろうか」

「作品には違いないが、制作者は教師一人ではない」

議論は本質に近づきつつあった。

その知らせが職員室に入ったとき、一瞬凍り付いたように、全員の動きが止まった。次の瞬間深い悲しみが、洪水のようにみんなを襲った。K子先生が自殺したというのである。

《何ということだ》

《何故だ》

《どうにもならなかったのか》

全員が叫んでいた。しかしそれは声にならなかった。みんな押し黙っていた。やり切れなかった。

女子職員が声を放って泣き出した。

緊急の職員会議が開かれ、詳しい報告があった。

一時好転したかに見えたK子先生は、外泊を願ひ出て、自宅に帰った。医師は家族に、K子先生から決して目を放さぬようにと、強く注意していた。しかし、以前のように明るく振る舞うK子先生を見て、家族はほっとした。気のゆるんだ家族が居間で談笑している間に、K子先生は自室に入り、中から鍵をかけた。家族が様子を見に行ったときは、すでに遅かった。扉を破って家族が飛び込んだときには、机の上に残り書きの遺書を残して、K子先生は首をつっていた。すぐ病院に運んだが、手遅れであった。

遺書には「迷惑かけて、すみません」とだけあった。

《何故なんだ。どうしてなんだ。何故死なねばならなかったんだ。》

我々はうめくように心の中で叫んだ。たまらなかつた。

《どうしてK子先生を救えなかったのか》《誰がK子先生を殺したんだ》《我々ではないのか》《まさか自殺するとは思っていなかった》《そんなに苦しかったのか》《どうして、もつとK子先生の気持ちを聞いてあげなかったのか》

みんなの胸の中で言葉が渦巻いていた。しかしそれを口に出す者は一人もいなかった。みんな深い悲しみの沼の中に沈んでいた。

やがて、いつもは勇ましい発言をする同僚が、「くやしいな」と、ぼつりと言った。我々すべての気持ちだが、そこに込められていた。

通夜の席でご両親はK子先生の遺書を見せてくださった。几帳面な字でしっかりと書かれていた。それがまたやり切れなかった。

「K子を蹴ったという生徒さんのことですが、私たちは、K子が、そのせいで死んだとは思っていません。その生徒さんが思い詰めないように気をつけてあげてください。」

ご両親の優しいお心に涙があふれた。

とても酒を飲んでしゃべれるような気分になれなかった。かと言って、このまま帰宅する気にもなれず、やはりいつもの居酒屋へ行くことになった。我々だけの通夜を、夜を徹してしたかった。

沈黙が続いた。

語るべきことは一杯あるのに、言葉にならなかった。口を開けば、涙があふれそうだった。

黙々と飲んだ。

不意に、一人の同僚が、「K子先生を殺したのは学校だな」とつぶやいた。そして「俺たちを含めた学校だな」と続けた。

しばらく沈黙が続いて、やがてみんなが語り出した。

「K子先生は、学校という仕組みに対して、あまりにも忠実過ぎたんだ」

「学校という所は、勉強の嫌いな者を集めて、むりやり勉強させる所だからな」

「反抗するものが出て当たり前だ」

「K子先生は、その反抗を、真正面から受け止めてしまったんだ」

「学校で、まじめであろうとすれば、教師は、いつかは生徒とぶつかり合うことになる」

「俺たちはそれをうまくかわしているだけだな」

「うまくかわすなんてことは、K子先生にはとても出来ない」

「K子先生は、俺たちのように、怒鳴りもせず、罰でおどしたりもしないで、生徒を、静かに勉強に集中させようとしていた」

「そのための授業の準備に、全精力を使い果たしたんだ」

「確かに、病室のK子先生は、抜け殻のようだった」

「K子先生がそうなる前に、俺たちに出来ることはなかったのか」

「《適当にサボれ》位のことしか言えなかった」

「K子先生は本当の教師になりたかったんだ」

「本当の教師って何だ」

「サボりもせず、怒鳴りもしないで、ちゃんと生徒と向き合える教師だろうな」

「K子先生が、そうなるうとしたから、あの悲劇が起こったんじゃないのか」

「一人で何もかも背負い過ぎたんだ」

「文学や芸術をやる人が行き詰まって自殺をすることがあるな。K子先生の場合は、それと似ているような気がする」

「そう。そこだ。自分の限界を知って、そこから先は、何か、ある大きなものにゆだねる。それが出来ないと、必ず行き詰まりがくる」

「大きなものって何だ」

「それが何であるかということ、教師が、生徒と共に、体験することが、教育じゃないのか」

「おい、何やってるんだ」

放課後の職員室で、同僚の呆れたような声に、ふと見ると、Y先生が、机の上に生徒の名簿と

教科書を置いて何かをやっている。どうやら質問を考えているようなのだ。

「まさかK子先生と同じことをやろうというんじゃないだろうな」

「いや、その通りなんだ」

「ええっ！ 本気か？」

「本気だ」

一瞬職員室がしんとした。

しかし考えてみれば、あの我々だけの通夜の時、みんなの頭をかすめた \wedge 甲い合戦 \vee という思いを、具体的に形に表せばこういうことになるのかも知れなかった。

K子先生が果たせなかった理想。その実現への途上でK子先生が倒れたその場所から、我々が理想を引き継いで前進しなければならぬ。それを我々は暗黙の内に誓い合ったのだ。

それにしても大胆といえば大胆、芸がなさ過ぎるといえばそうなのだが、Y先生の気持ちは痛いほど分かる。何かをせざるにいられないのだ。

《他に何が出来る？》と言われれば、すぐには頭にも浮かばない。

出し抜けに一人の同僚が口を開いた。

「数学のグラフで、曲線が縦軸や横軸に近づいてゆくのだが、いくら近くなっても絶対に軸にくっつかない、というのがあったらどう？ 限りなく近づくけれど、どこまで行っても到達しないんだ」

「それが教育だ、と言いたいのか」

「まあ、そんな所だ」

「確かに教育が目標に達した、なんてことがあったとしたら、それは幻想だろうな」

「じゃあ、教育はいつまでたっても目標に達しないのか。教育に終わりはない、ということか」

「そうだな」

「K子先生のように、途中で挫折しても、それが教育の本来の姿だというわけか」

「そうだ。挫折しても、その地点で教育は完結している」

「でも、永遠に未完成なのが教育じゃないのか」
 「未完成であつてもいいんだ。教育のどこを切つても、理想がほとぼしり出れば、その教育は、未完成のまま、完結しているんだ」
 「そうだな。どんな芸術作品でも、〈これでいい〉という地点はないだろうな」
 「もしあれば、そこで芸術の生命は終わりだ」
 「生命というものは、未完成のまま、いつも完結しているんだな」

夢を見た。

K子先生が立っていた。

授業中の姿ではなかったが、手には生徒の名簿と質問のノートを持っている。

静かにほほ笑んで、我々のほうを見つめている。

私と何人かの同僚がK子先生のほうを見ている。

〈K子先生。〉と言おうとするが、声が出ない。

K子先生は、手に持っている名簿とノートを我々のほうに差し出した。

それを受け取ろうとするが、いくら手を伸ばしても、届かない。

みんな泣いている。

K子先生だけが静かにほほ笑んでいる。

そこで目が覚めた。

涙で枕が濡れていた。

学校でY先生に夢の話をした。

黙って聞いていたY先生の目に涙がにじんでいる。

しばらくして、Y先生が口を開いた。

「やっぱりあれを続けるよ」

その晩居酒屋でY先生を囲んで、我々は話した。

「K子先生と同じことをして、同じように挫折したのでは何にもならないからな」

「それではK子先生の死が無駄になってしまう」

「ではどうすればいいんだ」

「K子先生の挫折の意味を、みんなで考えようじゃないか」

「K子先生は何もかも自分一人の責任だと思いつ込んだのじゃないのか」

「教室では教師はいつも孤独なんだ。何か失敗しても、その結果は全部一人でかぶらなければいけない」

「それはその通りだが、その失敗を最終的に引き受けてくれるものが、教師の背後には、あるのじゃないか」

「主任とか校長か」

「いや、そういう組織や制度になって現れる、もっと前のものだ。何と言ったらいいのか分からないが、学校を生み、教育を生んだ、もとの力のようなものだ」

「その力が、我々を教師にしているというわけか」

「そうだ。だからその力が最終的にすべての責任を負ってくれるんだ。我々はその力を信じて、

自分の出来る精一杯のことをやればいいんだ」

「その力というのは、宇宙的なものなんだな」

「愛と言ってもいいだろうな」

「K子先生もその力で教師になったんだろう」

「それははっきりと自覚していたら、あの悲劇は起こらなかっただろうな」

（1999年6月～12月『はまなす』第34～40号）



はまなすの花

「オニトケ先生の取り組み」

我々の学校に、「鬼」というあだ名で、生徒から恐れられている先生がいる。と言っても、鬼のような顔をしているわけではない。むしろ、いつもこやかで、柔和で、礼儀正しく、謙虚である。体つきも頑丈ではなく、全体から優しさがにじみ出ているようである。「鬼」というよりむしろ「仏」のような感じさえする。したがって同僚教師は、「鬼おにぼとけさん」、略して「オニトケさん」という尊称を、彼に奉っている。

生徒の「荒れ」に苦しむ我々の心にたえず浮かぶのは、オニトケ先生の姿である。彼は、どうしてあんなに生徒に恐れられるのだろうか、どんな授業をしているのだろうか。

我々はオニトケ先生に頼み込んで、彼の授業を見せてもらうことにした。

「ああ、いいよ」と二つ返事で快く承知してくれたので、我々の空き時間に、先生の後につ

いて、教室に入った。

驚いたことに、生徒が全員席についている。普通なら、半数以上の生徒は、席を離れて勝手なことをしている。教室に入らないで、廊下や他の教室にいる生徒もいる。そして、教師は一応生徒に注意はするが、聞き入れない生徒に対しては、それ以上追及しようとしなない。そこで時間を取られては、授業が進まないからである。

かつてのK子先生の自殺の遠因は、問題生徒を深追いしたためとも言われた。ほとんどの教師は、自分の限界を適当なところに設定して、それを越えて問題生徒と深くかかわらない。いわば逃げているのである。限界を越えれば、自分が傷つき、場合によっては、命を落とす危険に身をさらすことになるからである。

生徒は、そういう教師の「逃げ」をすぐ見抜いて、ますます好き勝手に行動する。そして、教師は、そのたびに、腰を引いてゆき、自分の

限界を後退させる。かくして、教師と生徒との距離は開く一方である。

オニトケ先生は、生徒に恐れられてはいるが、生徒との距離が開いていくのではない。彼が「鬼」と言われるのは、生徒のために真剣に怒り、一生懸命に教える、「授業の鬼」になるからである。彼は決して生徒を甘やかさない。授業中、生徒をたえず緊張させる。彼の口癖は「一期一会」である。彼は、「この授業が自分の生涯の最後の授業だ」と自分に言い聞かせながら教室に入る」と言うのである。鬼気迫る感じがする。まさに「鬼」である。

オニトケ先生の授業を見て、我々は、彼が生徒に恐れられる理由が分かった気がした。

彼は、授業中、生徒の動きに注意を払うことに全力を集中している。生徒のどんな動きも、彼の目を逃れることはできない。こっそり内職をしている生徒を、目ざとく見つけると、「何

している」と、彼は静かに聞く。その瞬間、教室全体に緊張が走る。姿勢を崩して、机に寝そべる者がいると、「気分が悪いのか」と声をかける。それだけで、その生徒は姿勢を正す。もし本当に気分が悪いということが分ければ、直ちに保健室に行かせる。

彼は、たえず生徒の方を向いて授業をする。ほとんど板書せず、板書内容はすべてプリントして、あらかじめ生徒に渡してある。生徒がプリントの問いに答えてゆくという形で、授業が進められる。答えは、生徒を指名して、確認する。更に彼が答えを繰り返して、次に進む。その2度の確認を、注意して聞いていなかった生徒があると、彼は厳しく叱る。その時の彼の語調は、教室の後ろで見ている我々がドキッとするほど、激しい。

例えばこうである。「お前はこの授業を何だと思っているんだ。おれは命がけで授業をしている。お前も命がけで授業を受けろ！」

その気迫は、まさに生徒をして「鬼」と呼ばしめるものである。

それは、我々同僚教師に対する痛烈な批判でもあって、容赦なく我々の中にあるサラリーマン根性をえぐり出す。我々が、いかに自分を甘やかしていたか。いかに甘い授業をして、生徒を指導する厳しさを失ってきたか。「命がけの授業」なんて誰も考えたことがなく、たかだか「授業技術」の工夫でお茶を濁してきた。そのツケが、生徒の「荒れ」なのだ。

後で、我々はオニトケ先生に聞いてみた。

「やっぱり、おれたちのどこかに生徒を恐れているところがあるけど、先生にはそれがないんだね」

「いや、おれが一番恐れているのは、生徒なんだよ」

信じられない答えが返ってきた。

「生徒を恐れない教育は間違っていると思う」とオニトケ先生。

「でも、あんなに厳しく叱れるのは、生徒を恐れていないからではないのか」

「恐れているからこそ、厳しく出来るんだ」

「ええ？」

オニトケ先生が生徒を一番恐れているなんて信じられなかった。そして恐れているからこそ、生徒に厳しくできるのだという、オニトケさんの言葉には驚いた。

「生徒は怖い存在だ。生徒は検察官であり、裁判官なんだ。教師が怠けると、容赦なく追及し、厳しく断罪する。決して生徒の目を逃れることはできない。ごまかしはきかないんだ」

「それは分かる。しかし、それと、生徒に対して厳しくするということと、どう結びつくんだ」

「真剣勝負で生徒にぶつかるといふことさ」

「うーん。それがいつも先生が言っている（一週一会）ということか」

「授業というのは、食うか食われるかの修羅場

なんだ」

「そうすると、教師と生徒は敵対関係にあるということになるな」

「スポーツの練習で、お互いに鍛えあうためには、全力でぶつかり合わなければならぬ。決して手加減してはいけないんだ」

オニトケ先生の意図は分かった。決して相手に自分の隙を見せず、相手の隙も見逃さない。教師が授業に集中することで、生徒も授業に集中するのだ。

しかし緊張の連続で、教師も生徒も疲れてしまふのではないだろうか。授業には、楽しく、おもしろく、ということもなければならぬのではないだろうか。スポーツの練習にも、中休みがあるように。

「中休みはある」とオニトケ先生は言う。教師が意図的に中休みを作らなくても、自然に生まれてくる、と言うのだ。

生徒がトントンカンな答えをするときがある。

自然に笑いが生まれる。それがその生徒に対するあざけりの笑いにならないように、教師がうまく受け止めて、和やかな雰囲気誘導する。そこが教師の腕の見せ所だという。

生徒が何度と同じ間違いをすると、その時こそ、雰囲気や和ませる絶好の機会だと言う。先生はわざと大げさにゆっくり正しい答えを言う。生徒はそれを反復するのだが、1度では成功しない。また先生は大げさにゆっくり正しい答えを繰り返す。このやりとりが何度も続くうちに、間の抜けた、とぼけたおかしみがかもし出され、教室に笑いが広がる。そしていつの間にか、生徒全員が正しい答えを身につけてしまうのだ。

実際、オニトケ先生の授業中にそういうことが起こり、生徒たちだけでなく、見ている我々自身も、一瞬緊張から解放されたことがあった。

オニトケ先生だからできるのであって、優しい先生や、気の弱い先生には、荒れている生徒

集団を「抑える」ことは無理なのではないだろうか。

「無理ではない」とオニトケ先生は言う。

「生徒から目をそらさないことだ。生徒に背を向けて授業をしない。板書はできるだけ控える。そしてたえず生徒の反応を見ながら授業のやり方を変えてゆかないと、必ず生徒は退屈する。生徒の気配に敏感であることが大切だ」

「なるほど。しかし生徒の反応に合わせてばかりでは、進度も遅れるし、生徒のペースに乗せられてしまって、教師の主体性がなくなるのではないか」

「授業の主導権は、決して生徒に渡してはならない。教師はコーチであり、監督なのだ。一人一人の能力にあった指導をしながら、チームを一つにまとめて、引っ張ってゆくのだ」

「自殺したK子先生は、一人一人の能力にあった指導をしていた。そのために命を縮めたのと違うか」

「確かにそうだ。そのK子先生の挫折からおれたちが何かを学びとらなければ、K子先生の死は無駄になる」

「おれたちは毎日K子先生の弔い合戦をしているんだ。今それ以上に何ができる」

「あの時、大村はま先生だったら、どうしたろうか、と考えているんだ」

大村はま先生は国語教育で有名な先生で、我々も先生の著書の読書会をしたことがある。オニトケ先生が大村先生の著書をよく読んでいることは、みんな知っている。

オニトケ先生の考えていることが、ようやく分かってきた。

大村先生は、東京女子大を出たあと、10年間高等女学校教諭をしたお嬢さん先生であった。

日本の敗戦で、先生自ら戦争責任を引き受けようとして、新制中学校が発足するや、高等女学校を辞して中学教師となり、一面焼け野原となっていた東京のどまんなかに飛び込んだ。教

室が足りないのです、100人を1クラスとして授業を始めたが、敗戦の混乱の中で野放しにされていた子供たちであるから、野獣のようになっていて、手がつけられない。苦しんだあげく、新聞とか雑誌とかいろいろのものの中から、100種類の教材を作り、それに一つ一つ違った問題をつけて、一人一人の子供たちに説明しながら渡していった。するとあれほど荒れていた子供たちが、机も椅子もない教室で、床にうずくまったり、壁にへばりついたりして、一生懸命勉強し始めた。

そのいじらしい姿を見た先生は、教室を出て、思い切り泣いたという。

「大村先生の教育の原点は何だと思う？ 野獣のように荒れていた子供たちが、大村先生から課題を与えられ、そのやり方を教えられた途端、むさぼるように勉強し始めた、その子供たちの姿の尊さに、先生は打たれたんだ」

「それは我々が毎時間授業でやっていることと違うのか。生徒に課題を与え、説明するのは、教師なら誰でもやっているではないか」

「しかし、生徒が騒ぐと、我々の口癖になってるのは、〈静かにしろ〉〈席に着け〉だろうか？」
「それは当然言わなければならない言葉ではないのか」

「大村先生も、〈静かにしなさい〉と言われる。けれども、我々と違うところは、《心に冷たい涙を流し、慙愧にたえぬ思い》で言っておられる点だ」

我々は、先生の「教えるということ」という本の中に、そういう言葉があったのを思い出した。

先生は、騒いでいる子供たちを静かにさせる対策を持つことができない自分の無力を心から恥じて、敗北宣言の形で〈静かにしなさい〉と言われる。《自分は教師としての仕事を果たせなかった。申し訳なかった》という気持ちで、

「ご自分を責めておられる。へ静かにしなさい」は、生徒を責めている言葉ではなく、先生ご自身を責めておられる言葉なのだ。

「それではK子先生と同じではないか。K子先生は、全生徒を自分一人の責任として引き受けて、その重みにつぶされてしまったじゃないか」

「大村先生は、その重みに耐えるために、いつも原点に帰って、子供たちの学ぼうという心の尊さから出発される。そしてその尊さを守るための《しつけ》をされるんだ」

確かに、それも「教えるということ」に書かれてあった。

子供たちは、何でもないことでも、すぐ隣席の子供に聞く。そこからザワザワが始まって、教室全体に広がってゆく。人に寄りかかって、人の顔を見てからでない、何もできないという、自立心の無さが、教室に無秩序・無政府状態を作り出すのだ。

大村先生は、まず子供同士の教え合い・もた

れ合いをやめさせた。自分で考え、自分から行動できる人間が集まって、本当の秩序が生まれるのである。自立した人間だけが、たえず周りのことに注意を払い、自分のわがままをコントロールできるのである。

「おれは、最初の頃は、しょっちゅう生徒を怒鳴っていた」

とオニトケ先生は言う。

その頃の先生のイメージは、まさに「鬼」であった。生徒は先生の前では、いつもおびえていた。我々同僚ですら、オニトケさんから、たえずピリピリと張り詰めたものを感じていた。

「それが、いつの間にかあまり怒鳴らなくなっただんだ」

「大村先生の本を読み出してからか」

「そうだな。やはりおれ自身の中に教育に対する態度が確立していないということ、自覚してからだ」

「どういう態度なんだ」

「教育のプロという態度だ」

「プロだったら怒鳴らないのか」

「いや。プロでも怒鳴る。しかし怒鳴らねばならない自分の未熟さを自覚しながら、怒鳴るのだ。未熟な自分に向かって怒鳴るのだ」

そうか。自分に厳しいオニトケさんには、禅僧のような威厳が備わっていて、それが周囲の雰囲気を引き締めるので、次第に怒鳴る必要がなくなつてゆくのだ。

我々がオニトケさんの授業から学ぶことをまとめると、次のようになる。

1. 教師が姿勢を正して授業に臨むこと。
2. 周到な準備のもとに授業を進めること。
3. しかもその準備にとらわれず、たえず生徒の動きに注意を払うこと。
4. そして生徒を自立した人間に育てるために、厳しくしつけること。

しかしこれはあくまで中心の骨格であつて、

その肉付けとなるのが、オニトケさんの二十数年にわたる体験の中から蓄積されてきた授業のコツであり、指導の急所である。我々は、我々自身と後進のために、その内容を公開してくれるように、オニトケさんに頼んだ。

「新年度の授業が始まつてからでは遅い」とオニトケさんは言う。前年度の1月からオニトケさんの準備が始まるのだ。

理想を言えば、まず、次年度に担当する生徒たちの成績や人物、その他ありとあらゆる資料を集める。しかし残念ながら、現在の学校制度では、3月末にならないと、次年度にどの生徒たちを担当するのか分からない。分かり次第大急ぎで資料を集めることになる。

次に教科書その他の教材を綿密に調べ、そこから何を学び、それをどう教えるかを考える。しかし4月になつても、教科書さえ、教師の手に入らないことがある。

オニトケ先生は言う。

「教える内容と、教える相手がはつきり分らないまままで授業を始めるなんて、プロとして一番恥ずかしいことじゃないか。プロとしての良心があるなら、そんなことに耐えられるはずがない」

「プロだからこそ、それぐらいのことは出来るはずだ」というのが、管理者の言い分だろうなあ」

「生徒を入学させるときは、あらかじめ調査書・推薦書で生徒のことを調べ、更に試験・面接で十分な資料を加えて、入学までには、生徒に関する情報をほぼ完璧に手に入れておきながら、授業のためには、なぜ行き当たりばったり・出たとこ勝負のようなことをするんだ」

確かにオニトケさんの言うとおりである。生徒を選抜するためには、あらゆる資料を集めて、それを十分活用するが、授業のためには、その資料は、クラス分けの参考にする程度で、ほと

んど使っていない。

新年度の授業が始まる3カ月前から、教師が教科書を手にして、生徒の実態を把握していることが出来れば、ほぼ完璧な態勢で授業にのぞむことが出来る。しかし現状では、4月に入らないと、教科書も担当学級も分らない。

そこで、始業式までの約1週間の間に、オニトケさんは、鬼のような形相で、授業の準備に取り組まざるを得ないのだ。

彼が最初の授業で配るプリントには、「授業の進め方」という題がつけられている。

初めに「何のために勉強するのか」というテーマで、教科の目標が書かれている。その中で、我々の目を引くのは、「人格形成のための学習」という章である。〈物事を細かく見る能力を養う〉とか〈一つの事に辛抱強く取り組む能力を養う〉という項目がある。「しつけ」がはつきりと意図されているのだ。楽なほうに逃げようとする生徒に、「無心になって目の前のことに

全力を尽くせ」と厳しく要求している。

次のテーマは、「授業の実際」である。これが実に細かい。

まず第1は「基礎から徹底的にやる」とある。小・中学校で習ったはずの事が全然分かっていない生徒が実に多いのだ。漢字が読めない。アルファベットが読めない。まして漢字やアルファベットが満足に書ける生徒はきわめて少ない。その上簡単な加減乗除が出来ない。中学1年どころか、小学1年程度の国語算数の能力さえない生徒がいるのだ。

やむなく、彼は教科書を使わず、自作のプリントを使って授業を始める。

（2001年1月～7月『はまなす』第53～59号）



「Y先生塾を開く」

最近Y先生の顔に疲労の影がにじみ出ていることに、我々は気づいていた。

「K子先生と同じことが、また始まるうとしている。我々はそう感じた。」

居酒屋にY先生を呼んで話し合った。

「今の学校の忙しさの中で、あれをやるうとすれば、またK子先生と同じことになるぞ」

「分かっている。今そのことを考えていたんだ」

「じゃあ、このまま続けるんじゃないんだな」

「うん」

「どうするんだ」

「まだはつきり決めたわけではないが」

「何を？」

「学校をやめようかと思っている」

「ええっ?!」

いつものY先生流である。大胆で突飛なことをしてかすのは、今に始まったことではない。

親友のH先生によると、その傾向は中学時代からあったが、大学を選ぶ時期になって『噴火』したという。牧師になると言い出して、両親と衝突したらしい。高校の担任と両親にH先生も加わって、説得したが、耳を貸さず、強引に神学校へ入ってしまった。

神学校でもおとなしくしていられず、学生運動に熱を上げ、退学寸前までいったが、学校のお情けで、卒業させてもらった。そんな彼の、どこを見込んだのか、ゼミの主任教授が、彼に助手になって学校に残るように言ってくれた。ところが彼はそれを蹴って、ある教会の伝道師になった。しかし1年もすると、また『持病』が出て、『僻地に行く』と言いだし、どこまでエスカレートするか分からない彼の行く末を案じた両親は、アメリカの知り合いに頼んで、彼を留学させる手はずを整えた。そんなレールに乗る彼ではない。今度は学校の教師になると言って、教職課程の通信教育を受け始めた。公

立学校の教師になった彼を見て、両親は「やつとこれで落ち着いてくれる」と胸をなで下ろしたが、それは甘かった。またもや《僻地塾》が出た。校長に僻地校への転任願いを出したのだ。校長は承知せず、教育委員会へ頼み込んで、彼を指導主事にするお膳立てを進めようとした。しかし頑として受け付けない彼にみんな困り果てていたところへ、あのK子先生の事件が起こったのである。

「やめてどうするんだ」

「塾をやる」

「ええっ?!」

Y先生とご両親の衝突が再燃した。ご両親の言い分は、「塾では収入が不安定だ。嫁と子供を養って行けるのか。3人の子供の学費をどうするのか。独身のときならいざ知らず、家族がいることを考えろ。無責任なことをするな」ということで、我々も全く同意見だった。

Y先生は「僕が家族を養うのではない。神様が養ってくださるんだ」とうそぶいている。神様を持ち出して、夢物語みたいなことを言うY先生に、我々はもちろんついて行けない。しかしこのまま放っておいたら、きっとまた暴走を始めるだろう。そうなると頭に血がのぼって、まわりの状況はいつさい見えなくなり、何かにぶつかって自爆するまで走り続けるのが、目に見えている。

当の本人はすこぶるご機嫌で、悲愴感など全く無く、ふだんより生き生きして来た。Y先生をよく知っている我々から見ると、これが危険な兆候なのだ。すでに病気は深いところまで進んでいるのである。今手を打たないと取り返しがつかなくなる。

居酒屋にY先生を誘うと、にこにこしながらついてきた。楽しくてたまらないといった様子である。

「あのな。おまえは楽しいかもしれないが、家

族はどうなんだ」

「俺が楽しければ家族も明るくなるに決まってる」

「何を言ってるんだ。家族がどんなに不安に思っているか分からないのか」

「俺だって馬鹿じゃないから、それぐらいのこととは分かってる」

「じゃあ、家族を安心させるようにすればいいじゃないか」

「人生に不安はつきものだ」

「だからおまえは馬鹿なんだ。わざわざ不安を呼ぶようなことをしておいて、それを人生のせいにするな！」

何を言っても、にやにやしていて全くこたえない。蛙のつらに水である。

そこで我々は戦術を変えた。

「いったい今の学校のどこが問題なんだ」

Y先生のゆるんでいた表情が少し引き締まった。作戦が当たったのだ。

「それはおまえたちもよく分かっているじゃないか」

「分かっているつもりだが、ことの本質まで突き詰めたことがない。だから今それを話し合いたいのだ」

「よし。それなら付き合おう」

やがて酒がまわったY先生がしゃべり始めた。

「まず今の学校の問題点を挙げてみる」とY先生。立場が逆になった。詰問されているようだ。

「忙しさだな」

「それは時間的な面だけじゃないだろう」

「時間的でない忙しさって何だ」

「授業をするエネルギーの大半は、生徒の態度を注意するのに費やされてしまつて、肝心の教えることに行き着くまでに、教師の体力が尽きてしまつているんじゃないか」

「そうだ。〈教室に入れ〉〈席につけ〉〈教科書を出せ〉〈静かにしろ〉〈ガムをかむな〉〈トラン

プをやめる」としよっちゅう怒鳴っていないければならないし、黒板に字を書いている間に教室から出てゆく生徒がいれば、それを連れ戻さなければならぬ。そんな状態で1時間の授業をして、いったい何を教えることができたか。はっきり言って何も教えられていない」

「授業中生徒がジュースを飲んだり、たばこを吸ったりしていても、黙認している先生がいる。生徒が騒いでも淡々と授業を進めているが、ほとんどの生徒は聞いていないし、はじめに聞くうとする生徒は、回りがやかましくて、先生の声が聞き取れないでいる」

「騒いでいる生徒に注意しても、無視するし、さらに注意すると、暴力で立ち向かってくる」

「苦心して作った教材のプリントを配ると、破って丸めて教師の顔に投げ付ける」

「突然立ち上がったって教室の窓ガラスを割る」

「歌を歌い出す」

「プロレスごっこを始める」

「そういう無政府状態になる可能性はどのクラスにもある」

「どうしてか考えたことがあるか」とY先生。

「対応に追われて考える暇もない」

「スクールっていうのはラテン語のスコラ、つまり〈暇〉から来ているっていうじゃないか」

「聞いたことがある」

「暇を保証するところが学校なのに、その学校に暇がないとはどういうことだ」とY先生。

「何が言いたいのだ」

「今の学校は、学校でなくなっているんだよ」

「まず、まともに授業をしようとすれば、十分準備をしなければならない」とY先生。

「そうだ」

「その暇があるか」とY先生。

「ない」

「授業が終われば、小テストの採点と次の授業の計画を立てなければいけない」とY先生。

「それをゆっくりやってている暇はない」

「教材のプリントを作らなければいけない」と
Y先生。

「そこまで手が回らない」

「生徒の興味をそそるような新しい教材を考えなければならぬ」とY先生。

「もう分かった。結局今の学校には、教師が授業に打ち込める暇もなければ、教師にそうする気力も体力もなくなっていると言いたいんだな」

「そうだ」とY先生。

「だから学校をやめて塾をやるというのは、問題のすりかえじゃないのか。でなければ逃避だ」「どうしてだ」とY先生。

「だって学校で起こっている問題を、学校の外で解決しようとしているじゃないか。どうして学校にとどまって解決しようとしなんだ」

「そうしようとして、結局できなかつたから、K子先生は死んだんじゃないのか」とY先生。

「いや。おれたちは学校にとどまって、出来るだけのことをやってみるつもりだ」

「おれは学校の外で、本当の学校のあり方を探ってみる」とY先生。

「探ってみるといつても、方向も分からなければ、探りようがないだろう」

「大体わかつている」とY先生。

「どう分かっているんだ」

「家庭だ」とY先生。

「何？ 家庭がどうなんだ」

「家庭が学校のひな型なんだ」とY先生。

それを聞いて、我々にはびんとくるものがあった。K子先生は、学校の中に家庭を実現しようとしたのだ。学校を家庭にしようとしたのだ。

しかしそれは、今の学校では無理なことだった。学校が本来のあり方をしていけば、家庭をモデルにした学校形成が可能である。学校の本来のあり方こそ、家庭だからである。

学校教育の限界を認め、塾に教育の理想を託そうとするY先生の考えはよく分かったが、我々としては、全面的に彼の考えに賛成するわけにはいかない。彼の考えを突き詰めれば、本当の教師であろうとするなら、学校を去るべきである、ということになってしまふ。

学校という場所の持つ教育力というものを、無視することはできない。たとえ塾であっても、塾の持つ教育力は、学校と同質の場所から来ている。学校も塾も、同じ一つの教育力によって営まれるのだ。

その教育力の働き方は、学校と塾とは違ってくるだろうが、学校を否定して、塾だけを認めようとすることは、教育力の働き方を限定してしまうことになり、結局教育力そのものの否定につながる。

塾に働く教育力は、学校にも働いている。その教育力が我々を教師にしたのだ。学校のあり方が間違っているとすれば、学校を本来のあり方

に引き戻してくれる力も、その教育力なのだ。

Y先生のいう「学校のひな型としての家庭」こそ、人間の世界に、教育力が最初に働き出す場所である。

しかし、現実のすべての家庭が、学校のひな型になりうるわけではない。

私はかつて三井浩先生の講義で、悪い家庭の類型として次の三つを教えられた。

1. 専制的家庭。 2. 無政府的家庭。 3. 多数決的「民主的」家庭。

1は、父の原理が強く、子を抑え付けて、指導と強制に走り過ぎる家庭である。

2は、母の原理に流れて、子を受容するあまり、子の言いなりになり、甘やかしてしまう家庭である。

3は、子を指導もせず、受容もしないまま、子との対話を避け、ただ時代と社会の流れにまかせて、親としての責任を取ろうとしない家庭である。

理想的な家庭とは、上記の三つの逆を考えればいいわけである。すなわち、1. 指導性、2. 受容性、3. 対話性を兼ね備えた家庭である。

我々も、この三つを兼ね備えた教師でありたいが、ともすれば、悪い三類型のどれかの傾向が強くなってしまいがちである。周囲の教師たちを見れば、必ずと言っていいほど、悪い三類型のどれかに属している。すなわち、専制的教師、無政府的教師、「民主的」教師のどれかである。学校も、悪い三類型に分類出来る。現代は無政府的学校と多数決的「民主的」学校が増えていると言っていいだろう。

Y先生との話し合いの中で、気付かされたことは、共同生活の場としての学校の持つ教育力であった。しかし、同時に、その教育力が正常に働かない場合には、学校が、おそるべき悪の支配するところとなる、ということも確かである。

一人の生徒の中にひそむ野獣性が、他の生徒

の野獣性と出会って、共鳴しあい、増幅しあって、さらに野獣性の輪を広げる。学級全体が、その野獣性に圧倒され、制圧されてしまうと、もう教師の手に負えなくなり、暴力・反抗・破壊の横行する無法地帯となる。

もはや学級は、安心して勉強できる場所ではなくなる。善良な生徒は、恐喝・暴行・殺人の恐怖に震えながら、教師に助けを求めても、教師もどうすることも出来ない。教師自身も、校内の暴力に立ち向かう力を持たない場合があるし、まして外部から学校に入ってくる他校生・卒業生・暴走族その他の暴力に対しては、警察に頼る以外に方法がない。

教師が力で生徒の反抗を押さえようとすると、たちまち「暴力教師」「体罰教師」と決め付けられて、生徒と親からの糾弾の血祭りにあげられる。事なかれ主義の管理職や教育委員会からは、「生徒は神様」とささやく声すら聞かれる。

ある学校では、授業時間中に生徒が職員室で

遊んでいたりしても、教師は誰も注意せず、職員室でラジカセを聞いたり、トランプをしたり、たばこを吸ったりするなど、生徒はしたい放題を許されているという。

他の学校では、生徒が数名、授業中教室を出て、他の教室へ行き、生徒を呼び出して、空き教室に連れ込み、殴る蹴るの暴行を加えて、金を持つてくるように脅迫したという。

教師はそういうことを見て見ぬふりをしていく。自分の指導力に自信を失い、ひたすら毎日を屈辱に耐え、「大過なく」定年まで勤められることを願っている。

これが学校であろうか。教育であろうか。教師としての良心や誇りはどこへ行ってしまったのか。Y先生ならずとも、そう叫びたくなる。

だからといって、学校を逃げ出して、本当の解決はない。我々はあくまで学校にとどまって、「指導」と「受容」と「対話」への努力を続けてゆく。Y先生は、塾の中でそれを実践してみると言う。

我々はY先生の試みに対して、声援と助言を送ることを約束して、その夜は別れたのであった。

Y先生から「塾報」第1号が届けられた。

それを見ると、あまりいい滑り出しといえないようである。

公立学校の退職金をつぎこんで、自宅を改造し、黒板、椅子、机、謄写版を購入したが、その時点で既に予算を超えていた。

生徒あつめの宣伝ビラを作ったが、いっこうに生徒が集まらない。そのはずである。ビラには「当塾は進学塾ではありません」と明記されている。勉強の出来ない生徒の手助けをしつつ、精神的な教育も行うというのである。その理念は、まことに立派ではある。しかし今、世をあげて、いい高校、いい大学へ殺到している時に、わざわざ「進学塾ではありません」などと寝言のようなことを言う時代錯誤な塾に、誰が好き好んで行くだろうか。現状では全くの無収入に

なりそうである。

心配になってそつと様子を見に行くと、どうにか少数の生徒が来ているらしい。奥さんや知人が奔走してかき集めてくれたようだ。

その少数の生徒が、またバラエティに富んでいる。

知的障害児が3名、登校拒否生徒が1名、非行生徒が1名、一流進学校の生徒が4名。合計9名の塾生である。

「いったいこの塾はどんな塾なんだ」と聞きたくなるような構成である。知的障害児をはじめ、よそでは引き受けてくれないような5名の生徒が、最後の頼りとしてこの塾を選んだのは分かる。しかし一流進学校の生徒が、4名も、なぜ来ているのだろうか。

心配していた我々は、まずは生徒が来ていることにほっとしたが、その生徒の幅が極端に開いていることに不安を覚えた。あまりにも違い過ぎるのだ。

Y先生はすこぶるご機嫌で授業をしているらしいが、我々の不安とするところは、全く目に入っていないらしい。例のごとく、自分の夢にうつとりとしているようなところが感じられる。また病気が始まっているのだ。

我々は彼の病気に慣れているが、奥さんや子供たちのことを思うと、やはり放っておけない。塾が終わってから、Y先生を居酒屋に呼び出した。

Y先生の語る理想はこうである。

まず僻地で廃校になった学校の校舎・校地を「格安」で買い取る。そこに寄宿舎を建て増す。寄宿舎は金をかけて、立派なものを作る。それからまわりの山林や農地を「格安」で買い取る。そこでY先生と塾生たちの共同生活が始まるというのだ。

「あのな。いくら『格安』でも、1万や2万で学校が買えると思うか。それに山林や農地まで

『格安』で提供してくれる物好きがどこにいる？
寄宿舎に金をかけるといいますが、そんな金があるのか。

そもそも、そんな僻地に塾生が来るわけがない。

奥さんや子供たちはどうするのだ？」

「もちろん一緒に生活する」

「そんなこと、簡単に言えることじゃないだろう」

「簡単な話さ。今まで一緒に生活して来たんだから、これからもそうするだけのことさ」

「お前が生活に困って食えなくなったら、奥さんや子供たちはどうするんだ」

「生活には困らない」

「どこにそんな保証があるのだ。また神様を持ち出すつもりだろう」

「神様と言っても、どうせお前たちには分からないだろうから、さしずめ自然と言ってもいい。人間が死ぬのも生きるのも、自然の力で生き、自然の力で死ぬんだ」

Y先生の目がうつとりしてきた。また夢の世界に入り込んでしまったようなのだ。そんな今のY先生に、いくら「現実を見る」と言ったところで、耳を貸すはずがない。

再会を約してその晩は別れた。

後でY先生の話を反すうして見た。

「神様」の代わりに今度は「自然」を持ち出してきた。ひよっとするとY先生は「根本実在」のことを言いたいのかもしれない。

しかし「根本実在」は、Y先生の夢物語に登場して道化役を演じるような、薄っぺらなものであるはずがない。

三井浩先生によると、「根本実在」は、陰と陽・女子と男子に分離し、合一することによって、家庭を形成し、「自覚」する。家庭は、世界の形成作用を示す、教育のひな型である。その意味でY先生の目指している方向は間違っていない。問題はそれをどう現実に応用するかである。

(2000年1月～9月『はまなす』第41～49号)

「二つへの道 終回」

オニトケ先生とY先生の話をもとめると、次のようになる。

教師の目からすると、一方に、反抗する生徒と無気力な生徒があり、他方に、従順な生徒と勉強に対して意欲的な生徒がいる。そして、前者を抑え、時には排除し、後者を保護し、伸ばしてやりたいと思うのが、教師としての自然の情である。

しかし、反抗する生徒が、何かの理由で学校をやめると、必ずその後継者が学級に現れる。また、どんないい学級にも、一人は、必ず手に負えない生徒がいるし、逆にどんな騒がしい学級にも、必ず最低一人は、熱心に授業を聞いてくれる生徒がいるものである。この総体が、いわば学級の「生態系」である。

悪い部分を手術で切り取れば、必ずその個体に同種の悪が発生する。しかも「再発」の場合

は、往々にして手のつけられない「転移」である場合が多い。悪が発生したときの、最初の対応が運命を決める。

重要なことは、その状況が発しているメッセージを、まず聞き取ることである。従順な生徒も手に負えない生徒も、両者ともにメッセージを発している。学級は一つの生命体であって、相反する要素によって、バランスを保ち、生命を維持している。生命体のどの細胞も何かの使命をもって存在している。がん細胞であっても、使命を持ち、メッセージを発している。教師はそのメッセージを聞き取る鋭敏な耳を持たねばならない。

と同時に、総体としての学級が発するメッセージを聞き取らなければならない。総体の中には、生徒とともに教師が存在する。教師は生徒とともに学級が発するメッセージを聞かねばならない。すなわち、自分たちの発するメッセージを、自分たちが聞くのである。それが「自覚」

である。

しかし、そのメッセージは、実は自分たちが発しているのではない。「根本実在」が発しているのである。「根本実在」は、生徒となり、教師となり、学級となつて、重要なメッセージを発し続けているのである。

教育は、「根本実在」のメッセージを聞き、自らを「根本実在」の中に発見し、「根本実在」と一つであるという「自覚」を得る営みである。

オノトケさんとY先生の実践は、その「自覚」を得ることを目指すものであったのだ。我々も彼らの実践に学びつつ、いつの日か、彼らと同じ到達点に立って喜び合えることを祈って、杯を酌み交わしたのである。

(2002年9月『はまなす』第73号)



玉川大学スクーリング時、
小原先生、学友と

日旦塾の勉強

一、日旦塾とは

「旦」という字は、「日」の下に一本線が引いてあります。これは、今 太陽が地平線の上にあられた、素晴らしい日の出のすがたの象徴です。朝目がさめて、まだ心が動き出さない瞬間、その時心の中には何もないカラッポの状態で、過去も未来もない本当の 今 があるだけです。雲の切れ目から、やみをやぶって朝日がさすように、この 今 から、素晴らしいひらめきが、私たちの人生をてらしてくるので、ゆきづまって、どうしていいかわからない時、この 今 にかえりましょう。希望をうしなつて、くらい心になつた時、この 今 に目をさましましょう。

「旦旦」とは、朝な朝な、あきらかという意味で、まごころのこもつたようすをあらわして

います。この人生では、勉強でも仕事でも、ただ、だまってまごころだけささげてゆけば、なにも心配することはありません。結果はどうなるうと、私は、今、ただ、やることをやればいいのです。余計な心配や考えごとがうかんでくれば、そのたびに、今 にかえり、まごころをささげてゆけばいいのです。そうしてくりかえし、くりかえし、朝のカラッポにかえることをつづけているうちに、道ばたの小さな花も私たちに何かを語りかけている声聞きこえるようになりますし、落ちているゴミの声も、えんぴつ の声も、お茶わんの声も、はつきりきこえてくるようになります。この全宇宙のあらゆるものが、私のために何かを語ってくれているのです。その声も、私の心の中が、さわがしい妄想の音でいっぱいの中には、ききとれないのですが、カラッポになつて、しずまりかえつた心には、どんな小さなものも、自分の生命の一部であることがよくわかり、その気持ちがつたわつ

てきて、みんななつかしい兄弟姉妹であることが実感されるのです。

くりかえし、くりかえしカラッポにかえるけいこをするために、且且塾では、坐禪を勉強の土台としています。そのカラッポの中から、本当の知恵が輝きだして、ゆきづまりをきりぬける道をてらし、人間として生まれてきた意味をさとって、自分の中に、全宇宙のあらゆるものをゴッソリ入れてしまうような、ひろびろとした人生を生きることを願うからです。太陽の光は、あまねくひろく照らしてかぎりなくひろがってゆきます。そのようなすばらしい、希望まんまんの、さわやかな日の出の心を、勉強の姿勢にして学びましょう。

二、勉強とは何か

勉強とは何でしょうか。考えてみると、人間の一生で勉強でないものは一つもありません。ご飯をたべるのも勉強ですし、便所にゆくのも

勉強です。歩くのも勉強、夜寝るのも勉強、この世に生まれてきたのも勉強、病気になるのも勉強、自分の思うとおりにうまくゆくのもゆかないのも勉強、毎日の生活で出会うすべてのことが勉強です。

では一体何を勉強するのでしょうか。それは、出会うすべてのことが、自分の生命だということと勉強するのです。そうじをする時は、そうじが自分の生命なのです。そうじの中に、自分の生命をせいいっぱい発現させるのです。

ところが私たちはともすると、「そうじはいやだな」と思い、「早くすめばいいのになあ」と思ったりして、そうじのあとであそぶことや、家にかえることや、おやつのことや、今夜のテレビのことなどを考えています。おとなになると、「この仕事をすればどのくらいお金がはいるか」とか、「こうすればほかのひとにみとめてもらえるだろうか」とか考えたりしています。おとなも子どもも、早くこのいやなことがすん

で楽をしたいと思っています。

私たちのそんな思いをおいにかけてばかりいると、私たちは、本当のすばらしい生命から宙にういてとおくはなれてしまいます。本当の生命は足もとにあるのです。そんな先のことやほかの場所にあるものではありません。今、自分が出会っていることが、自分の生命なのです。どんなりっぱな思いがうかんでも、そんなものはさっさとやめて、今出会っていることにつかえるのです。

私たちの頭に思いがうかぶのはしかたがありませんから、うかんだらうかんだまま、あいてにしないで、ほっておくと、自然にきえてなくなってしまう。「そうじなんてつまらないなあ。しんどいなあ。でもやらなければいけないからしかたがないかあ。」なんていう思いが頭にうかんだら、それはそれでほつといて、ただ一所懸命そうじをすればいいのです。

思いをやめ、考えごとをやめれば、出会って

いることが自分の生命だということが、よくわかるようになります。出会っていることは自分の生命なのですから、とにかくやればいいのです。やっているうちにわかってきます。人間は、そういうふうにして、一生勉強してゆくのです。

では、学校の勉強とは何でしょう。それも勉強の一つです。しかし、「いい点をとらなければだめだ」とか「いい学校にはいれなければだめだ」というのは、頭の中にうかぶ思いですから、そんなものを相手にしてはいけません。それはほつといて、学校では授業中しつかり先生のお話をきき、宿題もきちんとし、試験勉強も一所懸命やればいいのです。勉強は人とくらべるものではありません。自分一人が、自分の生命をせいっぱい花さかせることです。くらべることとはほかの人にやらせておいて、自分はその花をせいっぱいさかせればいいのです。本当の「いい点」とは自分の花をせいっぱいさかせることであり、本当の「いい学校」とは

今自分がいる場所であり、自分自身のことなのです。

本当のことをいいますと、生命が生命を実現するのですから、まだならつていないことやおぼえていないこと、知らないことは、全部、もう生命の中にあるのです。生命は、まだならつたこともない数学や英語を全部知っているのです。知っているのにそれが出てこないのは、生命の光をさえぎっている雲があるからです。その雲のむこうでは、生命は光りどおし、知りどおしです。だから安心してその生命にまかせ、雲があればあるでよし、なければないでよし、どっちになっても自分は今せいっぱい勉強するだけでいいのです。するといつのまにか雲の切れ目からまばゆいような光ががやいていることに気がつきます。先のことや結果のことを心配する必要はありません。そんなことは生命におまかせして、自分はただ勉強すればいいのです。生命は、お日様のようにやさしく、あた

たかく、私たちの勉強を見守っていてくださいます。

三、生きる姿勢

さて、勉強とはどのようにすればいいのでしょうか。

上のべたように、生活のすべてが勉強ですから、生活の方をきちんとしてないで、学校の勉強だけちゃんとしようと思っても、そうはゆきません。どんな小さなことにもまごころをささげてゆくという姿勢が、生活のすみずみにゆきわたっておれば、それが学校の勉強にもあらわれてきます。そうじはなまけるが、勉強だけ一所懸命やるというのでは、その勉強も、キチガイに刃物をもたせるようなものであり、知恵ある悪魔をつくるだけになってしまいます。どんなにいい点がとれても生命の花がさいたことにはなりません。スピードをあげ、能率をあげても、ハンドルがくるっついていては、破滅にむかっ

てつっぱしっているだけになってしまいます。

小さなゴミも、私の目についたら、もうそこでゴミと私が出会ったのです。ゴミと私は同じ生命から生まれてきた兄弟ですから、なつかしい気持ちでゴミのことを考えてあげて、ゴミ箱の中に入れてあげなければなりません。その時ゴミは私たちにいるいろいろな大切なことを教えてくれるはずです。ゴミが目についた時どんな気持ちがあったか。だれがおとしたんだろう、と腹が立ったか。そうじしなければならぬ、めんどくさいなあ、と思ったか。なぜ自分がしなればならないのだろう、損だなあ、と思ったか。そういう思いが、生命の光をさえぎっている雲です。ゴミに教えてもらって、そういう思いを相手にせず、ただそうじをすれば、いつのまにかその雲はきえてしまいます。ゴミは、私たちにかその雲の光をくもらせているものを教えてくれる先生です。ゴミだけでなく、私たちが日常出会うすべてのことが私たちの先生であり、

この人生が学校なのです。

たとえば、ごはんの時はごはんが私たちの先生ですから、姿勢を正し、器を手にささげもつていただくようにします。ものをかむ音、すする音も高くせず、速度もまわりの人にあわせるようにします。お風呂にはいる時は、あとからはいる人のことを考えてはいらなければなりません。湯ぶねにはいる前に、体をあらひ、はいる時はタオルを湯ぶねにつけないようにします。お風呂の中では音を大きくたてないように、なるべく口をきかないように、しずかにします。便所を使ったら、中にあるぞうきんか、自分のチリ紙で便器のまわりをきれいにふいておきます。塾の勉強中には、けしゴムのかすはきちんとかす入れに入れ、先生の方へは足をむけず、先生にものをわたしたり、話したりする時は、すわってわたしたり話したりします。勉強がおわれば、ざぶとんについたゴミをとって、ざぶとんを机の下にいれるようにします。塾にくる

途中、ガムをかんだり、それを道にすてたりしないようにしましょう。

こういうことを毎日心がけて努力しているうちに、私たちの心はきよく、すみきつてきて、生命の光がすどおしに通るようになるのです。

四、正座

生命の光をくもらせないいちばん大切な修行はなんとといっても坐禅です。坐禅は、思いをやめ、考えごとをやめる、ただそれだけだからです。塾での勉強では、坐禅のかわりに正座をいたします。勉強のはじまる前とおわった後、しばらく、坐禅の心にかえて、思いをやめ、自分をカラッポにする修行をします。いい点をとろうとあせったり、わからないとあきらめたりする思いは、余計なことで、何にもなりません。それどころか、そんな思いのいうままになっていたら、からだはつかれるし、せつかく自分ももっている力も発揮できません。生命が教えて

くれる知恵を自分でおおいかくしてしまふことになります。そこで生命の知恵になにかもまかせきつて、なにも心配せず、考えず、思わな いけいこをするのが、正座です。生命の知恵が 私たちに、何をいうべきか、何をするべきかということを教えてくださいます。ただその知恵の命ずるままに生活すれば、何の心配も不安もありません。身も心も楽になります。余計なことをやめて、ただ今の勉強に一所懸命になる——これが正座の目的です。

五、質問

勉強で大切なことは、わからないことや、疑問に思っていることを質問することです。勉強のおもしろみは、なぜだろうか、なんだらうかと疑問に思つて、それがわかるというところにあります。ただあたえられる知識をうのみにしているばかりでは、ちつともおもしろくありませんし、食欲がないのに無理に食べさせられる

ようなものですから、消化不良をおこしてしま
います。また人と競争して勝つということが、
勉強の目的ではありません。いい学校にはいる
ためとか、いい点をとるためとか人に勝つため
とかいう目的で勉強する人は、目的がなくなれ
ば何をする気力もなくなってしまうです。いつ
も目の前にエサをぶらさげてそれでつってもら
わなければ、一歩も前へすすめない、なさけな
い人間になってしまいます。自分のねうちを人
にきめてもらわなければつまらないなんていう
人間ほどつまらない人間はありません。勉強す
ればするほどそういうつまらない人間になって
ゆくとすれば、またこれほどつまらない話はな
いでしよう。やはり勉強すればただけ「自己」
というものが光ってこなければなりません。「自
己」をしっかり生きている人にとって、競争と
いうことに会っても、その中でのほせず、絶
望せず、自分のペースを守って、最大限に実力
を発揮できるのです。競争があるから、やる気

がでてくる、なんていうのは、その人に「自
己」がない証拠で、そういう人は、いくらやる
気がでてでも、悪魔におどらされているだけで
から、どこかに無理が生じ、体をわるくするか、
ノイローゼになるか、たとえ何事もなくてうま
くいったとしても、むなし、さびしい人生で
しかありません。

先生やお母さんから、「勉強しなさい、勉強
しなさい」と尻をたたかれ、おймаくられるの
も、みじめな姿です。これでは牛や馬とかわり
ありません。勉強とは、しかたなしにするもの
ではありません。わからないから勉強するの
です。知りたいから勉強するのです。サーカスの
ライオンが、むちとえさで、芸をしこまれるの
と、わけがちがいます。ライオンが、火のつい
た輪をとびぬけると、入学試験に合格するの
とを、いっしょにはいけません。一生、調
教師のむちとえさを横目でみながら勉強し、い
い学校にはいり、いい会社に就職し、いい家庭

を持ち、お金に不自由せず、なんでもほしいものが手にはいったとしても、結局、みじめな人生です。一生、サーカスで芸をしては、ごほうびをもらう人生です。いくらしあわせになりたいたいといっても、ライオンのしあわせではこまります。そこには「自己」がないからです。

且塾での勉強は、まずだれよりもこの自分が勉強するのだ、ということをしつかり自覚してもらうことから始まります。そのため、先生の方から教えることはしません。わかからないことや、知りたいと思うことを質問すれば、その考え方や調べ方を教えてあげるだけです。そして、人にたよらず、自分の足で、この人生を堂々と歩いてゆく人間になってもらうことを目ざしているのです。

六、宿題

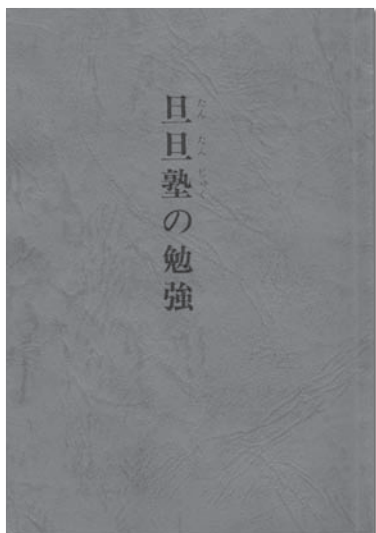
勉強というものは、気がむけばするし、気がむかなければしない、というようなものではあ

りません。生活のいつさいが勉強なのですから、気がむこうとむくまいと、すべきことはしなければなりません。その時々々の気分や衝動から出た行動は、たとえどんなにりっぱなものであっても、悪魔にそそのかされてしまったようなものですから、結局は破滅につながります。大切なことは、「勉強する気になった」とか、「勉強する気にならない」とかいう気分のお天気にふりまわされないで、すべきことを、ただ、する、ということなのです。

その意味で、毎日することを自分できめておいて、気分を相手にせず、だまってコツコツやる勉強の方法がいちばんいいでしょう。且塾では、そのために、自分で宿題をきめてもらい、家で問題をといたら、すぐ答えあわせをしてもいいです。これは、すぐ、その場で、自分ですることが大切です。まちがっていたら、もう一度やりなおし、それでもわからない時は、塾に来た時に質問してもらいます。あくまで、自分

が自分のためにする「自分の勉強」なのですから、答えをまるうつしにしてもなんにもなりません。そんなむだな、つまらないことはやめて、「ああそうか」と問題がわかるまで、じぶんでやり、先生に質問しましょう。

〔『且旦塾の勉強』昭和50～57年、入塾生に手渡したパンフレットの前半。〕



塾生たち

第三章 「人類の狂気を見つめる」

「人類の狂気 その1」

40年近く乗っていた車をやめた。

やめてみて、初めて分かったことがいくつもある。

その一つは、車に乗っている間に、知らず知らずのうちに、どんなに周囲に迷惑をかけていたか、ということである。

車がどんなに横暴な存在であるかということ、自分が歩行者になって見ないと分からない。狭い道路をわが物顔で突っ走る。粉じんや、泥や、排気ガスや、騒音を撒き散らす。夏は、車のエアコンから出る熱気が、路上の炎熱地獄に油を注ぐ。

二つ目は、車がいかに多くの資源を浪費しているか、ということである。

貴重なガソリンという化石燃料。洗車のための水。ガソリンを爆発させるための空気。資源も空気も、永久に無尽蔵に存在するかのよう錯覚して、浪費し、汚染し続ける。

三つ目にもっとも恐ろしいことは、車に乗っている間に、いつの間にか、正常な感覚を失ってしまうことである。

快適な空間の中で運転している時は、自分が王侯貴族になったような気分、資源も、道路も、使い放題である。歩いてゆける距離であっても車を使い、バスや電車を利用すればいい所でも、車に頼る。自分だけの空間が欲しいので

ある。

田舎道を走っているときは、往々にして、虫や、小動物をひき殺してしまふ。路上に猫などの死骸が放置されているのを見かけるが、車に乗っている間に、他の命に対して、無神経、無感覚になってしまう。

車という空間の中で、エアコンをかけ、カーステレオを鳴らし、缶ジュースとタバコを楽しんでいる間に、世界が自分のために存在しているような錯覚に陥る。

車は、人間の欲望を肥大させ、人間を盲目にし、人間以外の存在に対する配慮を失わせる。車が、どんなに環境に対して負荷をかけ、環境を破壊し続けているか。車の中という快適な空間は、それを忘れさせる。

「車に乗ると人が変わる」とはよく聞くことである。ふだんゆっくりしている人が、車に乗ると、荒っぽい運転をしたり、スピード狂になったりする。つまましい日常を送っている人

が、車の中では、気が大きくなり、浪費を何とも思わぬようになる。

そして、いったん車の魔力にとらえられると、もう車なしでいられなくなる。「車中毒患者」が地球上にあふれ、その結果、資源が枯渇し、地球が荒れ果て、やがて地球滅亡の日がやってくる。

(2002年10月『はまなす』第74号)

「人類の狂気 その2」

恐ろしいビデオを見た。

屠殺用家畜の映像である。見ているうちに、気分が悪くなった。

豚を移動させるのに、電流を流す。感電のショックと激痛で、キーキー悲鳴をあげて、逃げ出そうとする豚を、こん棒でなぐる。前足の片方が折れて、ブラブラになった豚が、それでもびっこを引き引き、必死で逃げようとする。

ほかにも、牛、にわとり、あひるなどが、狭

い、汚い場所で飼われ、殺される時を待っている。いよいよ屠殺場へ連れてゆかれるときも、まだ生きているのに、もはや、食肉として積み重ねられ、窒息寸前の状態で運ばれてゆく。

彼らの悲惨な状態を正視し続けることができず、ビデオを止めた。

我々が毎日食べている動物性食品は、こうした動物たちの、無残な死によって、作られているのである。

しかし、食卓で見るのは、すでにきれいに加工され、食欲をそそるように調理された彼らの姿である。あの残虐な殺戮さつりくの跡は、かき消されている。快適な環境と、談笑の中で、食事を楽しむ人間の耳には、あの動物たちの悲鳴が、届くことはない。

日本で、年間、食べ残す量は、スーパー・コンビニで、700万トン、家庭ゴミで、900万トンという。

ちまたでは、ギネスブックに載せてもらうた

めと称して、超大まきずしとか、巨大なお好み焼きを作ったりして、食べ物をおもちゃにして遊んでいる。テレビは、食品のコマーシャルと料理番組を連日流し続け、食料が無限に存在するような錯覚を蔓延させている。

世界の栄養不足または飢餓状態の人口が、9億人に達しようとしているというような現実には、偽りの繁栄に浮かれ騒ぐ人間には、見えていない。

しかし、しずかに澄んだ心には、世界の悲しみが映っているのである。

「大漁」

金子みすず

朝焼け小やけど

大漁だ

オオバイワシの

大漁だ。

浜は祭りの

ようだけど

海の中では

何万の

イワシのとむらい

するだろう。

(2002年11月『はまなす』第75号)

「人類の狂気 その3」

友人のA牧師と、夕闇迫る年末の住宅街を歩いていた。

道の両側に並ぶ住宅は、競いあうように、立ち木や窓などにクリスマスマスの豆電球を飾り付け、ピカピカ光らせている。

向こうからくる若い女性は、胸元に、何やら光るものをぶら下げている。目をこらしてみると、十字架のペンダントである。

「あの女性はクリスチャンだろうか」とA牧師に聞くと、

「いや、たぶん違うだろう」と言う。

私「じゃあ、なぜ十字架をぶら下げているんだろう」

A「ただのファッションさ」

私「ファッションと言えば、クリスマスツリーを飾っている家も、クリスチャンホームじゃないんだろうね」

A「そうさ。もし、ツリーや十字架を飾っている人が、全部クリスチャンだとすれば、この季節は、日本国中、クリスチャンであふれていることになる」

私「そうだな。結婚式を、キリスト教式でやる人が、全部クリスチャンであるとは限らないからな」

A「だいたい、クリスマススの意味も、キリスト教の信仰も分かっていないのに、『何となくカッコイイから』とか、『みんながしているから』という程度の理由で、人のあとについてまわり、人のマネばかりしている

のを、『群衆』と言うんだろうね」

私「キリストを十字架につけたのは、その『群衆』なんだろう」

A「そのとおりで」

私「このごろ、教会も『群衆』になっていないか」

A「突然切り込んで来たな」

私「教会も、クリスマスを祝うのに、世間のマネをして、ただ自分たちが楽しむだけのクリスマスにしてしまう傾向はないか」

A「『教会でもクリスマスをするんですか』と聞かれたことがあるな」

私「そう素直に引き下がられると、またホコ先を世間に向けざるを得なくなるけど、電飾を大がかりにやっているのが、神戸のルミナリエだろうな。なにしろ電球20万個を含めて、すべての費用が6億円という話だ」

A「6億円あれば、何万人のホームレスが助かるだろう」

私「人が集まるところにゾロゾロついてゆく人

間が、エネルギーをムダに使い、貧困を生み出し、地球環境を破壊しているという現実を、教会が声を大にして訴えなければ、教会なんて……」

A「おいおい。油断させておいて『不意打ち』とはひどいぞ」

(2002年12月『はまなす』第76号)

「人類の狂気 その4」

電気のスイッチをオンにすると、電気がつく。水道の栓をひねると、水が出る。

「そんなこと当たり前じゃないか」と言われるだろうが、本当に当たり前なのだろうか。

この「当たり前」が、すべての狂気の始まりではないのだろうか。

夜は部屋に電灯がともり、冬は暖房、夏は冷房という生活に慣れてしまったわれわれが、ある日突然それが「当たり前」でないことに気づ

かされた。それが、あの震災だった。

水も、ガスも、電気も止まり、電話も通じない。台所の煮炊きができない。トイレが流せない。風呂はもちろん、顔を洗うことさえままならない。冬の厳寒の中で、飢えと渴きが忍び寄ってくる気配を感じつつ、家族がローソクの火に身を寄せあつて、震えていた日々を思い出す。あの時、給水車が来てくれたことの、何と有り難かつたことか。

「有り難い」とは、「有り得ない」ということである。水が有るということは、本当は「有り難い」こと、「有り得ない」ことなのだ。

「あの時」が過ぎた今、その「有り難い」水を、トイレを流すのに使うとき、後ろめたさを感じないだろうか。風呂で、水を、「湯水のように」使うとき、やましきのようなものを感じないだろうか。

水道代さえ払えば、どんな使い方をしようが、個人の自由だと思っているが、いずれ水資源が

枯渇してしまう時が来る。その時初めてその自由が幻想に過ぎなかつたことに気がつくのである。

水道も電気もガスも使い放題というのが、本当の文化生活であろうか。おいしいものを好きだけ食べるのが、人間らしい生活だろうか。人間は食べ過ぎて病気になるが、犬や猫のほうに限度を心得ている。そして彼らは決して環境を破壊しない。

水洗トイレと冷暖房に支えられた生活は、決して文化生活ではない。快適さと便利さに目がくらんで、世界の貧困と地球の環境破壊が見えない、無神経で野蛮な野獣の生活なのだ。無力な良民を襲つて奪い取つた金品で、酒池肉林しゅちにくりんを樂しむ山賊が、現代人の姿である。

人間が生まれてこのかた、一瞬も休むことなく拍動し続けている心臓の存在、人間を支え続けている大地の存在、人間を生かし続けている空気くわいの存在、人間に熱と光を送り続けている太

陽の存在、それらは黙々と無料の奉仕を続けている。それを「当たり前」とするのは、人でのしの忘恩と言うべきである。

この人類が罰を受けずにすむはずはあるまい。

(2003年1月『はまなす』第77号)

「人類の狂気 その5」

ある宗教のトップを選ぶ選挙のために、擁立する候補者の選挙運動をする「選挙事務所」なるものが存在することを、最近知った。

そういうことを、その宗教の創始者が知ったら、何と言うだろうか。

「弟子は一人も持たない」と言った親鸞を始め、すべて真摯な宗教者は、組織や権力を持つことを極端にこぼんだ。まして、自分がトップの座につこうなどという野望は、微塵もなかった。

キリストは、群衆が自分を王にしようとしていることを知って、ひとり山にのがれた。

組織や権力にひそむ魔力が、宗教の息の根を止めてしまう、恐ろしい力を持っていることに、真の宗教者は気付いていたのである。

世俗社会では、数の多いほうを正しいとするという「多数決」が、正義の原理となっている。その世俗原理は、絶対に宗教の本質とは相容れないものである。

世界における信者の数で、宗教の優劣を決めるなどという、おろかな見当違いを、たとえば、世のジャーナリズムがやっているとしても、宗教者まで、それに乗せられて、「教勢」と称する数字で、自分の宗教の力を誇示するにいたっては、目をおおいたくなるほど、嘆かわしく、腹立たしく、あさましい醜態であると言わざるを得ない。

「世の権力者と関係を持つな」とは、どの宗教の創始者も、身をもって示してきましたのである。また「金と富とに警戒せよ」ということも、創始者が実生活において、実践して来た

ことである。

にもかかわらず、歴史を通じて、宗教が、金と権力に身売りして、みずから悪魔の罠に墜ちていった事例は、枚挙にいとまがない。

人間を墮落させる、もっとも強力な誘惑が、金と権力であるということを、世界で最初に言い始めたのは、宗教ではなかったのか。

その宗教が、良心を悪魔に売り渡して、金と権力の前にひざまずく情けない姿は、見るも哀れである。

その昔、菩提^{ぼだい}達磨^{だるま}は、真理を受け継ぐたった一人の弟子、慧^え可^かが現れるまで、九年間、ただ坐禅し続けたという。真理をこの世に伝えるのに必要な人間は、たった一人でよかったのである。その一人は、権力者でも、金持ちでもなかった。しかも、達磨の弟子にしてもらうために、膝を没する深い雪の中を、夜を徹して立ち続け、自分の左腕を切り落として、達磨に差し出し、ようやく認められたといわれる。

真理に命をかけるたった一人の人間においてのみ、「世界宗教」は実現するのである。

(2003年2月『はまなす』第78号)

「人類の狂気 その6」

とうとう始まってしまった！ 人類の狂気の中でも、最たるものである戦争が。

執念深い人類は、どんな恨みでも、永久に忘れず、百年でも千年でも、持ち続ける。

そして、誰も頼みもせず、命じてもないのに、「やられたら、やり返せ」を至上命令とこころえ、報復の連鎖を、無限に紡ぎ出す。

個人対個人の争いが、大規模になると、人種対人種、国対国、民族対民族、宗教対宗教の争いとなり、もう、まるで、みさかいがつかなくなつて、一体なぜ争わなければならぬのか、わけが分からぬまま、「どうにもとまらない」と、暴走し始める。

「鬼畜米英」などという乱暴な概念に踊らされた日本の過去が、また繰り返される。

アメリカ人がすべて「鬼畜」であるわけではない。そもそも「アメリカ人」なるものも存在しない。存在するのは、人種や、民族ではなく、ジョンさんとか、ジムさんとかいう具体的な個人である。

「十字軍」対「イスラム教徒」、「プロテスタント」対「カトリック」、「イスラエル」対「パレスチナ」、その他、無数の対立の構図は、いずれも、実在しない抽象概念から成り立っている。

はるか昔、紀元前二千年ごろ、ユダヤ人の始祖アブラハムは、パレスチナに侵入し、原住民を追い出したという。そこから、戦争と、土地の奪い返し、はてしなき繰り返しが始まり、新たな憎しみと紛争を生み続けた。その連鎖は止むどころか、今なお拡大し続けて、いつ終わるとも知れない。

四千年前の神話を、後生大事に抱えて、それに命をかけるなどということが、いかにこっけいなことであるか。それが分からないほど、当事者は狂ってしまった。

「文明人は、自分が食べもしない人間を、なぜ、たくさん殺すのか」と人食い人種が言ったとか。文明を誇る現代人は、今や、人食い人種の笑いものである。

ありもしない仮想概念に、自分一人が取りつかれるだけでは足りず、周囲を仮想世界に引張り込んで、殺し合いの大立ち回りを派手に演じてしまう。その舞台上で、名優気取りの正義感に酔い、だんびらをかざして、大見得（おおみえ）を切っているのが、漫画的戦争屋である。「どうしてもやりたい」という向きには、どこかの無人島で、一対一の決闘を、どちらかが倒れるまで、思う存分やってもらい、それをテレビ中継して、全世界が楽しませてもらうというのはどうであろうか。やっている途中で、ば

かばかしくなつて、「やーめた」ということになれば、こんないいことはない。

(2003年3月『はまなす』第79号)

「人類の狂気 その7」

学校の先生をしている男性と、やはり先生である女性が、結婚した。結婚しても、二人とも先生を続けていた。

やがて、子供ができ、時間のゆとりがなくなつてきて、夫婦のどちらかが、先生をやめたほうがいいのではないか、と思うようになった。

その時、この夫婦にとつて、大きな問題は、収入が半分になるということであつた。

それまで、ぜいたくに暮らしていた生活水準を、半分に切り下げなければならぬということとは、深刻な問題であつた。

映画や旅行などの娯楽だけでなく、衣食住の全般にわたつて、出費を、半分に切り詰めるということを考えてだけで、夫婦は、暗い気持ち

になるのだつた。

その時、ふと、自分たちの頭には、今、収入のことだけしかない、ということに、気がついて、愕然とした、という。

自分たちの子供の幸せや、今、学校で教えている子供たちの幸せのことなど、まったく考えもせず、ただ、自分たちの楽しみが減つてしまふことだけしか見えていない、ということに、はつとしたのである。今まで、働いてきたのは、ただ自分たちが楽しみたいためであり、そのための金儲けのためであつた。

もし、財産が十分あつて、食べる心配がなく、ぜいたくもできるなら、働かないことを選んだかも知れない。たとえ、働くことを選んだとしても、それは、自分たちの生きがいのためであつて、子供や、社会のためではない。子供や、社会ですら、自分たちの満足を得るための手段にしか過ぎない。

「『自分』と『他』と分けるのはおかしい。

それは、本来、一つのものである」と言っても、

「そう言っているのは、『自分』の立場から出発して言っているものであって、『自分と他とが一つである』地点に立って言っているのではない。

夫婦は、あらためて、「働く」ということが、「金のため」「生きがいのため」であっても、決して、「他のため」ではなかった、ということに思い至った。

先生をやめるかどうかについて、彼らは、ただ結論に達していない。

しかし、何か致命的な見当違いから、自分たちの人生は、始まっているような気がするのと、彼らは言う。その最初の見当違いを、一度、すっかりご破算にして、白紙に戻し、そして、そこから、あらゆる問題を考え直すそうとしていると言っているのである。

彼らの話は、「働く」こと、そして「生きる」ことの根本的な意味を、私たちに問いかけているようである。

(2003年4月『はまなす』第80号)

「人類の狂気 その8」

野良猫が、子猫を5、6匹引き連れて、歩いている。

彼らには、今晚の食事や、寝る場所は、保証されていない。犬や、カラスの攻撃から、身を守るすべも、与えられていない。

もし、これが人間だったら、どうであろうか。生まれたばかりの子供をかかえた母親が、今晚の食事も、寝る場所もない、と分かれば、おそらく、親子心中を考えるであろう。

平穩無事に暮らしているように見える親子でも、次の瞬間に、突然、大地震が起こって、家の下敷きになって死ぬか、あるいは、生き延びたとしても、生活が、まったく破壊されてしまいかもされない。阪神淡路大震災では、それが現実となった。

安定した収入に守られていると思っても、

社会の大変動が起れば、たちまち、どん底の生活に突き落とされる。

考えてみると、現在の「平穩無事」は、断崖絶壁の上の綱渡りのような、実に危なっかしい状態である。それに気付かないか、それとも、あえて、目をつぶって、現実を見ようとしないので、どうにか「平穩無事」でいられるだけの話である。

本来、人間のいのちは、たえず、個体の内外からの、さまざまの危険にさらされていて、常に風前の灯の運命にある。いつ、病気におかされるか分からない。いつ、事故にあうか分からない。今、生きていること自体が、不思議であり、奇跡である。

実は、この「不思議」と「奇跡」が、今、すべての命を支え、宇宙の森羅万象しんらばんしやうを支えているのである。

野良猫は、本能的にそれを知っているから、焦りも、あわてもせず、ゆうゆうと、子猫を引

き連れて歩いている。

人間は、それを知らないために、生活の不安や、老後の心配で、夜も眠れず、給料を計算し、年金を計算している。

しかし、いくら計算したからといって、給料や年金が増えるわけでなし、いくら心配しても、大地震や社会変動は、起るときは、起る。

金はなくても、健康でありさえすれば、安心だと言っても、いつかは、必ず、死ななければならぬ。それが、明日であるか、次の瞬間であるか、誰も知らない。

本当に安心できる条件を求めて、あくせくし、ジタバタし、悪あがきすればするほど、不安の深みにはまってゆくだけである。

その人間を、野良猫が、笑っているような気がする。

(2003年5月『はまなす』第81号)

「人類の狂気 その12」

私も含めて、人間ほど、バカな生き物はないと思います。

バカが喜ぶオモチャを、神話といいます。

われわれは、神話につきりこんでいますので、神話なしでは、夜も日も明けないという、神話耽溺症たんにょうしやうにかかっている、モノをマトモに見るということができなくなっています。

科学技術というのも、現代人が、つきりこんで、自らを狂わせている、お粗末な「原始的」神話です。科学技術は、現代のバカがいちばん喜ぶオモチャです。それで、科学技術に、たくさんのお金をかけています。その結果、地球を荒廃させ、難病を増やし、人類を破滅に導いています。戦争も、神話と神話との衝突です。バカ丸出しです。

人間は、どうして、こうも神話まみれになっってしまったのでしょうか。

モノの本当の姿というものは、そのままでは、

われわれバカな人間には、見えません。ところが、神話という色眼鏡で見ると、ゆがんだ形ではあるけれど、モノが見えてきます。

モノのありかの見当がつかいたら、すぐ、色眼鏡をはずさなければなりません。でも、はずすと、不安なので、バカは、はずしがりません。そして、色眼鏡をかけたままで、ウロウロするものですから、色眼鏡どうしがぶつかり合って、けんかが始まります。

さあ、一度、裸眼の不安に耐えて、色眼鏡をはずしてみましよう。

え？「何も見えない」って？ どれどれ。ああ、まだ、かけているじゃありませんか。最後に、はずさなければならぬのは、エゴという色眼鏡なんですよ。

以上は、「バカの色眼鏡」という題で、ホームページ「生きる姿勢を求めて」の掲示板「人生・教育・宗教の広場」に投稿したものです。

われわれは、自分のことを、バカだとは、決して思っていない。それが、バカである、何よりの証拠です。バカは、みんな自分のことを、かしこいと思っっているからです。

そのバカに、輪をかけるのが、「神話」です。「快適」「スピード」「便利」「お金」「健康」「安定」「保証」等々の呪文をかけられると、たちまち金縛りになってしまいます。

この呪縛じゆばくを解く道はただ一つ、「エゴという色眼鏡」をはずすこと以外ありません。それも、一回はずして、それで終わりというのではなく、たえずはずし続けなければならないのです。

(2003年9月『はまなす』第85号)

「人類の狂気 その13」

人間がもつともおそれているものは何でしょうか。

地震でしょうか。雷でしょうか。戦争でしょ

うか。病気でしょうか。収入がなくなることでしょうか。

ある人は、「静寂がこわい」と言います。だから、仕事をしているときも、テレビか、ラジオをずっとつけているのだそうです。

多くの人が、車に乗るときは、カーラジオをつけ、道を歩くときや、電車に乗っているときには、イヤホーンをつけています。「空白」がこわいのでしょうか。

私も、夜、眠れないときは、テープやラジオを聞いたりすることがあります。でも、仕事中はそういうことはしません。特に、文章を書いているときは、ラジオやテレビから、人が何かをしゃべるのが聞こえると、文章が書けなくなります。聞こえてくる内容が、自分にとって興味のある内容であればあるほど、そちらに気を取られて、文章が書けなくなります。そんなとき、無理に文章に集中しようとすれば、とてもエネルギーがいるのです。聞こえてくる内容と、

目の前の文章とに、心が分裂して、しまいには、頭が痛くなります。

以前、ある若い作家が、「自分は、落語のテープを聞きながら、小説を書く」と言っているのを聞いて、びつくりしたことがあります。とても人間業(わざ)とは思えなかったからです。

その作家の中には、二人の「自分」がいて、一人は落語を楽しみ、もう一人は小説を書くというような、役割分担ができているのでしょうか。ひよっとすると、この作家にとっては、小説を書くという作業がつらくてたまらないので、落語を聞くことによって、そのつらさをごまかしていたのかも知れません。

「静寂」は、苦しきや不安や苦痛を、はつきりと、自分の目の前に突き付ける働きをします。それとまっすぐ向き合うのを避けるためには、たえず何かを鳴らしていなければならぬでしょう。

それが本当の解決にならないことは、本人が、

いちばんよく知っています。苦しきや不安や苦痛は、ごまかせばごまかすほど、ますます大きくなるものです。さらにそれをごまかそうとして、音量を上げ続け、苦しきや不安や苦痛との果てしない競り合いに、はまり込んでゆくのです。

では、本当の解決とは何でしょうか。それも、本人が、いちばんよく知っているはずです。次号で、それを考えたいと思います。

(2003年10月『はまなす』第86号)

「人類の狂気 その14」

また、あの季節が始まります。

クリスマスのイルミネーションと、神戸のルミナリエです。

この季節に限らず、日本国中至る所で、ライトアップと称して、お城などの歴史的建造物や、自然の立ち木まで、人工的な光で、こうこうと

照らし出しています。

終夜営業のコンビニは、異常なまでの明るさで、一晩中点灯しています。

かつては、夜は真つ暗だった、いなか道にも、街灯がつけられています。

月や、星や、蛍の、美しい光を楽しむことは、よほど都会から離れたところでないと、できなくなりました。

朝、日の出とともに起き出して、活動を始め、日が沈むと、活動をやめて、眠る、という自然のリズムを、人間は、完全に、失ってしまったようです。「睡眠薬を飲まないで眠れない」という人の話をよく聞きます。

鶏が、卵をたくさん産むように、夜中まで、電灯をこうこうとつけて、眠らせぬようにし、卵を産まなくなると、絞め殺して、食べてしまう、という、人間の残酷なやり方の報いが、人間の上に返ってきたのでしょうか。

工場の機械でも、夜、運転を止めて休ませる

と、効率が落ち、競争に負ける、という理由で、生産ラインは、昼夜を分かつず稼働させ続けるそうです。

「闇即停止」、「停止即死」なのです。

結局、「死」がこわいのです。

忍び寄ってくる「死」の影を、見えなくするために、できるだけ明るくし、できるだけ騒がしくしているのです。

自然現象である「死」を、打ち消そうとした結果、人工的な光と、不自然な音が、人間世界を支配するようになりました。

でも、いくら打ち消しても、「死」はなくなりません。むしろ、打ち消そうとすればするほど、「死」の力は、強くなってゆきます。

医学が進歩すればするほど、難病・奇病と医療ミスが増え、新薬が開発されるたびに、細菌が耐性を増し続けるのはどういふわけでしょうか。

65歳以上の高齢者が世界の人口に占める割合

は、2050年には、6人に1人になると言われていますが、それとともに、日本の自殺者は、ここ5年連続で、1年間に3万人を超え続けています。

人間が、死とたたかって、勝てるはずがないのです。人間が、闇とたたかって、勝てるはずはありません。

むしろ、「死」の語る「生」の意味、「闇」が告げる「光」の意味、を静かに、真剣に考えるべきだと思うのですが、いかがでしょうか。

(2003年11月『はまなす』第87号)



関西学院前の学園花通り

第四章 「キリストの愛と復活」

いわゆる一神教について

一応、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教は「一神教」であるとされています。しかし、その三宗教が聖典とする旧約聖書では異教の神々の存在を認めています。認めた上で、それらの神々を信じたり、拝んだりしてはいけないというのです。これは「一神教」ではなく、「拝一神教」と言うべきなのです。どの時代、どの世界に行っても、「神は唯一」という時代も世界もありません。必ず複数の神が存在し、その中から本当の神を選んで信仰するのです。

実は、人間が神を選んだのではなく、神が人

間を選んだのですが、それに気付くのは、さまざまな試練を経て、人間の信仰が洗練されてからの話なのです。「神は唯一」ということに気付いたあとでも、またもやこの世の楽しみや喜びなどというような「世俗的な神」を追い求めている自分に気が付くのです。「神は唯一」ということに、一度気付けばそれで終わりと思いきんで安心してはいけないのです。絶えず、くり返しくり返し、「神は唯一」というところへ返ってゆかなければならないのです。

旧約聖書イザヤ書45章6節には、「わたし（神）のほかは、むなしなものだ」とありますが、この「むなしなもの」（ヘブライ語はエフェス。限界。はて。ない。無きもの）は他の神々を指

しています。他の神々が「むなしなもの」と分かかっていて、なお、そういうものを追い求めてしまう自分を、反省し懺悔して、日々新たにやり直し、やり直ししてゆくのが信仰生活です。

自分が神を選んだと思っている間は、自分が神になっているのです。神が「天地創造の前から」（新約聖書ヨハネによる福音書17章24節）わたしを選んでくださっているということに、気付き、また気付き、さらに気付く毎日でありたいと思います。

「神話と紛争」

1. 紛争の過去と現在

紀元67年、イスラエルの民はローマ帝国に対する反乱を起こします。これを第一次対ローマ戦争と言います。しかし敗退し、ローマ軍がエルサレムの第二神殿を完全に破壊しました。犠

牲者は数十万人から一千万人とも言われます。ユダヤ人は追放され、または奴隸として売られてゆきました。ここから、ユダヤ人のディアスポラ（離散）の長い歴史が始まります。

11世紀には、教皇ウルバヌス二世の宣言に始まる十字軍は、表向きのスローガンは、イスラム教徒からの聖地エルサレム奪還でしたが、教皇がひそかに求めていたのは、教皇領の拡大と貿易による富の独占であったと言われます。エルサレムに居住していたイスラム教徒とユダヤ人は、キリスト教の名において、ことごとく殲滅され、ヨーロッパにいたユダヤ人も大量に虐殺されました。以後13世紀のチュニスでの十字軍の敗退までの二百年間、8度の遠征が行なわれましたが、ほぼ失敗に終わりました。十字軍の歴史は、殺戮と略奪の歴史と言えるでしょう。16世紀に始まった宗教改革が拡大すると、ヨーロッパの各地でカトリックとプロテスタントの戦争が起こりました。なかでも、1572

年8月23日、聖バルテルミの祝日から翌24日にかけて、フランス各地で、カトリック教徒がプロテスタント教徒を虐殺した「サン・バルテルミの虐殺」は、犠牲者の総数三万人とも十万人とも言われます。

時代が下って、第二次世界大戦は、ドイツによるユダヤ人迫害では、六百万人とも言われるユダヤ人が惨殺されました。

その後も世界各地で、多くの宗教紛争により、幾多の人命が失われて来ました。

そして、2001年9月11日、ニューヨークの世界貿易センタービルに、ハイジャックされた2機の旅客機が突っ込み、一瞬のうちに2465人の命が失われました。アメリカは、これをイスラム原理主義過激派によるテロと断定し、アフガニスタンのタリバン政権を軍事攻撃して崩壊させました。ついでアメリカとイギリスがイラクに軍事攻撃を加え、陥落させました。しかし、イラク国内では、反米勢力による

攻撃や、宗派・民族間の対立によるテロは、こうに収まらず、イラク民間人の死者は、15万人から22万人と言われています。

2. 宗教と「聖戦」

歴史を顧みても、世界のどの国でも、宗教はたしかに紛争の火種をまいてきました。しかし、もともと宗教は争いを好むものなのでしょうか。それとも平和を願うものなのでしょうか。

「イスラム教は、『右手にコーラン、左手に剣』と言っているから、好戦的な宗教なのだ」と言ってきたのは、欧米のキリスト教徒でした。ほんとにそうなのでしょうか。

コーランには、「いやがる人々を無理やりに信者にしようとしても、できることではない」とか、「叡智とよき忠告とをもって、イスラムの教えに人々を招きなさい」と書いてあります。つまり「改宗か、それとも死か」と言っている

のではないのです。穏健な説得が薦められているのです。

また、自爆テロなどの過激な手段を取るアルカイダの主張は、「イスラム教徒の土地を占領している異教徒に対し、武器を取って戦え。それが「神のための戦争」、聖戦（ジハード）だ」というものですが、イスラム教徒の中には、そういう考え方を支持しない人が多いと言われます。

自爆テロをする人たちは、聖戦で死んだら天国に行けると信じています。そういう狂信に駆り立てるものは何でしょうか。

3. 原理主義

原理主義は、「ファンダメンタリズム」の訳語として使われています。キリスト教では根本主義とも呼ばれ、イスラム教ではイスラム復興運動と呼ばれています。聖書（特に旧約聖書）、

コーランなど、聖典（正典）に記された教義や規範などを、そのままの形で、現代生活の中に実現させようとする運動を指します。

キリスト教のファンダメンタリズムの場合、その根拠とするところは、「聖書逐語霊感説」であって、聖書は一字一句神からの靈感によって書かれたものであるとするものです。キリスト教では、セヴンスデー・アドヴェンティスト（SDA）が、その一つの例です。SDAは、1845年アメリカでバプテスト派牧師ミラーによって始められました。再臨、土曜安息、浸礼、十一献金を強調し、旧約聖書レビ記11章などに記されている、食べてよいものと、食べてはいけないものを厳格に守ります。

ファンダメンタリズムは、社会の中で、自己のアイデンティティーを確立し、それを他にむかって主張しようとするものですから、当然、排他的、閉鎖的、急進的、攻撃的態度を生みます。そして、過激な宗教抗争とテロが発生する土壌

を現代世界に提供しています。こういった狂信的態度の背後には神話というものがあるのです。

4. 神話

では、そもそも神話とは何でしょうか。

私たちは日常「お日様が東から昇って、西に沈む」と言います。そして、自分の言っていることが、どこかおかしいとか、何か間違っただことを言っている、というふうには思いません。他の人も、私たちが、天動説をとなえているとも、非科学的だとも言わないでしょう。たしかに、地球の自転の結果、日が昇ったり沈んだりするように見えるだけです。そこで、「日が昇った」ということを、あえて「科学的」に言おうとして、「私が乗っかっている地球が一回りした。そのため、私が地球上に立っている地点を基準点とすると、太陽が、「東」という相対的な方向から昇っているように見えるが、実は私

の立っている地点が、「東」という相対的な方向へ向かって回転しているのだ」と言ったとすると、聞いている人は、「この男はアタマがおかしいんじゃないのか」と思うでしょう。「日の出」や「日没」というような表現を使わないで、地動説的に説明しようと必死になればなるほど、周りの人は、私たちが何を言っているのか、ますますわからなくなってしまうでしょう。

「東」と言っても、「西」と言っても、「昇る」と言っても、「沈む」と言っても、すべて相対的な表現なのです。わたしたちが生きている世界は「相対」の世界なので、そこには、「絶対的な東」も、「絶対的な西」もありません。「上」と言っても、「下」と言っても、何かを基準として、「その上」、「その下」と言えるだけで、「絶対的な上」もなければ、「絶対的な下」もないのです。

私たちが、日常使っている言葉は、すべて、相対世界の言葉ですから、絶対的なものを表現

しようとすれば、「神話」という形式を使わざるを得ません。

地動説も、天動説も、天体の動きを理解し、表現するための「お話」に過ぎません。「お話」は、「道具」であって、絶対的な真理ではないのです。それらは、いわば「科学的」という包装紙で格好をつけているだけで、どれも中身は「神話」なのです。地動説が「科学的」であって、天動説は「非科学的」であり、「迷信」であると決め付けたりするのは、自分の立場が「絶対」であり、「不動」であるとする態度であって、それこそまさに「天動説的」態度と言わねばなりません。本来「科学」とは、あらゆる常識を疑ってかかるところから始まるのです。「科学」が「常識」となってしまう場合には、その「常識」を疑ってゆかなければ、本当の「科学的態度」とは言えません。

たしかに、現代では、地動説が「通説」となっています。「通説」に異を唱えるのは、よ

ほど非常識な人間か、自信のある人間でしよう。なぜなら、「通説」は、たいいてい「自称科学者」のお墨付きで権威付けられていると思われるからです。でも、いったい何人の人が、自分で「通説」を検証したのでしょうか。「みんながそう言うから、そうなんだ」で済ませているというのが実情ではないでしょうか。地球が太陽の周りをグルグル回っているのを見た人があるでしょうか。宇宙飛行士でも、自分の乗っている宇宙船を基準にして、地球と太陽の動きを見ているだけで、見えない部分は仮説で補っているだけで、全体を見ているような気がするだけではないでしょうか。そもそも人間は、宇宙全体をひと目で見ることはできないのです。「宇宙全体」という「神話」をでっち上げているにすぎません。

宗教的な真理も、理解や説明を超えたものですから、神話を使って語らざるを得ません。しかし、その神話どうしが衝突して、殺戮と破壊を

招くとすれば、放置することはできないのです。

5. 非神話化

「神話」という言葉は、ここでは、人間の認識と表現を超えたものを指し示す「比喩」、または「幼児語」という意味です。例えば「ワンワン」とか「ニャンニャン」のようなものです。神話は、人間が、霊的なものを理解できるまでに成長する期間、間に合わせに使われる「符牒」で、キリストもよく「たとえ話」を語られました。だが、これも神話の一種と言っていいでしょう。神話という「離乳食」は、人間が人間であるかぎりには、絶対卒業することのできないものです。卒業できないかぎり紛争はなくなるらないでしょう。ではどうすればいいのでしょうか。

ドイツの神学者ブルトマン（1884～1976）は「非神話化」を提唱しました。聖書の枠組みとなっている古代の神話的世界観から、キリス

ト教の本質的メッセージ（福音）を取り出して、現代人にも通じる言葉で語りなおそうという試みです。

「神話」という「離乳食」を必要としない「大人」に成長するためには、自分の持っている神話に気づかなければなりません。キリスト教のみならず、世界のあらゆる神話から自由になることです。現代人は、宗教的神話だけでなく、「政治的神話」、「科学的神話」、「常識という神話」など、無数の神話の中で「神話漬け」になっています。「名誉」、「金」、「健康」、「快適」、「快楽」なども、気づかぬ間に現代人をがんじがらめにしている神話たちです。

大切なことは、神話と戦い、神話を捨てるのではなく、神話を通して発せられている「いのちのメッセージ」（福音）を聞き取ることです。「いのちのメッセージ」によって神話を正しく認識し、神話から解放されること、それが「非神話化」ということです。

神の国は見える形ではこない

- ・新約聖書ルカによる福音書20章27～40節
- ・新約聖書ルカによる福音書17章20、21節

1. レビラト婚

ユダヤ教では、子をもうけないで死んだ長男があれば、次男は、長男の嫁と結婚して子をもうけねばならない、次男が、また子をもうけないで死んだ場合、さらに三男が兄嫁と結婚して子をもうけねばならない、という定めがありました。これをレビラト婚（レビレート婚・Levirate 婚・逆縁婚）と言います。「レビラト」は、ラテン語で「夫の兄弟」を意味する「レビール」から来ています。

この風習は、ユダヤ民族以外にも、パンジャブ、モンゴル族、匈奴（フン族）、チベット民

族などにも存在すると言われます。レビラト婚に対し、ソロラト婚（ソロレート婚・sororate 婚・順縁婚・時に「姉妹逆縁婚」とも呼ばれる）は、姉妹を意味する「ソロール」から来ており、妻が死亡した時、夫は妻の姉妹と優先的に結婚することを意味します。

中世キリスト教会では、レビラト婚・ソロラト婚ともに神の意志にそむくものとして禁止されたと言われます。英国国教会は、ようやく1960年になって両方とも認めたようです。

日本では、明治初年にはソロラト婚（順縁婚）は要許可制となっており、明治8年にはレビラト婚（逆縁婚）は禁止になっていたと言われます。

集団を閉鎖的に守ろうとする方向が強く働くか、異質のものを積極的に取り入れようとする開放的な方向が強く働くかで、レビラト婚・ソロラト婚に対する態度が決まってくるようです。

ちなみに、仏教で「逆縁」とは、

① 仏に反抗し、あるいは仏法をそしることが、かえって仏道に入る因縁となること。

② 自分の修行をさまたげる因縁。

③ 親が子のためとか、仇に対してとかいう、逆の関係者のためにする供養。

を意味します。「逆縁婚」は③の意味から転じて、下位の者が上位の者に対して結婚すると言う意味に使われています。夫↓妻は「順縁」、妻↓夫は「逆縁」というふうに使われることもあります。

2. サドカイ派の復活理解

さて、イエス様に敵対するサドカイ派の人々が、イエス様をわなにかけようとして、次のような質問をします。

「モーセのさだめたおきてによれば、『ある人が子がなくて死んだ場合、その弟は兄嫁と結婚して、兄の跡継ぎをもうけねばならない』(旧

約聖書創世記38章8節・旧約聖書申命記25章5、6節)となっていますが、かりに7人の兄弟がいて、長男が子がなくて死に、次男も三男も、それぞれ子がなくて次々死に、とうとう7人も子がないうままで死んでしまったとします。復活の時、嫁は、7人のうちのだれの妻になるのでしょうか。」

サドカイ派は、復活というものはないと主張しているので、復活というものがあるとすれば、レビラト婚で結婚した7組の夫婦(夫7人に妻1人の組み合わせ)のうち、神の国では、どれが永遠の夫婦になるのかという問題が起ころのだ、と指摘して、「復活を認めれば矛盾が起きる。だから復活はない」という結論に導こうとします。

イエス様は、サドカイ派の人々に対して、「この世の子らは、めとつたり嫁いだりするが、次の世に入って、死者の中から復活した人々は、めとることも嫁ぐこともない。この人たちは、

もはや死ぬことがない。天使に等しい者であり、復活にあずかる者として、神の子だからである。すべての人は、神によって生きているからである」(新約聖書ルカによる福音書20章34～38節)と言われます。

サドカイ派の間違ひは、めとつたり嫁いだりするこの世の関係が、神の国でもそのまま引き継がれると思つているところにあります。神の国をこの世の図式・枠組みで考えようとするのです。

3. この世の図式

サドカイ派の人々に限らず、およそ人間はこの世の図式を使わずには、何かを考えることも、表現することもできません。この世の図式は、目に見え、手で触れることができるものだけが実在であるとする前提の上に成り立っています。テレビで放映されたことは、すべて客観

性があり、したがって真理であると、かなり多くの人が思つていてのではないでしょうか。数値や画像で示されたものであれば、疑うことも、検証することもせず、そのまま鵜呑みにしてしまふ人がほとんどではないでしょうか。だれもが、それが科学的な態度であると思ひ込んでいますが、ほんとうの科学的態度とは、だれもが真理だと思つていることを、まず疑つてかかることから始まるのではないのでしょうか。感覚だけが実在の証しであるとするのは、現代人がとられてゐる迷信なのです。

感覚を超えたレベルの話である神の国とか復活とかいうことは、感覚の世界に生きている人間にとつては、理解することも表現することもできません。復活をあえて理解しようとすれば、この世の図式を使わざるを得ないのです。

4. フアリサイ派の神の国理解

サドカイ派が復活を否定していたのに対し、ファリサイ派は復活を認めていました。そのファリサイ派の人々が、あるときイエス様に「神の国はいつ来るのですか」と質問しました。サドカイ派と同じくファリサイ派も、神の国をこの世の図式に当てはめて理解しようとしています。イエス様は、ファリサイ派に対して、「神の国は、見える形では来ない。『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。」（新約聖書ルカによる福音書17章20、21節）と言われます。

この世の図式から言えば、神の国は見える形で来るはずです。「人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来る」（新約聖書マタイによる福音書24章29〜31節、新約聖書マルコによる福音書13章24〜27節、新約聖書ルカによる福音書21章25〜27節）という言葉は、イエス様が、聞く人のレベルに合わせて、神の国の到来を「見える形で」分かりやすく説明しておられるのです。しかし、ほんとうは「神の国は、見え

る形では来ない」のです。神の国は空間を超えているからです。神の国はいつ来るのかというファリサイ派の人々の問いも、この世の時間に当てはめて、神の国の到来を理解しようとしています。しかし、神の国は、空間も時間も超えています。

だからこそ、「地上の」国ではなく、「神の」国なのです。

5. からし種一粒

「国」といえば、境界に区切られた面積を持ち、指導者ないし支配者を持つものと考えられますが、ほんとうは、「神の国は、そのような目に見える形を持っていない」とイエス様は言われます。それは、目に見えないほど小さな、無にひとしい「からし種」に似ていると言われるのです（新約聖書ルカによる福音書13章19節）。

また、無にひとしい「からし種一粒ほどの信仰」が人であれば、神の国は大きな力を発揮し、「空の鳥が来て枝に巣を作る」（新約聖書マタイによる福音書13章32節）ほどになると言われます。「からし種一粒ほどの信仰」があれば、山を動かすこともできるのです（新約聖書マタイによる福音書17章20節）。

「無にひとしい神の国」は、「無にひとしい信仰」に対応しています。信仰は、神の国を映すものだからです。

神の国は、上より垂直にこの世に来て、地上と交わります。それは位置だけあって、面積のない「無の一点」です。「無の一点」は時間を超えていますから、過去も未来もありません。常に現在です。「現在」という幅も長さすらありません。「無の一点」は空間を超えていますから、地上のあらゆるところに同時に存在します。常に現在であり、常に遍在です。

「無の一点」を認識する人間は、その認識を誇ることはしません。自らもまた「無の一点」になるのです。

人間が「無の一点」になるとは、エゴを無くすことです。「わたしの願いどおりではなく、み心のままに」（新約聖書マタイによる福音書26章39節）という姿勢をとることです。その姿勢は、この世の粗雑な認識によっては、とらえられません。しかし、その姿勢から出てきた結果は、認識できます。それが「十字架」です。

6. 十字架と復活

無になり切った十字架から展開するのが復活です。十字架が単なる無ではなく、「神による無」であるように、復活もまた単なる生ではなく、「神による生」です。「神によらない無」は、観念的な無であり、「神によらない生」は、い

つかはまた死なねばならない生です。

復活の生は、十字架という断絶を経た生です。十字架という断絶は、親子、兄弟、夫婦のきずなを断ち切ります。断ち切られたきずなは、復活によって回復するのでしょうか。

回復しますが、以前のままのきずなではありません。古い生がそのまま繰り返されるわけではありません。繰り返されるなら、それがいわゆる「輪廻転生」であり、「靈魂不滅」です。

「輪廻転生」は、古い生が古いままで、同じところをグルグル回っている状態です。「靈魂不滅」も、断絶を否定した直接性の世界です。どちらも「神なき永遠」であり、「さまよえるオランダ人」のように、死ぬことを許されず、永遠にこの地上をさまよっていなければならぬ。「のろわれた無限」です。その「無限」は、二枚の合わせ鏡のように、自分が無数に映っているようなものです。古い生が無限に映っているだけのさびしい、救いのない世界です。

人間を地上に縛り付けている古いきずなが断ち切られ、新しい生が開かれるのが復活です。

7. 霊の体・復活の体

結婚は、有限なこの世の関係です。その関係が、神の国にまで持ち込まれることはありません。

たしかに、肉体をもって生きているかぎり、夫婦という関係は存在し、愛も存在します。相手が死んでも、また神の国で再会できるだろうという確信があります。それが愛です。

しかし、その愛は、死を経た愛ですから、有限なこの世の愛ではありません。この世を超えた永遠の愛です。また、特定の相手は、神の国の中では、この世の存在とは違った姿で存在するのです。「存在」とは言うものの、「ここにいる」とか「あそこにいる」と言えるような形では存在しません。神の国が「ここにある」とか

「あそこにある」と言えるような形で存在しないのと同じです。たしかにあるのですが、位置だけあって、面積のない、無の一点としてのあり方をしています。聖書で、「霊の体」・「復活の体」（新約聖書コリントの信徒への手紙一・15章35～49節）として述べられているあり方です。

そのあり方、つまり霊の体・復活の体や神の国のことは、有限なこの世の言葉では、理解することも、説明することもできません。あえて理解し、説明しようとするならば、この世の図式を使った「神話という形」を取らざるを得ません。だからといって、霊の体・復活の体や神の国が「神話」であるわけがありません。それはあくまでも「實在」なのです。しかし、その實在は、「神話という形」を取らなければ、理解も説明もできないのです。

神の国の現実を、「神話という形」で理解し説明しようとするれば、矛盾や問題が起こるのは

当然です。だからと言って、霊の体・復活の体や神の国が存在しないということにはなりません。存在しないのは、移ろい行き、すぐ消え去る「肉の体」であり、「古いのち」であり、「この世の国」なのです。「肉の体」や、「古いのち」や、「この世の国」は、いわば、影のような存在です。

過ぎ行くものであり、実体のない、はかない存在です。

8. 神の国での再会

死んだ、愛する人が存在しないのではなく、愛する人が、「肉の体」を持ち、「古いのち」に生き、「この世の国」の関係をそのまま保っていると考えるのが間違っているのです。したがって、私たちが死んだあと、神の国で、愛するものとふたたび会うことができるということは、事実であつても、この世の関係そのまま

で、生前の記憶を保持したままで、肉の体において、ふたたび会うのではありません。私も相手も、復活のいのち・復活の体として、新しくされて、会うのです。まったく新しい出会いであり、新しいいのちに生かされている者同士の出会いなのです。それを、イエス様は、「天使のようになる」とおっしゃっています。

地上で、愛する人の写真を飾り、それを見て、愛する人を想うということは、意味のある行為です。しかし、その愛は、もはや肉の愛ではありません。肉は死んだのです。かつての肉の愛は、古いのちのままの、いつかは朽ちてゆく愛でした。今や、私も相手も、霊のいのちに生かされています。肉の愛からすれば、愛する相手以外は、すべて他人でした。しかし、今や、他人は一人もありません。見渡すかぎり、霊のいのちに生かされている、親しいものばかりです。特定の相手だけを愛する愛は、もはや死んでしまったのです。生きているのは復活のいのち

ちだけです。「すべての人は、神によって生きている」とイエス様が言われるように、神によって生きているもの同士の間には、特定の相手に対する愛はありません。特定の相手との再会は、「特定の相手に限られた再会」ですが、すべての人との再会は、「特定の相手を超えた、喜ばしい、永遠の再会」です。憎しみも愛も超えた、復活のいのちに生かされている者同士の再会です。もはや、2枚の合わせ鏡によってでもなく、おぼろに映る鏡によるのでもありません。「顔と顔を合わせて」一つにされたいのちの再会なのです。

アーミツシユの生き方

家庭に、電気も、ガスも、水道も、電話も、自動車もない。ラジオ、テレビもない。機械に頼らず、農業に生きようとする。そういう人たちの共同体が、世界最先端の文明国、アメリカにある。その群れを、「アーミツシユ」と呼ぶ。16世紀、ヨーロッパの宗教改革時代に、より徹底的な教会改革を目指して、さまざまな運動が起こった。その一つ、スイスのヤークوپ・アマンに率いられる一派は、アマン派（アーミツシユ）と呼ばれ、苛烈な迫害を避けて、アメリカに渡った。18世紀には、500名ほどだったアーミツシユは、無抵抗・絶対平和主義を貫き、武器は持たず、争わずして、アメリカ230カ所に入植地を建設し、現在、人口250万といわれている。

専制的な指導者を持たない彼らは、みずから、

厳しい自己規制を課し、便利さ・快適さを捨て、快楽を追わず、スピードを求めない。個人が目立つたり、引き立つたりするようなことは避ける。世の中の流れに巻き込まれないよう、常に距離を保って、生活している。

彼らは、写真を撮ったり撮られたりすることを拒否する。いかなる意味でも、個人が注目を集めたり、偶像化したりすることを恐れるのである。

アーミツシユの学校では、「喜びは、いつも自分を最後に」が教えられる。喜び (JOY) は、J, O, Yの順にさざげられる。まず、イエス (Jesus) に、次に、他人 (others) に、次に、自己 (you) は、いちばん最後になる。自分を捨てること。しかも、時々刻々、一瞬一瞬、自分を捨て続けること。それが、アーミツシユとして生き、本当の人間として生きる生き方であることを、小さい時から、たたきこまれるのである。そして、「質素」であり、「地味」

であるアーミッシュの伝統が伝えられてゆく。アーミッシュから投げられる光に照らし出される、私たちの生活は、「けばけばしく」、「派手」であり、「薄っぺら」である。喧騒と飽食、自己主張と個人主義に、理性を失い、効率優先、利益追求、流行追従が、至上原理となった。科学技術を「神」としてあがめ、大量生産、大量消費、大量廃棄が、地球を荒廃させ、公害、貧困、戦争、難病、奇病、虐待、いじめが、地上をおおいつくした。

同じ地球上に生きるアーミッシュが、これらの災いを免れることはできない。温暖化は、彼らの農業をおびやかしている。汚染された大気を、彼らも吸っている。同じ人類として、地球を荒廃させたツケを、彼らも、払わされているのである。それに対して、彼らは、不平を言わない。どこかに、別天地を求めて、自分たちだけ助かろうとはしない。むしろ、苦難をまっ先に受けようとするであろう。アーミッシュを通

して語りかけられているメッセージに、私たちは、今、耳を傾けなければならない。

（2004年6月『はまなす』第94号）



アーミツシユの赦し

「命には命、目には目、齒には齒、手には手、足には足を報いる。」他人の命を奪つたものは自分の命で償い、他人の目を傷つけたものは自分の目で償い、他人の齒を傷つけたものは自分の齒で償い、他人の足を傷つけたものは自分の足で償わねばならない。これを同害報復と言います。しかし、常に報復は規模が大きくなり、報復の連鎖を生んで止まるところを知りません。それに対し、イエス・キリストは次のように言われました。「『目には目を、齒には齒を』と命じられているが、悪人に手向かつてはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい」（新約聖書マタイによる福音書5章38〜42節）と。つまり、『愛より出てくるユーモアで、左の頬を突き出せ』というのです。しかし左の頬を出すことが、相手を挑発するこ

とになることがあります。そこに愛による赦しが必要ではありません。しかし、これも、ともすればただの唱え文句になりがちで、自己の人生における実践にまで至らないことが多いのではないのでしょうか。それを自分自ら実行することによってのみ、真理として実証されるのです。これを実行したアーミツシユから学んでみたいと思います。

1. アーミツシユとは

アーミツシユについて学べば学ぶほど、彼らの信仰の底には、ある共通した点が感じられます。それは「真理は、常に少数者の群れに存在する」という信念です。「多くの人が集まる場所に真理はない。まして、有名であることが真理のしるしではない」ということです。「壮大な建造物の中に、神はおられない。群衆が群れ集まるところに、神はおられない」と彼らは

信じているかのようです。マスコミ、マスプロ、マスメディアからは、真理は見えないと言うのです。真理は、鳴り物入りで、大声で語られるのではなく、「静かなる細き声」、「静かにささやく声」（旧約聖書列王記上19章12節）で語られるのです。激しい風の中にも神はおられず、地震の中にも、火の中にも神はおられません。静かなる細き声として神はささやかれるのです。イエスは、群衆が集まってくれば、群衆を避けて山に逃れました。自分を王にしようとする群衆から逃れようとされました。そのイエスをいさめようとした弟子たちに対しては、「サタンよ、退け」と厳しく叱責されました。

アーミッシュは、「目立つこと」を極端に警戒します。服装にしても、「質素」「単純」であることを大切にします。写真も拒否します。讚美歌も、美声を聞かせようというような歌いは禁じられ、楽器の演奏も避けられます。教会の建物を持たず、各自の納屋小屋などを回り持

ちで使います。牧師はじめ聖職者は全員無給です。ガウン、聖歌隊、祭壇、献金、十字架、ステンンドグラスなど一切ありません。つねに「静けさ」を保つよう心がけます。けたたましく笑ったり、大声でしゃべったりして、周囲の雰囲気やを乱したりしません。

2. アーミッシュの教育

アーミッシュの子どもたちは、8年間の義務教育を受けるだけで、その後高等教育を受けることはありません。公立の小・中学校へは行かず、アーミッシュの共同体で作った学校へ通います。そこでは、1年生から8年生までを全校1クラスで教えます。

教師（有給）になれる条件は、アーミッシュの価値観をしっかりと持っていることと、農耕生活が理解できるということです。

アーミッシュの教育の中心は、JOYという

言葉に要約されます。Jはイエス (Jesus)、Oは他の人々 (others)、Yはあなた (you) を表します。喜び (joy) を与える順は、まずイエスを喜ばせ、次に人を喜ばせなさい。そしてあなたを喜ばせるのは最後にしなさいというのです。「自分を捨て、日々、自分の十字架を背負ってわたしに従いなさい」(新約聖書ルカによる福音書9章23節、マタイによる福音書16章24節、マルコによる福音書8章34節) というイエスの言葉にもとづいています。

それを実践した人たちの記録が、アーミッシュの「殉教者の鏡」という本に収められています。

たとえば、1560年代、オランダのダーク・ウイレムズが、再洗礼派(アーミッシュの母胎)として官憲に追われて、氷の張った川を渡って逃げたときのことです。追手が川に落ちてしまいました。それを見たダークは、逃げるのをやめて川に戻り、追手を救いました。その結果捕

縛され、火あぶりの刑に処せられたのです。

また、アーミッシュのヤーク・ホフステター(1704～1775)の家が、ある時インディアンの一隊に襲われました。ヤークの息子が狩猟用の銃に手を伸ばそうとしましたが、ヤークは、銃を息子たちの手の届かないところへ放り投げてしまいました。そのため、一家は数人を残して皆殺しにされてしまったのです。

また、アーミッシュは現代文明のほとんどを拒否しています。彼らは自動車も電気もガスも使いません。交通手段は、バギーと呼ばれる一頭立ての馬車です。テレビ、ラジオ、電話、パソコンもありません。飛行機に乗りません。兵役を拒否します。

3. 乱射事件

2006年10月2日(月)午前10時35分、エンマという名の女性教師が、一校一クラスの

アーミツシユの学校から約400メートル離れた農家に駆け込み、泣きながら「学校に銃を持った男がいる」と告げました。農夫はすぐさま戸外に設置されている電話ボックスから警察に緊急通報して、学校で子供たちが人質に取られたことを知らせました。

犯人のチャールズ・カール・ロバーツ四世(32歳)は、アーミツシユではなくイングリツシユ(アーミツシユ以外の一般人)でした。気短で、いつもイライラしていました。事件前日の午後6時から、牛乳運搬用トラックでアーミツシユとイングリツシユ(アーミツシユ以外の一般人)の農場を回り、ステンレスの缶に入れてある牛乳を回収する仕事をしました。それから、それを地域の処理施設へ搬入したあと、午前3時ごろ牛乳運搬用トラックを、自宅から2・4キロほど離れた駐車場に止め、そこで自分の小型トラックに乗り換えて自宅に帰り、仮眠をとりました。

午前7時半、6歳から13歳までの生徒26人が登校しました。定刻になって、女教師エンマの指導で、聖書朗読、主の祈りが、ドイツ語でなされました。その日は、エンマの母と姉妹たちが参観に来ていました。一人は妊娠8か月、もう一人は幼児を二人連れてきました。子どもたちは讚美歌を三つ歌いました。そのうちの一つの歌詞は、次のようでした。

「人よ、終末を忘れるな。

汝(なんじ)の死を忘れるな。

死はときに速やかに訪れる。

今日生気あふれる者も、

明日か、明日をも待たず、

世を去るかも知れぬのだ。」

それから単級複式(異なる学年で編成されたクラス)の授業が始まりました。

そのころロバーツは、自宅で、妻のエイミーと3人の子どもたちと朝食をとっていました。そのあと妻エイミーは、長老派教会へ1歳半の

末っ子を連れて出かけました。そして教会で、子どもをアーミッシュの若い女性ボランティアに預けて、祈祷会に出ました。

午前8時45分、ロバーツは、6歳と8歳の子どもをスクールバスに乗せたあと、家で家族一人ひとりに宛てて遺書を書きました。それから、小型トラックに、拳銃、散弾銃、ライフル、スタンガン、弾丸600発、潤滑ゼリー、ハンマー、釘、レンチ、双眼鏡、耳栓、バッテリー、懐中電灯、ろうそく、テープ、角材、着替え一式を積みました。すべて、人質を取って長時間立てこもる用意でした。

午前10時15分頃、ロバーツは小型トラックを学校に乗り入れました。物音を聞きつけて、女教師エンマが玄関に出ました。ロバーツは、錆びた金属片を持ち、「これと同じような物がありますか」と聞きました。探すの手伝ってもらえませんか」と聞きました。エンマは「いいですよ。探してみましよう」と答えました。その間に、

ロバーツはいったん車に戻り、拳銃を持って教室に入りました。そして拳銃を振り回し、子どもたちに「全員、教室の前の黒板のそばの床にふせろ」と命令しました。銃を見たエンマは、他の大人たちがまだ教室にいることを確かめると、母親と二人で横のドアから逃げ出し、狂乱状態で農家に駆け込んだのでした。

予想外の展開に驚いたロバーツは、一人の男子生徒に「先生を呼んで来い」と命じました。それから、女子生徒数人の足を縛り、別の女子生徒たちをお互いに縛りつけて、「言うことを聞けば、傷つけない」と言いました。次に、大人たちと男子生徒全員を教室から出しました。そして車に残してあった物を、急いで教室に運び込みました。教室のドアを釘付けにしたあと、ロバーツは一人の女の子が祈る声に気付きました。

「おれのために祈ってくれるか?」と聞くと、別の一人が「私たちのためにもお祈りして」と

言いました。彼は、「お祈りなんかしても無駄だよ」と言い返しました。それから、「だれか一人を好きなようにさせてくれれば、他の子には手を出さない」とロバーツが言うと、年少の女の子の一人が、彼の言う意味が分からないまま、仲間を守ろうと申し出ました。年長の子たちは、あわててペンシルベニア訛りのドイツ語で「だめよ！　だめよ！」と止めました。

また、ロバーツは、「こんなことをしてすまない。おれは神に腹を立てている。だから、クリスチャンの女の子に罰を与え、神に仕返するんだ」と言いました。

間もなく警官たちが駆けつけ、学校を包囲して、拡声器で投降を呼びかけました。

ロバーツは妻に携帯電話をかけ、「もう家には帰らない。皆に書き置きを残してある。おれは神に腹を立てている。9年前に生まれた長女のエリーズが、生後わずか20分で死んでしまったからだ」と言いました。

妻に宛てた書き置きには、「おれは君にふさわしくない。完璧な妻である君にふさわしいのは、もっと……。おれの心は自分への憎しみ、神への憎しみ、途方もないむなしさでいっぱい。皆で楽しく過ごしていても、なぜエリーズだけがいらないだと、怒りがわいてくるんだ」と書かれてありました。

警察が学校を包囲しているので、女の子にいたずらする計画が駄目になったと知って、ロバーツはさらに動揺しました。午前10時55分には自分で警察に電話しました。「少女10人を人質にとった。警官は全員ここから出る。今すぐだ。さもないと、2秒で皆殺しにする。2秒だぞ。わかったか！」

それから、少女たちに向かって言いました。「娘の償いをさせてやる。」

13歳の生徒二人のうち、マリアンが、ロバーツは皆を殺すつもりだとさとり、年下の子たちを何とか守ろうとして、言いました。

「私を最初に撃つて！」

午前11時5分、警察は、散弾銃の銃声3発、続いて拳銃の速射音を聞きました。玄関の窓から発射された散弾が、数人の警官をかすめました。警官隊は校舎に突進、こん棒と盾で窓を壊しました。壊れた窓から突入したちよどその時、ロバーツが拳銃で自分を撃ち、倒れました。床の上には、まるで処刑場のように、撃たれた少女たちが一列に横たわっていました。5人は瀕死の状態でした。もう5人も重傷を負っていました。頭を両手でかばい、転げ回ったため、命が助かりました。

少女たちは救急ヘリで搬送されました。ある少女は警官に抱かれたまま息を引き取り、ある少女は搬送先の病院で、母親の腕の中で息を引き取りました。こうして、5人の少女が亡くなりました。重傷の5人も予断を許さぬ状態でした。

私たちの悲嘆はいうまでもありませんが、イ

ングリツシュ（アーミツシュ以外の一般人）の悲しみは想像を絶する勢いで世界中に広がり、何百人ものボランティアが駆けつけて、親たちのケアに当たり、押し寄せる報道陣・一般人の整理・誘導を引き受けました。世界各地から何千通ものカード、手紙、小切手、無数の品物が送られて来ましたが、なかでも注目しなければならぬのは、自殺した犯人のロバーツの遺族宛に送られて来るかなりの郵便物や金品でした。アーミツシュもイングリツシュも、悲しみを表すだけで、恨みや憎しみをもち続けることはありませんでした。

事件から1週間後、遺族と男子生徒たちが校舎に行きました。アーミツシュの教会の監督が主の祈りを唱えました。その場にいたアーミツシュの一人は、「実に神聖な時間、神聖な場面でした。神の力が働いているのを感じました。大勢が泣き、耐えがたい悲しみがあふれました。と同時に安らぎが広がって行っただけです。手で

さわれるほど近くに神がいる。はつきりそう感じました」と言っています。主の祈りの、特にどの部分がそれほど感動を引き起こしたのでしょうか。おそらく、

「我らに罪をおかす者を我らがゆるすごとく、我らの罪をもゆるしたまえ。」

という個所ではないでしょうか。これはこの事件とその結末、そしてその意義を知る上で、大変重要な個所なのです。次にそれを見て行きましょう。

4. 赦し

アーミツシユが、犯人ロバーツの未亡人エイミーと遺児たちも事件の犠牲者なのだ、と気がつくのは早かったです。夫また父を失った上に、プライバシーも暴かれています。しかも、アーミツシユの犠牲者とは違って、ロバーツの家族は、最愛の夫であり父である人が、アーミツシユ

の、罪もない子どもと家族に凶行を働いたという恥に苦しまねばなりません。そのロバーツの家族のために、アーミツシユは、事件後わずか数時間のうちに、次々慰めに来ました。そして、「あなたがたには何も悪い感情は持っていません。」「私たちはあなたを赦します。」「何の恨みもありません。」という言葉をかけ、見舞いの品を置いて帰りました。ロバーツの埋葬に参列した人たちの半数はアーミツシユでした。

葬儀業者は、殺されたアーミツシユの子の遺族が、未亡人エイミーにお悔やみを言い、抱擁している姿を目撃しています。彼は次のように回想しています。

「殺されたアーミツシユのこの遺族が、未亡人エイミーにお悔やみを言い、赦しを与えたところを見たのですが、あの瞬間は決して忘れられません。奇跡を見ているんじゃないかと思えました。」

ロバーツの家族の一人はこう言っています。

「35人から40人ぐらいのアーミッシュが来て、私たちの手を握りしめ、涙を流しました。それから、エイミーと子どもたちを抱きしめ、恨みも憎しみもないと言って、赦してくれました。どうしたらあんなふうになれるんでしょう。」

ある日、ロバーツ家とアーミッシュの遺族たちが、そろって面会しました。アーミッシュの指導者は、その時の様子を次のように語っています。

「私たちは輪になって座り、順番に自己紹介しました。エイミーは、ただもう泣きじゃくるばかりでした。他の者も話しては泣き、話しては泣きしていました。私はエイミーのそばにいたので、彼女の肩に手をかけ、立ち上がって慰めようとしたのですが、自分も泣いてしまいました。本当に心が震えるような経験でした。」

別のアーミッシュの出席者は、「あの日、どれだけの涙が流されたことか。あれは神様のお力ですよ」と言っています。

収入のなくなったエイミーのための寄付金を、何十人もアーミッシュが納めました。

エイミーの親戚の一人はこう言っています。

「もし被害者がアーミッシュでなく、私たちの誰かだったら、訴訟に次ぐ訴訟になったでしょう。ところがここでは逆に、皆の距離が縮まっているんです。」

すなわち、報復がこの世の常識であって、それが人と人とを分裂させてしまう力を持っているのに対して、この世の常識を超えた赦しがある、人と人とを結びつけ、一つにする力を持っているということ、それをアーミッシュが気付かせてくれるのです。これこそアーミッシュが命をかけて私たちに伝えようとするメッセージなのです。

第五章 「死を生きる」

死を生きる（自己と認知症）

一 はじめに

これは、新老人の会阪神北地区で「自己と認知症」という題で発表したものをつくりかえたものです。「死を生きる」という題は、日野原重明先生の「死をどう生きたか」（1983年・中公新書）からヒントを得ました。

私にとって、人生のあらゆる問題は、その問題の外側から見ていたのでは理解も解決もできません。すべて「自分の問題」として見なければ、

その問題の本当のありかも意味もわからないです。さらに、「問題の外側から見る」という態度では、問題と自分との間に距離を置いている態度ですから、その問題の持っている「問い」を真剣に受け止めてはいません。また「その問題と対決する」とか「その問題と取り組む」という態度でも同じく、問題が「自分の問題」になりきっていないのです。

これまで人生問題の答えを求めて、いろんな本を読んだり講演を聞いたりしてきましたが、全然ピンとこないのです。もっとはっきり言えば、どれも「嘘っぽい」のです。なぜでしょうか。本を出したり、テレビやラジオでしゃべったりする人たちの多くは、どこそこ大学の教授

とか、何々教会牧師とかいった「肩書き」に權威を持たせてしゃべっている話であって、しゃべっている本人の体験ではないのです。しょせん「受け売り」なのです。死を目前にしている私には、そんな話を聞いているヒマはありません。

人生問題に直面している人間にとつては、切ったら血の出るような、なまなましい話が聞きたいのです。体験した人にしか話せないような「実体験」を聞きたいのです。しかも、成功談ではなく失敗談を、楽しい話ではなく、苦しんだ話を聞きたいのです。病気の話でも、医師の立場や介護する立場から見た病気ではなく、医師自身、介護者自身が病人となつて体験した話が聞きたいのです。どんな話でも、話し手の苦しみや悩みに裏付けられた話には説得力があります。そういう話こそ、聞く者を感動させ、生きる希望を与えて、救いに導くのです。

とりわけ、生と死に関する話は、語る人間が

本当の意味で生と死を体験していなければなりません。「受け売り」ではダメなのです。本人自身が生と死を体験していなければなりません。「生」ならだれでも体験しているけれど、「死」を体験した人はいないでしょう。しかし、「死」を体験していない人は、本当の意味で「生」を語る事ができるでしょうか。「死」と切り離れた「生」なんてありません。「不老不死」の生はおとぎ話の生です。生は、死ぬからこそ「生」であり、老いるからこそ「生の」^{なま}「生」なのです。死から目をそむけた生は、嘘くさい、生に見せかけた「生もどき」であつて、死を目前にしている人間にとっては何の役にも立たないのです。

とは言うものの、生と死を体験するなんてことは、現に生きている私にできることででしょうか。死を体験すれば、死を語ることもできなくなるのではないのでしょうか。実は人間すべては既に死を体験しているのです。人間すべての内

に死があるのです。次にそれについて語りたいと思います。

二 アポトーシス→プログラムされた死

妊婦の胎内では、赤ん坊の手の指と指の間は水かきのようなものでつながっていて、野球のミットのような形をしていると言われます。それが、日が経つに従って、指以外の部分の細胞がだんだんと死んでいき、剥がれていきます。その結果、まるで木から彫刻刀で手の平の形に削り出していくように指が形成されてゆくそうです。つまり、赤ん坊の手が人間の手らしくなるために、余分な細胞は死んでゆくのです。ちょうど秋になると木の葉が枯れて地面に落ちるように、役目を終えた細胞が死んでゆきます。ギリシア語の「アポ（離れて）」と「プトーシス（下降）」を合わせて「（枯れ葉などが木から）落ちる」という意味で「アポプトーシス→アポト

シス」という語が生まれたのです。

人間が人間らしくなつてゆくために絶対必要な仕組みがアポトーシスなのです。ところが「死ぬことを忘れた細胞」が出現しました。それががん細胞です。この細胞はアポトーシスで自動的に死ぬことはありません。宿主であるがん患者が死ぬことによつてのみ、死ぬのです。宿主が死ねば、そこに寄生していたがん細胞も死んでゆくわけです。地球上の人間の営みも、そのように、宿主である地球を壊して、寄生していた人間も死んでゆくのでしょうか。人間は、地球上のあらゆる存在にとつて、地球に組み込まれた死の遺伝子であり、死のプログラムなのかもしれません。

これは宇宙的な規模での話ですが、次に一個人としての話に移りたいと思います。

三 私の認知症

私は、問診、M R A、M R I、頸動脈エコーなどから、脳梗塞、脳萎縮、頸動脈狭窄と診断されています。

現在、おもな症状としては、見当識障害（時・場所・人の認識障害）があります。

一 たとえば三年前にこんなことがありました。

医院からの帰途、自宅まであと百メートルほどにさしかかったとき、奇妙な感じに襲われました。住み慣れた地域なのに、見慣れない家並みが続いているような気がしたのです。あたりを見回しましたが、やはり初めて目にする家ばかりです。驚いて、立ちすくんでしまいました。午前の太陽がまぶしく輝いています。「白昼夢」を見ているのだろうか、いやそんなはずはない、と気を取り直して、今来た道を引き返しました。そこで初めて気が付きました。自宅へ通じる曲

がり角を間違えて、一つ手前の角を曲がってしまっただけです。

そのことに気が付いて、第二のショックに襲われました。この地域に住み始めて、もう六十年になるのです。いくら新築・改築の家が増えたといつても、自宅への道を間違うなんて、一体自分はどうなってしまったのでしょうか。「徘徊」という言葉が、頭をよぎります。「いよいよ来たか」という感じでした。

まず、今自分がどこにいるのか、ということが分からなくなり、そして、つぎには、今日が何年何月何日か、ということが分からなくなり、さらに、自分の妻や子どもが分からなくなる、というふうには、私は壊れてゆくのでしょうか。（小澤勲氏によれば、時間・場所・人物の順に侵襲が及ぶそうです。）

クリステイン・ブライデンというオーストラリアの女性は、学生時代、いつも全校で二番か三番の成績でした。社会に出てからも、とん

とん拍子に出世して首相・内閣省に入り、第一次官補になりました。1995年四十六歳のとき、アルツハイマー病の診断を受け、三年後、前頭側頭型認知症と診断を訂正されました。

彼女は、今自分がどこにいるのかということからなくなり、まわりの人が誰であるかが分からなくなる、という段階を経て、数字も分からなくなりました。でも、ご主人に励まされて、世界各地で自身の体験を講演してまわり、著書も二冊出しています。

その著書に、「『認知症で死ぬ時に私は誰になってゆくのだろうか』と自問し始めてから長い旅の果て、今、『私は私であるのだ』と気付いた」と書いています。

私は、認知症になっても、私なのです。生きても死んでも壊れても、私以外のものになりようがないのです。「マトモな私が本当の私である」などという、おろかな思い込みが、認知症患者とその家族を、どれほど苦しめているで

しょうか。かつて秀才と言われた人ほど、現在の状態との落差に苦しむのです。

私がいくら壊れても、壊れたままで、やはり私なのです。壊れる前の私は、もう無いのです。無いものにしがみつこうとする空しい努力をやめて、壊れたままの私を、生死を超えて生き抜くしかありません。それが私の尊厳を守ることになるのではないかと思います。

二 去年はこんなことがありました。

Tさんと話していた時、奇妙なことが起こりました。記憶の中のTさんに関する大切な部分がおそっくり無くなっていたのです。

私の主宰している「聖書を読む会」にTさんを誘おうと思って、会の日時や、やっている内容を、事細かに説明し出しました。すると傍らにいた家内が『ちょっと！ Tさんは、その会を立ち上げる時から、ずっと中心になってくださったっていたのよ！』と言ったので、はっと気が

つきました。「聖書を読む会」がTさんたちのお世話で始まって五年以上になるのに、その記憶が瞬間的に消えていたのです。

Tさんだということは、その時認識できていたのですが、Tさんと「聖書を読む会」とが結びついていなかったのです。Tさんについての記憶も正確だったし、「聖書を読む会」についての記憶もまず正確でした。Tさんと「聖書を読む会」とのかかわりだけが間違っていました。いわば、ジグソーパズルのピースが一つ間違っただけで入った形です。一つ一つのピースは認識できていても、他のピースとの関係づけができないのです。その関係づけに必要なジグソーパズルの設計図が、壊れていたのでしょう。

壊れていた設計図は家内の一声ですぐ回復しましたが、設計図とはいったい何なのでしょう。誰が設計図を作ったのでしょうか。

三 今年に入ってこんなことが起こりました。

長男と次男が来た時、私は、長男を次男と間違えて、次男に話しかけるつもりの話題を長男に話していました。そばに次男がいましたが、次男はきつと妙な気分だったろうと思います。

前の事件は、人に関する記憶の誤認でしたが、今度は人そのものの誤認です。しかも、すぐそばに次男がいるのに、間違いに気がつきませんでした。今度の場合は、話しかけた相手が、長男なのに次男だと思ってしまったのです。長男に話しかけた時、次男の存在が視野に入っていなかったからです。

前の事件は、話しかけた相手の、「聖書を読む会」を立ち上げてくれたという過去が視野に入っていなかったということです。つまり時間の認識が失われていたということになります。それに対して、今度の場合は、空間の認識が失われていたわけです。

空間も時間もこの世で生活してゆく上で、無くてはならないものです。無くてならないもの

ですが、無くなったからといって、それで人間が死ぬわけではありません。

赤ん坊が生まれて、最初に認識するのは空間だと言います。その次が時間だそうです。認知症というのは、大人が赤ん坊に返ってゆく姿だとも言われます。赤ん坊が大人の世界に入ってゆくためには、空間と時間を認めることが要求されるのです。大人たちの約束事で空間と時間が出来上がっているだけで、どちらも実在ではありません。それを見破っているのが、赤ん坊と認知症患者だということになります。ボケているのは大人たちで、ボケていないのは赤ん坊と認知症患者だというわけです。ただ、厄介なのは、認知症患者は自分の認識が絶対間違っていないかと思ひ込んでいることです。それをボケたというのです。

ただ、ボケている時と、ボケていない時があります。それを『まだらボケ』というようです。人がボケているかボケていないかを判断できる

のは、ボケていない人間だけです。本当にボケていない人間なんているのでしょうか。『自分は絶対にボケていない』と言う人間こそ、救い難いボケじゃないのでしょうか。実は、この世はその救い難いボケで成り立っているのです。

四 激痛体験

認知症を発症するまでに、私が経験した関節痛のお話をしましょう。

今から五年前のある日、朝、目が覚めて、体を動かそうとすると、左肩に激痛が走りました。しばらくは動けませんでしたが、痛みをこらえてソロソロと起き上がったために、手をついて体を支えようとすると、左肩から上腕にかけて、焼け火箸を当てられたように猛烈に痛みます。しばらくそのままの姿勢でじっとして、ころあいを見計らってふとんの上に座ろうとすると、右膝に鈍痛が走り足に力が入りません。

立ち上がるどころか、座ることさえできないの
です。

苦痛に息を詰めながら、それでもどうにかふ
とんの外に這い出ることができたのは、目が覚
めて一時間以上たつてからでした。

次の苦行は、顔を洗うことでした。左手を、
顔まで上げようとすると、また激痛が見舞うの
です。右手だけで顔を洗い終わり、トイレ、朝
食、着替え、と苦痛に息を詰めながら、左手を
使わずに支度を終えて、ソロリソロリと医院に
向かいました。

途中で転ばないよう、細心の注意を払いまし
た。体のバランスが崩れたとき、右膝に力が入
らず、踏ん張ることができないのです。

思えば、数か月前には、外出先の階段で何か
につまずき、転げ落ちて顔と手足に怪我をしま
した。口の中は、歯が欠けました。それらの傷
がなかなか直りませんでした。この時すでに、
物につまずきやすいという予兆があったわけで

す。

七十代という年相応に体が弱ってきたのです。
九十歳を過ぎても元気な方がおられるのですが、
私はどうやら下り坂にさしかかったらしいです。
これからは、坂道を転げるように、体力が落ち
てゆくのでしょうか。

高いところのほれば、必ずまた下りてこな
ければなりません。その自然の法則を忘れて、
いつまでも高いところにとどまっていられると
思うのが、人間というものです。

人類の一部の人間が、繁栄と快楽を享受して
います。金さえ出せば、何でも手に入ります。
蛇口をひねれば、水が出ます。スイッチを押せ
ば、電気がつきます。ガスも、水洗便所も、冷
暖房も、思いのままです。やがて不意に、地震、
水害に襲われます。

その時、初めて、気がつくのです。人間の
作ったものには終わりがあるということに。資
源も無限にあるわけではありません。終わりは必

ずやってきます。しかも不意にやってきます。

そのようにして、「老い」は不意に、私のところへやってきました。不意に「下り坂」に直面しました。

朝起きれば、何事もなく立ち上がり、普通に日常が始まる、と思いついでいました。「起床」というスイッチを押せば、あとは「自動」で、すべてが動き出すと思いついでいました。いや、夢を見ていたのです。

その自分に、「激痛」が「早く目を覚(さ)ませ」と鳴り続けます。「苦痛」は、人生に設定されている目覚まし時計であり、「老い」は、人類の遺伝子に埋め込まれている「死のプログラム」なのです。

五 アルツハイマー

次はアルツハイマー病を発症した友人のことです。

名門中学から、名門高校へと進み、そして名門大学の医学部を出た男性と、やはり名門校を出た女性が結婚しました。医院を開き、二人の子どもに恵まれ、人もうらやむ幸福そのものの家庭でした。

やがて、その家庭に不幸が訪れます。主人が、アルツハイマー病を発病したのです。診療ができなくなり、医院は閉鎖となります。奥さんは、幸福の絶頂からどん底に突き落とされます。

アルツハイマー病が進行して、今では新しい記憶はもちろん、古い過去の記憶も消えてしまいい、家族、友人の顔も見分けがつかなくなりました。徘徊、多動、昼夜逆転を繰り返し、奥さんは疲れ果てました。彼は、現在、施設に収容され、意味不明の言葉を大声で繰り返す毎日です。排泄は、自分ではできず、おしめを当てています。

見舞いに行くと、まともなコミュニケーションは成り立ちませんが、親しい者に対しては、

体が反応して涙ぐんだりします。知的なレベルでは無反応ですが、情的な面では、以前よりも敏感になっているようです。

世間的な「ものさし」から見ると、人格が崩壊しているというのかもしれませんが、心理学的な人格が崩壊しているだけであって、人間としての人格の尊厳は失われていません。

過去の栄光と比較すればこそ、現在の姿は、悲惨と言えるかもしれません。また、心理学的人格が立派に統合を保ち洗練されていた過去を思えばなおのこと、家族にとっては、現在の状態は目を背けたくなるほど衝撃的であるかもしれません。だから、現在の彼の姿は本当ではなく、過去の彼が本当なのだ、と思いたいのです。しかし、栄光に包まれた過去の彼だけが、本当なのだという思いは、かえって、彼の人格の尊厳をけがしているのではないのでしょうか。「名門」というレッテルだけに目を奪われて、その背後の彼の人格を見ることができないというこ

とこそ、悲惨ではないでしょうか。

人格とは、学歴でも、肩書でもありません。知能でもなく、まともに会話ができる能力でもありません。人格とは、「いのちそのもの」のことなのです。何の飾りもいらぬ、何のレッテルも必要としない「いのち」が、ただ「イノチしている」のが、人格です。そこに「ある」だけで、尊いのが人格です。意味付けも、目的も、存在理由もいらぬ「素」のイノチが人格です。アルツハイマーの姿のまま、人格なのです。

その姿を生かしているイノチは、人間の病や障害を超えたものです。だから、それは、この世の悲惨のなかで、その悲惨を通して、光り輝いているのです。その光が、この世の栄光とあまりに違いすぎるので、人間が、それに、気付かないだけなのです。

六 生きる意味

以上述べた事例によって私の言いたいことは、もうお分かりと思いますが、ここであえて繰り返すことをお許しください。

私は、認知症になっても、私なのです。生きても死んでも壊れても、私以外のものになりやうがないのです。「マトモな私が本当の私である」などという、おろかな思い込みが、認知症患者とその家族を、どれほど苦しめているのでしょうか。かつて秀才と言われた人ほど、現在の状態との落差に苦しむのです。まして、「廃人」となってしまった今は、生きる意味がなくなってしまったのでしょうか。

私がいくら壊れても、壊れたままで、やはり私なのです。壊れる前の私は、もう無いのです。無いものにしがみつこうとする空しい努力をやめて、壊れたままの私を、生死を超えて生き抜くしかありません。それが私の尊厳を守ること

になるのではないかと思います。

過去の地位や肩書や「栄光」にとらわれ、しがついて、現在の実物たるありのままの私を認めることができず、「昔は自分もみんなからうらやましがられていた」と繰り返し繰り返し思い出を楽しみ、過去の甘い記憶に酔って、ボケたいのが人間私の常です。そういう私自身に對し、私自身が大喝一声、「目を覚ませ！」というのが宗教なのです。つまり、宗教とは「覚める」ことなのです。または、「覚め方」を修行することなのです。

たとえば「覚める」とは、坐禅などをして「無念無想」になることだと思われませんが、そうすると「無念無想」を追いかけたり、雑念・妄想を追い払ったりすることが坐禅だと思ってしまう。

では坐禅中のアタマの中はどうなっているのでしょうか。

ある「思い」がアタマに浮かんだとします。

その「思い」が連想を生んで、ふくらんでゆきます。やがて連想が連想を呼んで、とんでもない所にまで発展してしまいます。

しかし、「思い」を追いかけたり、追い払ったりしている間は、「思いを相手に格闘している」のであって、「思い無し」になっているのではありません。

そのことにはと気づけば、いつの間にか「思い」の幻影は消えています。テレビのスイッチを切ったのと同じことが起こるのです。

つまり「思い」というものは、実体のないものであり、もともと「無いもの」なのです。世間は、その「無いもの」を「有るもの」と仮定・仮説して、「世間・世の中」というものをでっち上げ、その「世間・世の中」に自分を投げ込んでいたずらに苦しんでいるのです。しかしはっと気づいて覚めてみれば自分の一人芝居であったことに気がつきます。

人生問題に行き詰まって苦しみのあまり自殺

する人が多いわけですが、この「覚めてみれば」というところに気づいてほしいものです。「死んで楽になりたい」と思って自殺しようとするのですが、そこには「楽を追いかけている自分」というものがあって、それを握りしめている自分があるのです。

91歳の榎本栄一さんは、脳出血で入院し、頭の手術を受けました。その晩から、痛みと吐き気で一睡もできず、苦しみのあまり、夜中に爪切りばさみで左手の動脈を切ろうとしましたが、血まみれになりながらも死ねませんでした。

「夜ひる苦しいけれど」

私にはもう

自殺する力はありません

やはり自然に

死がきてくださるのを

待つほかないようです」

（榎本栄一「お手上げ」）

1985年8月12日18時56分、日航機が御巢

鷹山に墜落したとき、26歳の落合由美さんは、奇跡的に生存していました。翌13日13時28分にヘリコプターで救出されるまでの18時間32分という長い間、機体の残骸に、はさまれたまま、重傷に、時々意識を失いながらも、必死に耐えていました。

「呼吸は苦しいというよりも、ただ、はあはあ、とするだけです。死んでゆく直前なのだ、と私はぼんやり思っていました。ぐったりして、そのとき考えたのは、早く楽になりたいな、ということです。死んだほうがましだな、と思って、私は舌を強く噛みました。苦しみたくない、という一心でした。しかし、痛くて、強くは噛めないのです。」

(吉岡忍「墜落の夏」)

苦しみの果て、人間は、死にたいと思います。しかし、死ねません。死んで、楽になりたいと願います。しかし、楽になれないのです。

この世に生まれて来たとき、私は、今の人生

を選んで生れて来たのでしょうか。気が付いたら、今の人生だったのです。いやもおうもなく、「これがお前の人生だ」と、今の人生を生きさせられていたのです。そもそも、今の自分は、自分が選んだのでしょうか。気が付いたら、「これがお前だ」と、今の自分になっていたのです。

しかし、誰が命令したのでもありません。誰が「お前の人生」と決めたのでもありません。「お前の生命」「お前の死」と決めた者は、誰もいません。自分が決めたのでしょうか。自分が決めた人生なら、自分で自由に変えることも、場合によっては、終わらせることもできるでしょう。しかし、自分の自由にならないのが、この人生というものです。どんなに死にたくても、今のこの一秒を、ただ、生きるほかないのです。自分でもない、他の誰かでもない、自他を超えた大きなものによって、ここまで運ばれてきたのが、この人生です。今のこの一秒を、ただ、生きることによって、自と他、生と死、苦

と楽を超えた大きなものに、目が開かれるので
す。榎本さんが「お手上げ」とおっしゃっている
のは、そのところではないでしょうか。坐
禅をはじめとして、宗教は、まさにその「お手
上げ」を実践実行することなのです。

引用・参考文献

○「私は誰になっていくの―アルツハイマー病者からみ
た世界」

クリステイン・ボーデン著 松垣陽子訳

クリエイツかもがわ 2003年

○「私は私になっていく―痴呆とダンスを」

クリステイン・ブライデン著 馬籠久美子・檜垣陽子

訳

クリエイツかもがわ 2004年

○「痴呆を生きるということ」小沢勲著 岩波新書

2003年

○「幼児に返った父―アルツハイマー病介護の記録」

ロザリー・ホーネル著 紀伊国屋書店 1991年

○「プログ 認知症一期一会―認知症本人からの発信」

水木理著 クリエイツかもがわ 2007年

○「認知症と診断されたあなたへ」

小沢勲・黒川由紀子編著 医学書院 2006年

○「アポトーシスの科学」山田武・大山ハルミ 講談社

1996年

○「明日の記憶」萩原浩著 光文社 2004年

○「コトリと息が切れたら嬉しいな―榎本栄一いのち澄
む」

榎谷宗則記 探究社 2001年

○「墜落の夏―日航123便事故全記録」吉岡忍著 新

潮文庫 1989年



N君へのメール

(第1信)

N君、メール有り難う。

心配掛けてすみません。

毎朝夢見心地で眼が覚めて、「ハテ、今日は何年何月何日だったかな」と、いくら考えても分からず、しまいに考えるのを止めて、ひたすらボーっとしているうちに、「パソコンにメールが入っているかもしれない」と思い始めて、「ハテ、パソコンはどうやって立ち上げるんだっただかな」と、これまたいくら考えても分からず、またひたすらボーっとする、といった霧中状態です。数時間が過ぎて行きます。

それでも、今日は少しばかり霧が晴れてパソコンにたどりつき、君のメールを拝見することができました。

教会へ行つて礼拝すればすっきりと霧が晴れるかと期待して行つてみるのですが、かえって霧が深くなる一方です。そして酸欠状態になって疲れて帰宅するので、認知症がますます悪化します。せめて、説教のあとで、1時間と言わず30分でも質疑応答の時間を作ってくれて、すっきりさせてもらえないかなと思つたりします。

今のところ、教会へ行くのは、神学部のIという助教が、壮年会で内村鑑三について発題するのを聞きに行つて質問したり、討論するのだけが楽しみです。あとは、私が主宰している聖書研究の会と坐禅の会で、なんとか息を吹き返しています。

また霧が立ちこめて来そうなので、今日はこれくらいで失礼します。

(第2信)

拜復。

私の認知症を心配して下さって有り難う。

今日はいつになく頭がすっきりした感じなので、私の認知症について説明させていただきま

す。

現在私は、脳神経外科で、問診、MRA（磁気共鳴血管画像）、MRI（核磁気共鳴画像法）、頸動脈エコー（超音波診断）などから、脳梗塞、脳萎縮、頸動脈狭窄と診断されています。おもな症状は、見当識障害（時・場所・人の認識障害）などです。その治療としては、症状が進むのを遅らせる程度のことしかできないように、血圧を下げたり、血管が詰まらないようにする薬を処方してもらっています。しかしそういう診断も、しよせん患者を外から見ただけで、患者の不安や苦痛はわかりません。そもそも他人の内面までわかるということは、医者であつ

ても不可能なのです。まして普通の人間にそんなことができるはずはありません。認知症やアルツハイマーの患者を本当に理解しようとするならば、患者の心の中にまで入り込んで、患者と同じ症状を体験しないと理解したことにはなりません。

それをみごとにやっつてのけた例があります。ハーバード大学で神経科学の博士号を取った「リサ・ジェノヴァ」という女性が、『静かなアリス』（講談社）という物語を書きました。とても小説とは思えないほどなまましく迫ってきます。

主人公はアリスというハーバード大学の認知心理学の教授で世界的に有名な女性研究者という設定です。アリスは50歳のとき若年性アルツハイマー病と診断されます。そして今自分に分かっていることも近い将来分からなくなるといふ不安に取りつかれます。そういう不安は、味わっている本人でなければ理解できないことで

す。本人にとっていちばん恐ろしいことは、記憶がなくなっ行って行き、自分が誰だか分からなくなっ行って行くのではないかという不安です。

ではこの『静かなアリス』という小説に救いはないのかというと、そうではありません。その『静かなアリス』という題名に救いが暗示されているのです。その題名は原書の『Still Alice』を訳したのですが、実は『Still Alice』は『静かなアリス』ではなくて、『それでもやはりアリス』と訳すべきなのです。つまり、『アリスは、どんなに壊れてもアリスだ』、『アリスは、アリス以外のものになりようがない』ということなのです。

ただしいくら壊れたアリスの破片をかき集めて復元できたとしても、それは本当のアリスではありません。アリスは、断片のアリスの総和以上のものなのです。いくら部品をつなぎ合わせてもアリスの『いのち』にはなりません。

またアリスが事故で手足を失って『達磨状態』

になったとしても、それでアリスでなくなったわけではありません。アリスはアリスであることをやめてはいけません。

ではアリスが死んだ場合はどうなのでしょう。アリスを本当に愛している人はアリスという存在が無くなっってしまったとは思わないでしょう。アリスが死んでしまったとしても、アリスの気が狂っってしまったとしても、アリスに対する愛は変わらないでしょう。アリスに対する愛という場合、そのアリスは気が狂う前のアリスでしょうか、死ぬ前のアリスでしょうか、気が狂っってしまったアリスでしょうか、死んでしまったアリスでしょうか。

以前、猿山の母猿が、わが子猿が死んでしまったのを悲しんで、ミイラになった子猿の死体を背中に背負ったまま、何日もさまよっていたという話を聞いたことがあります。この母猿は、もちろん背中のミイラになってしまったわが子がまだ生きていると思っただけではないで

しょうが、かと言って母猿が『死』ということ
を理解できるはずありません。そもそも『思
う』ということが猿にはないでしょう。『思う』
をはじめとして、人間の考えを猿に当てはめて
いるのが、人間の『猿理解』なのです。人間界
の『神話』を使って猿の行動を理解し、表現し
ようとする乱暴な試みなのです。

それは患者と医師の間についても言えること
です。医師は自分の医学的経験や医学知識の中
に患者の症状や心理を取り込み、医学界の『神
話』を使って患者の病気を理解し、表現しよう
とします。

ここで、『神話』とは何かということについ
て考えて見たいと思います。

私たちは日常「お日様が東から昇って、西に
沈む」と言います。そして、自分の言っている
ことが、どこかおかしいとか、何か間違っただ
とを言っている、というふうには思いません。
他の人も、私たちが、天動説をとなえていると

も、非科学的だとも言わないでしょう。たしか
に、地球の自転の結果、日が昇ったり沈んだり
するように見えるだけです。

そこで、「日が昇った」ということを、あえ
て『科学的』に言おうとして、「私が乗っかっ
ている地球が一回りした。そのため、私が地球
上に立っている地点を基準点とすると、太陽が、
『東』という相対的な方向から昇っているよう
に見えるが、実は私の立っている地点が、『東』
という相対的な方向へ向かって回転しているの
だ」と言ったとすると、聞いている人は、「こ
の男はアタマがおかしいんじゃないのか」と思
うでしょう。『日の出』や『日没』と言うよう
な表現を使わないで、地動説的に説明しようと
必死になればなるほど、周りの人は、私たちが
何を言っているのか、ますますわからなくなっ
てしまうでしょう。

『東』と言っても、『西』と言っても、『昇る』
と言っても、『沈む』と言っても、すべて相対

的な表現なのです。わたしたちが生きている世界は『相對』の世界なので、そこには、『絶對的な東』も、『絶對的な西』もありません。『上』と言っても、『下』と言っても、何かを基準として、『その上』、『その下』と言えるだけで、『絶對的な上』もなければ、『絶對的な下』もないのです。私たちが、日常使っている言葉は、すべて、相對世界の言葉であって、絶對的なものを表現しようとすれば、『神話』という形式を使わざるを得ないのです。

地動説も、天動説も、天体の動きを理解し、表現するための『お話』に過ぎません。『お話』は、『道具』であって、絶對的な真理ではないのです。それらは、いわば『科学的』という包装紙で格好をつけているだけで、どれも自身は『神話』なのです。地動説が『科学的』であって、天動説は『非科学的』であり、『迷信』であると決め付けたりするのは、自分の立場が『絶對』であり、『不動』であるとする態度であって、

それこそまさに『天動説的』態度と言わねばなりません。

本来『科学』とは、あらゆる常識を疑ってかかるところから始まるのです。『科学』が『常識』となってしまうている場合には、その『常識』を疑ってゆかなければ、本当の『科学的態度』とは言えません。たしかに、現代では、地動説が『通説』となっています。『通説』に異を唱えるのは、よほど非常識な人間か、自信のある人間でしょうか。なぜなら、『通説』は、たいてい『自称科学者』のお墨付きで権威付けられていると思われるからです。でも、いったい何人の人が、自分で『通説』を検証したのでしょうか。『みんながそういうから、そうなんだ』で済ませているというのが実情ではないでしょうか。地球が太陽の周りをグルグル回っているのを見た人があるでしょうか。宇宙飛行士でも、自分の乗っている宇宙船を基準にして、地球と太陽の動きを見ているだけで、見えない

部分は仮説で補っているので、全体を見ているような気がするだけではないでしょうか。そもそも人間は、宇宙全体をひと目で見ることはできないのです。『宇宙全体』という『神話』をでっち上げていくにすぎません。

認知症とはこういう神話がいつさい通用しなくなつたということなのです。認知症患者には時間も空間もないのです。

先日私は友人と神戸市役所で待ち合わせをしました。そこへ行くために、三宮駅で電車を降りたときには約束の時間に十分間に合うはずでした。ところが行けども行けども目当ての神戸市役所に行きつかないのです。変だと思つて行きずりの人に聞くと、私はまるで反対側に向かつて歩いていたらよいのです。神戸という街は地理が非常に分かりやすく、絶対にとつていいほど迷うことはありません。北は山が見えるので『山側』、南はその反対なので『海側』と言つて、山を見て歩けば自分がどの方向に向

かつて歩いているのか一目瞭然と分かるのです。

私が歩いているうちに変だと思つた時には、南の待ち合わせ場所とはちょうど反対側の北に向かつて1キロほど歩いていたので、『場所の見当識障害』が起こつていたので。『場所の見当識障害』とは、『今自分がどこにいるのか』、『自分の行く場所はどの方向なのか』などが分からなくなつた状態です。『どこ』とか『どの方向』とかは、人間社会が仮に決めた東西南北にもとづいています。つまり世間の約束事なのです。時間もやはりその約束事の一つです。この相対世界はその約束事で成り立っています。そんな面倒なことなどどうでもよくなつていのが認知症患者です。本当は自分の好きな方向に歩いて行きたいのですが、それを実行すると『徘徊』になります。だから何とか周囲の「健全人たち」と折り合いをつけるために、無理をして「健常レベル」で振舞わなければなりません。これはかなりしんどい演技なのです。「健

常人たち」を納得させ、なだめすかすというのは、実に骨の折れる作業です。

とりわけ骨が折れるのは、「正常」と「異常」の距離、さらに「生」と「死」の違いに目を奪われている「健常人たち」に付き合わねばならないときです。認知症患者にとっては、「正常」と「異常」の距離、さらに「生」と「死」の違いなどはしよせん神話の世界の話なのです。

「健常人たち」に付き合うということは、彼らの神話に付き合うということです。名誉、金、健康、常識——。これほど不毛な努力はないでしょう。もうそんなことはご免こうむって、「健常人たち」のお仲間に入れていただくなんていう色目を使ったりするのはやめようと思いません。

私は認知症になっても私なのです。生きても死んでも壊れても、私以外のものになりようがないのです。「マトモな私が本当の私である」などという愚かな思い込みが、認知症患者とそ

の家族をどれほど苦しめているでしょうか。かつて秀才といわれた人ほど、現在の状態との落差に苦しむのです。

私がいくら壊れても、壊れたままでやはり私なのです。壊れる前の私は、もう無いのです。無いものにしがみつこうとする虚しい努力をやめて、壊れたままの私を、生死を超えて生き抜くしかありません。それが私の尊厳を守ることになるのではないかと思います。

自分でもない、他の誰かでもない、自他を超えた大きなものによってここまで運ばれてきたのが、この人生です。いまのこの一秒を、ただ生きることによって、自と他、生と死、苦と楽などという「神話」を超えた大きなものに目が開かれるのです。

いまのこの一秒というのは、一秒という長さをいっているわけではありません。神話の霧が晴れてすっきりした瞬間のことをいっているのです。いや、霧が晴れないままでも、すっきりし

ないままでも、どうしてもよくなった状態のこと
なのです。霧を晴らそう、神話を抜け出そうと、
もがかなくてもいい状態のことです。霧や神話
は、もともと実在しないのです。自分が勝手に
作り出して、それにとらわれているだけなので
す。それが分かれば、認知症なんでもともと実
在しないものを恐れたり、恥ずかしがったりす
る必要はありません。これからは心を入れ替え
て、「憚りながら認知症でござい」と大手を振っ
て闊歩しようと思っています。

(2011年5月櫛谷宗則編集『共に育つ』第
13号)



生きる意味

「華嚴の滝からのメッセージ」

人間としてこの世に生を受けた者は、誕生の瞬間から、一人の例外もなく、死に向かつて、確実に歩み続けています。その死が、いつやって来るのかもわかりません。では、死に到達するまでは、平穩無事なのでしょうか。そうではありません。病気に遭い、人間関係に傷つき、生きる意味を見失い、老いに悩み、満身創痍となつて、息も絶え絶えに、死にたどり着くのです。つかの間の幸福感や充実感があつても、それは、砂漠の蜃気楼のように、追えば追うほど遠ざかり、追う者はやがて疲れ果てて、命を失うにいたります。そのような人生に、どんな意味があるのでしょうか。

一 巖頭の感

一九〇三年（明治三十六年）五月二十二日、満十六歳十か月の藤村操という第一高等学校（旧制一高）の生徒が、栃木県日光山中の華嚴の滝で、高さ九十七メートルの断崖から飛び降り自殺をしました。断崖に生えていたミズナラの大木の幹には、木肌をけずつて、次のような辞世が書き残されていました。

「巖頭の感」

悠々たる哉天壤、
遼々たる哉古今、

五尺の小軀を以て此大をはからんとす。

ホレーシヨの哲学、竟に何等のオーソリチーを
価するものぞ。

万有の真相はただ一言にして悉す、
いわく「不可解。」

我この恨を懐いて煩悶

終に死を決するに至る。

既に巖頭に立つに及んで、胸中何等の不安あるなし。

始めて知る、大なる悲観は大なる樂觀に一致するを

(水野私訳)

「岩の上に立つて感じる」と

無限の空間

無限の時間

ちっぽけな体でその無限が測れようか

世間の常識など何の役にも立たない

世界や人生の意味はただ一言に尽きる

「わからない」のだ

自分はその無意味さに耐えられず苦しんで

結局死ぬ以外にないと決めた

今岩の上に立って心に恐怖はない

絶対的な絶望は、絶対的な希望と同じことであることが始めてわかった

絶対的な「絶望」とは、「ゼロ」として言い表されます。絶対的な「希望」とは、「無限大」として言い表されます。これはきわめて論理的な詩です。しかしその論理的な詩の中央に「不可解」とあるのはどうしてでしょうか。論理をもつてしては届かない、したがって表現できないものがあるということをおうとしているのでしょうか。これについては、後ほど詳しく見てゆきます。差し当たっては、華嚴の滝について知っておきたいと思えます。

日光には四十八滝といわれるくらい滝が多いようですが、最も有名なのが華嚴ノ滝です。高さ九十七メートルをほぼ一気に落下する豪快さと、自然が作り出す華麗な造形美の両方をあわせ持つからでしょう。和歌山県の那智ノ滝、茨城県の袋田ノ滝とともに「日本の三大名瀑」とも呼ばれています。

お釈迦様は、一、華嚴 二、阿含 三、法等
 四、般若 五、法華涅槃というふうには、五段
 階に分けて、次第に深い教を説かれたとされ
 ます。日光の滝の中の五つの名前は、その順序
 に名づけられ、華嚴の滝が一番目となっていま
 す。

さて、その華嚴の滝で、なぜ藤村操が自殺し
 たのでしょうか。

まず、一高での藤村操について見ておきま
 しょう。

二 漱石と藤村操

夏目漱石は、一高で英語を教えていました。
 その頃の一年生のクラスには、安倍能成、中勘
 助、野上豊一郎、藤村操、前田多門などがいま
 した。のちに、藤村の妹、恭子は、安倍能成と
 結婚します。

五月中旬のある日、漱石は、藤村操に訳読を

あてました。すると、藤村は妙に高ぶった態
 度で、「やって来ませんでした」と答えました。
 漱石が、「なぜやって来ない」と聞くと、「やり
 たくなかったから、やって来ませんでした」と
 言うのです。漱石は、ムツとしましたが、怒り
 をおさえて、「次の時までにはやって来るように」
 と言いつけました。しかし、次の時間に藤村に
 あてると、この時も、やって来ていませんでし
 た。漱石は、痲癩を起こして、「勉強をしたく
 ないなら、もう教室に出てこないでもよい」と、
 激しく叱責しました。

藤村が華嚴の滝に身を投げた五月二十二日は、
 漱石の叱責の二日後と、秦郁彦は推測していま
 す。(秦郁彦「旧制高校物語」)

漱石が藤村の自殺を知ったのは、五月二十六
 日の朝でした。那珂通世の追悼文が新聞に載っ
 たのです。たまたま第一時間目に藤村の在籍し
 ていたクラスに出講した漱石は、教壇に上るな
 り最前列の生徒にたずねました。「君、藤村は

どうして死んだのだい？」。その生徒は、「先生、心配ありません。大丈夫です」と答えました。「心配ないことがあるものか。だって、死んじまつたじゃないか」と言いました。明らかに、漱石は、自分が叱責したために、藤村が死んだのではないかと気にしていたのです。

では新聞に載った那珂通世の追悼文を見てみましょう。

三 那珂通世の追悼文

藤村操の父、藤村胖は北海道屯田銀行頭取でした。藤村胖の弟藤村通世は、藩儒（藩主に仕える儒者）那珂梧楼（五郎）の養子となり、那珂通世と改名します。後に第一高等学校や東京高等師範学校の教授となり、東京帝国大学の講師も兼ね、その間にも日本・朝鮮・中国の歴史について実証的な研究を多く発表しました。また、研究のために当時珍しかった自転車を使っ

て国内外を旅行したために「自転車博士」という異名が付いたといわれます。

五月二十六日の朝、新聞「万朝報」に次のような記事が出ました。

「那珂博士の甥、華嚴の瀑に死す」という見出しに続き記事が記されていました。

「自転車博士の異名あるばかり斯道に嗜み深き高等師範学校教授那珂通世文学博士の甥に方る藤村操（十八）というは、第一高等学校の生徒にて、同学中俊秀の聞こえある青年なりしが、去る二十日家出をなし、終に日光は華嚴の滝壺に身を投じて悲酸なる最期を遂げたり。右につき、叔父那珂博士は、わが社に宛て、左の如き悲痛の文を送られたり。其青年の平生・死因等明らかに記されたれば、其全文を掲ぐる事とせり。

『嗚呼哀しいかな、痛しいかな。余が兄の子藤村操、幼にして大志あり、哲学を講究して、宇宙の真理を発明し、衆生の迷夢を醒まさんと

欲し、昨年より第一高等学校に入り、哲学の予備の学を修め居たれども、学校の科目は、力を用いるほどの事に非ずとて、専ら哲学・宗教・文学・美術等の書を研究して居たりしが、去る二十日の夜、二弟一妹と唱歌を謡い、相撲を取り、一家愉快に遊び楽しみ、翌二十一日の朝、学校に行くとして出でたるまま、二十二日になりても帰らず、母、大いに憂いて、机の引き出しを明けて見たるに、杉の小箱の裏に「この蓋あけよ」と大書しあり。開いて見れば、七枚の半紙に、二弟一妹と近親五名と親友四名とに配賦すべき記念品と、学校その外友人十余名に返すべき借用書籍の名とを、委しく列記せり。「こは死を決したる家出なり」とて、急に大噪ぎとなり、親戚朋友の家へ電話・電報にて問合せたれども、何れも「来たらず」と云う。午後八時に至り、「日光小西旅店寓」として、郵書達し、「不孝の罪は、御情の涙と共に流し賜いてよ。十八年間愛育の鴻恩は、寸時も忘れざれども、

世界に益なき身の生きてかいたなきを悟りたれば、華嚴の瀑に投じて、身を果たす」

との趣旨をくわしく告げこせり。余、これを聞き、徹夜輪行（夜を徹し人力車で行く）して日光に至らんと思い駆け出だしたるが、栗橋の渡し、夜渡さぬことにころづき、残念ながら下谷より引き返し、今朝（二十三日）一番汽車にて、操の従兄弟、高須正太郎とともに日光に至り、巡査、車夫と力を合わせて、華嚴の瀑の上下をくまなくさがしたれば、瀑の落ち口の上なる巨巖の上に、こうもり傘を植てるあり、近寄りて見れば、大樹を削りて、左の文を記せり。
 （ここに「巖頭の感」全文が入る）

樹のかたわらには、傘のほかには、大いなる硯と墨と、太き唐筆と、大いなるナイフとあり。これらの器具は、家を出ずる時、あらかじめ用意したりと見ゆ。その運筆の優美なるを見れば、巖頭に立てる時、心中の、従容として安泰なることは、察するに余りあり。ああ、余がごとき

楽天主義の俗人の甥に、いかなれば、かかる極端の厭世家を生じたるか、思えば思えば、不可思議なり。巖角を攀じて見下ろせば、六十丈の懸泉は、巖石を砕いて雷のごとくとどろき、滝壺は、暴風雨のごとき飛沫におおわれて、見えず。かくて身の丈五尺五寸余、眉目清秀にして、頬に微紅を帯び、平生、孝友（親に孝をつくし兄弟の仲のよいこと）にして、一家の幸福の中心と思われし、未来多望の好少年は、去つて返らず、消えて痕なし。ああ、哀しいかな。

明治三十六年五月二十三日の夜、中禅寺湖畔の旅館、蔦屋にて、

叔父、那珂通世、痛哭して記す。』

ちなみに、藤村操の父胖の再婚に際しては、那珂通世が仲立ちをして、蘆野晴をすすめたそうです。操の実母は晴です。再婚当時、操の上には先妻の子が二人いたようですが、同居していません。先妻は死別か生別か分かりません。

父胖は、一八九九年（明治三十二年）に五十六歳で死んでいます。自殺とも癌による病死とも言われます。操は、父の死の四年後に自殺したことになります。

三 ホレーシヨの哲学

ホレーシヨというのは、シェイクスピアの「ハムレット」に出てくる、ハムレットの友人ですが、哲学者ではありません。「ハムレット」という劇の狂言回し・舞台回しの役をしている登場人物です。では、ホレーシヨの哲学とは何でしょうか。私見ですが、説明しがたい、語り得ない真実を、あえて説明し、語ろうとするときの舞台設定のことではないでしょうか。ホレーシヨの科白に、「何も知らない世間に一部始終をお話するのが、自分の役目」というのがあります。ホレーシヨは、説明しがたい、語り得ない真実を語りつくしてしまおうとするのです。

しかし、これは無理な話であるだけでなく、真実のもっている深さをおおいかくし、真実の重さを軽くしてしまう、危険な行為になってしまいます。

真実とは、位置だけあって、面積のない、幾何学的な点、「無の一点」なのです。人生のなぞに対する答は、理解しようとしても理解できず、表現しようとしても表現できない「無の一点」です。ハムレットの「在るべきか、在らざるべきか。それが問題じゃ (To be, or not to be: that is the question)」という科白に対し、ホレーシヨの哲学は、何も答えられませんが、あえて答えようとすれば、「不可解」なのです。生か死か、存在か非存在か、というような、人生の究極的・根源的な意味にかかわる問いに対して、ホレーシヨの次元からは、何も答えられないのです。ホレーシヨは、「何も知らない世間に一部始終をお話するのが、自分の役目」と言っている通り、「世間」を相手にして、

何かを表現するのが、ホレーシヨの役回りなのです。だから、ホレーシヨの言葉は、「世間語」です。根源的な問いと、根源的な答えは、「世間語」を通せば、深みを失ってしまいます。だから、「ホレーシヨの哲学ついに何等のオーソリチー（権威）を備えるものぞ」と言わざるを得ないのです。

ところで、藤村操の死後、さまざまのうわさが世間に流れました。そのうちの主なものは、藤村操の失恋説と、藤村操の生存説です。どちらも荒唐無稽と言ってもいい風説ですが、一応取り上げてみます。

一九〇四年（明治三十七年）二月九日、夏目漱石は寺田寅彦あてのはがきに次の詩を書いています。

「水底の感」

藤村操女子

水の底、水の底。住まば水の底。

深き契り、深く沈めて、永く住まん、君と我。

黒髪の長き乱れ。藻屑もつれて、ゆるく漾う。

夢ならぬ夢の命か。暗からぬ暗きあたり。

うれし水底。清き吾等に、譏り遠く憂透らず。

有耶無耶の心ゆらぎて、愛の影ほの見ゆ。

巷間に流布していた風説を背景に、漱石が創作したロマンスの詩と言えるでしょう。漱石が失恋説を信じていたとは思われませんが、失恋説の背後には、「斯くあつてほしい」という世間の願望があつたことは確かです。人生に対する藤村操の根源的な問いを理解できないのが世間だからです。

安倍能成は、一高で藤村操と机を並べて漱石の授業を受けましたが、後に操の妹恭子と結婚します。安倍は、最初失恋説を否定していまし

たが、一九四九年（昭和二十四年）九月、『巖頭の感』をめぐって」の中で、

「彼の死の原因が失恋だということは、当時からも様々の風説から伝説までも生んだが、私は近頃になつて彼から求愛された婦人のあることを耳にした。こういうことが彼の死の一つの原因だろうことも十分に考えられる」

と言ひ、また、一九六六年（昭和四十一年）十一月には、「我が生い立ち」の中で、

「藤村の死後様々の伝説が生じ、藤村の死を失恋に帰する議論も多かつたが、私はそれを否定しようとも思わない。藤村が失恋によつて死んだとしても、それは藤村の名誉でも不名誉でもないと思う私は、むしろその背後にこれがあつたとさえ思うのである」と述べています。

次に藤村操の生存説ですが、これも失恋説に劣らず世間の井戸端会議でにぎわう噂話に過ぎ

ません。

藤村操の遺体は、投身後四十日以上たった一九〇三年（明治三十六年）七月三日に発見されました。そのときの様子について、安倍能成は、「我友を想う」の中に、

「已にして、君がなきがらは、あらこもに包まれて、徐に滝壺よりかき上げられぬ。堪うべからざる異臭は先ず烈しく我が鼻をつきたり。ああこれ君が肉より放つの臭なりき。君が四肢五躰なお悉く欠けざれど、膚は一面に灰色を帯びたり。胸のあたり少しく紅を潮せしは、岩かどにうたれしにや。頭髮皆脱けて、顔はかたちをそこなえり。何の所にか、おだやかに鋭かりし君が眼ざしと、ゆたかなる笑を湛えし紅の頬を求めん」

と記しています。

一九〇三年（明治三十六年）七月六日付け新聞「万朝報」は遺体の様子を、

「全体灰白色にて胸部は殊に白く、背部に黒味

を帯び、右胸部に長四寸幅一寸の傷あり、肋骨一本挫折し居るは巖頭より落下の際崖に触れたる為めなる可し」と報じています。これらの記述からは、その遺体が藤村操であったことを証拠付けるものは見出せません。後追い自殺をした青年のうちの一人であった可能性は否定できません。当然のごとく、藤村操が自殺に失敗して、どこかで生存していたという風説が流れることになりました。

しかし、生存説にしても、失恋説にしても、世間の好奇心から出た「下種の勘ぐり」であり、ホレーシヨのレベルに過ぎません。

四 人生不可解

藤村操投身の年に、華嚴の滝に飛び込んで死んだ青年は十一名、未遂に終わったものは十五名でした。明らかに、人生不可解・人生無意味の思想に影響されての自殺でした。一九〇三年

に、第一高等学校で、藤村操を教えた夏目漱石は、「行人」（一九二二―一九一三年）のなかで、「死ぬか、気が違うか、それでなければ、宗教に入るか、ほくの前途には、この三つのものしかない」と、登場人物に語らせています。「ころ」（一九一四年）では、明治天皇の死、乃木大将の殉死、「k」と「先生」の自殺、などを描きつつ、死の背後にある「罪意識」の問題に近づこうとしています。

罪と死については、稿を改めて述べなければならぬ問題ですが、今は、藤村操との関連において、華嚴の滝に飛び込んだ青年たちや、漱石のことを考えると、彼らは、藤村操の死から、何か強烈なメッセージを聞き取っていたにちがひありません。「ホレーシヨの哲学」、すなわち、「世間の常識」の中にどっぷりつかりこんでしまつて、人生の真相が見えなくなった「常識人」たちを、痛烈に批判しているのが、「巖頭の感」なのです。

「おまえは何のために生きているのか」。「人生の意味は何か」。これらの問いに對して、どう答えようと、しょせん、本当のところはわからないまま、「知つたかぶり」で「利いた風な」答えしか答えられません。いくらえらそうなことを言つても、どうせ、人から聞いたり、本で読んだりした「單なる知識」にすぎないので。本当の答えは、「不可解」です。しかし、「不可解」では、答えになりません。では、答えのない人生なら、死ぬ以外にないのでしょうか。

漱石は、一九一六年、五十歳で病死しましたが、死の前年に、「私は、『死んで初めて絶対の道に入る』と申したので」と言っています。死んで初めて、人生の意味がわかる、ということです。しかし、漱石は、死のまぎわになつて、「今死んだら困る」と言い出します。たしかに、死んでしまつては、人生の意味は、わかりませんかと言つて、生きていたのでは、人生の中に埋もれてゆくだけです。人生から脱出しながら、

生きることができれば、その生き方それ自体で、生きる意味を体现することができません。言い換えば、「死んで、生きる」、「生きながら、死ぬ」ことができればいいのです。そんなことができるでしょうか。

五 生きる姿勢を求めて—私の場合

一九五〇年（昭和二五年）九月、大阪桜橋の朝日会館で、フランス映画「情婦マノン」を観ながら、睡眠薬自殺をした十九歳の青年がいました。名前をAといい、高校では私の二年上級で、新聞部の部長でした。私は部長でした。

Aは共産主義者で、文学青年でしたが、「キリストが神の子であるということを一度も疑ったことはない」と言っていました。私は、Aから思想的な影響を強く受けていました。Aは高校卒業後浪人生活をしていましたが、その彼が自殺をしたという知らせを受けたショックで、

私の内にくすぶっていた人生への疑問が一気に噴き出しました。

「人間は何のために生きているのだろうか」
「人生の目的・意味は何だろうか」

しかし、それは答えのない問いでした。二枚の鏡を、合わせ鏡に向き合わせて、問いを映せば、問いは問いを生じ、生じ続けてとどまることを知りません。問いのみあって、答えは見つからないのです。

なぜでしょうか。

人生の目的は何かということを追求して、その目的に達したら、あとの人生は目的を失ってしまいます。また新たな目的を発見しても、そこに到達したら、また無意味・無目的な虚無が立ちはだかっています。次から次へと目的を立てて、はてしなくさまよう姿こそ、私たち人間すべての姿なのではないでしょうか。

人間は、

「山のあなたの空遠く、『さいわい』住むと人の

いう。

ああ、われ人ととめゆきて、涙さしぐみ、かえりきぬ。

山のあなたになお遠く、『さいわい』住むと人のいう。」

(カール・ブッセ)

のように、追っても追っても逃げてゆく蜃気楼を追い求め続けて、ついには疲れ果てて砂漠の中で死んで行かねばならないのでしょうか。Aが死ぬ間際に観た映画「情婦マノン」の最後は、二人の愛人たちが、砂漠の中で、自ら掘った砂の穴の中で死んでゆく場面でした。

当時高校生だった私は「情婦マノン」を見ておりましたが、生きる意味について解決がつかないまま悩みぬいて、このままで行けばAと同じ道をたどることになるのではないかという不安にとらわれました。

その結果、理性を黙らせ、目をつぶって、まるで飛び込み自殺でもするような気持ちで、キリスト教会で洗礼を受けました。しかし、期待したような奇跡的な解決は得られませんでした。大学進学に当たっては、神学部以外は目に入りませんでした。

それを口にしたとき、当然、両親は猛反対でした。親類はもちろん、近隣の知人まで巻き込んで、私を思いとどまらせようとなりました。

「彼は失恋したので神学部へ行くらしい」といううわさまで流れました。

私に迷いが生じました。

「まず、文学部教育学科へ進んで、それから神学部へ行くても遅くはないのではないか。」

担任の先生は熱心なキリスト者でした。私の家まで来て、私を神学部に行かせてくれるよう、両親の説得に当たってくれました。

紆余曲折のはて、結局私は神学部に入りました。

そんなにまでして入った神学部は、修道院のようなどころかと想像していたのですが、信仰の修練はほとんどありませんでした。神学も私の疑問に答えてはくれませんでした。教授の中には、他人の学説を紹介するだけの講義で済ませたり、出世の手段として、読書感想文のような稚拙な論文をせつせと書いている教授もいました。彼らは、人生についての根源的な問いを持つこともなく、ただひたすら名誉と地位を求めめることに汲々としているようでした。彼らから得たものは、ヘブライ語、ギリシア語、ドイツ語など、語学だけでした。

唯一の例外は神学部の松村克己先生と文学部教育学科の三井浩先生でした。両先生から、私は、本当の学問とは何かということを学びました。

私は、両先生の影響が色濃く見られる「旧約聖書正典論序説」という修士論文を書きました。

その結果、神学修士というレッテルを貼ってもらいましたが、それは私の求めている解決とは何の関係もありませんでした。

卒業後一年間、教会の伝道師として働きましたが、自分の中で、人生の問題が、依然としてくすぶり続けているのを感じていました。

そのころ、NHKの「僻地に光を」というキャンペーンを知って、「僻地に行こう」という思いが湧き、宝塚市の山間部の公立中学の教師になりました。

同時に、かねてから関心を持っていた仏教を、徹底して学んでみたいと思い、京都の安泰寺という禅寺に坐禅に通うようになりました。そこで、私は、坐禅を通して、「今」という無の一点に返ることを学びました。そして、初めて、坐禅が、キリスト教の十字架と復活の体験と一致することに気がついたのです。

そして、坐禅の光でキリスト教を照らせば、

キリスト教の福音が、よりはっきりと理解できました。またキリスト教の光のもとで坐禅をすれば、坐禅のねらいが、より正確にさだまりました。

今や、私にとって、坐禅とキリスト教は、二つの方向から人生の意味に光を投じて、それを立体的に浮かび上がらせる働きをするようになっていっているのです。

人生の意味を考えようとすると、どうしても、人生の意味を、自分の外に求めようとしてしまいます。人生を生きる根拠・意味を、自分の外に見出そうとするのです。その態度で考える限り、絶対に答は見つかりません。

人生問題の答が得られないからと言って、自殺して行った人は、答を外に求めて必死に追求し、ついに力尽きてしまったのです。

人間の眼は、外を見るようにつくられていまずから、人生の意味を外に求めざるを得ません。

それは人間の背負っている宿命です。したがって、人生の「根拠喪失」・「意味喪失」は、人間の宿命なのです。

では、そもそも人生は無意味・無目的なのでしょうか。

そうではありません。外を見る目を内に向ければいいのです。外に求めないで、「今」という無の一点に返りさえすればいいのです。

私たちが目前にしている死は、そのことを私たちに告げています。死が指し示すものは、内と外の二つ・生と死の二つを超えた、あなたの次元・「復活のいのち」です。自分の外に答えを見出すことが解決なのではなく、「今、ここ」の無の一点が解決なのです。

自分の外に答えを見出せないということは、人生の究極的解決のありかへと、私たちの眼を向けさせます。今自分が生きている生の前に、徹底的な死がなければなりません。死を経ない生は、動物的な生存にすぎません。

断絶を経て、はじめて、生も死も超えたほんとうのいのち、「復活のいのち」が、私のものになるのです。それこそが、私が求め続けてついに答えが得られなかった人生のほんとうの意味なのです。無の一点のいのちに目覚めれば、今この一瞬が「完結」となります。死が完結なのではありません。生きる一瞬一瞬が完結となるのです。と同時に死の一瞬も完結となります。無の一点はゼロですが、それは同時に無限大です。藤村操が死の直前に悟ったのは、このところだったのではないのでしょうか。

その一点は、「復活」の一点なのです。復活は、蘇生ではありません。蘇生であれば、その生は、いつかまた死ななければなりません。復活は、決して死ぬことのない生です。永遠の生命と言うときの「永遠」は、「いつまでも続く」とか、「終わりが無い」とかいう意味ではありません。時間が、無限に延長するという意味ではありません。時間を超えているので、「永遠」

と言うしかないのです。この世を超えているので、「永遠」と言うのです。この世の次に来る「あの世」ではありません。「世を超えている」ので、「神の国」としか言われません。復活は、「不死」ではありません。死を含み、死を超えて、「死を生きている」のが、復活です。一人の例外もなしに、すべての人間が、この復活のいのちに生かされているというようなことは、この世の常識や約束事を超えた事柄です。それこそが、藤村操が「大なる悲観は大なる楽観に一致する」と言ったところなのです。



イエスを、神はよみがえらせた。
そしてわたしたちは皆その証人
なのである。(使徒行伝 2・32)

あとがき

矢谷 慈國

この「あとがき」を書くはずであった永谷弘兄は二〇一二年十月十七日（水）に急逝されました。水曜日朝、彼の陶芸教室に行き、シャッターを開けたとたん倒れ出てきて、彼の死の立合人となっ
てしまいました。クモ膜下出血による突然死でした。

彼の葬式の日には、治子夫人から、彼を編集者として『水野吉治遺稿集』出版の計画が進められていたことを聞かされ、その仕事を私に引き継いでもらいたいという要請を受けました。

あの独立不羈の永谷兄が唯一師事し尊敬していた、水野先生とわたしの出会い、関学高二年のクラスキャンプに当時関学大神学生であった先生に聖書研究の講師として千刈でお会いしたのが最初でした。その後何十年もたって、私があんのん陶芸教室の弟子になったり、永谷兄の主催する篠山での「酒呑百姓の会」に参加するようになってから、それらの呑み会で水野先生と再会できました。永谷兄につれられ仁川のお宅で坐禅の指導をして頂いたり、鍋を囲んでの飲談を楽しんだりしました。

託された遺稿とCDは、今回主として収録した「はまなす」の原稿以外にも「キリスト教神学に関する専門的な論文」「あちこちで講演された原稿」「座禅会で使用された内山興正師、池部素子師

のテキストへの詳細な語彙注釈」など莫大なものでした。

一応すべてに目を通した上で、今回の遺稿集にふさわしいと思われる文章群を、目次の各テーマに分配し、永谷兄の「読む人にわかりやすいものでないといかん」という生前の意見を目安にして編集いたしました。

ここに収録し切れなかった文章群は水野先生の御令息泰二郎さんが、インターネットで検索できるようにまとめて下さることになっています。

若い時に「火星人」とあだ名され、独自のキリスト者、教師、禅者としての生涯を貫かれた水野吉治という稀有な人格に触れる遺稿集となることを願っております。



あなたは09841人目の訪問者です。

目次

聖書を読む
池部素子について

如是
震災・死・教育
終末について

キリスト教・仏教・諸宗教
掲示板「人生・教育・宗教の広場」



TopPage

ホームページ「生きる姿勢を求めて」
<http://mizuno-net.jp/>

水野吉治年譜

昭和八年 (〇歳)

十二月十七日、父・吉太郎、母・はなの長男として生まれる。大阪市天満在住。

昭和十五年 (七歳)

四月、大阪市神崎小学校入学。

昭和十八年 (十歳)

小学四年、戦災の為、宝塚市仁川へ転居。

宝塚良元小学校編入。

昭和二十一年 (十三歳)

四月、関西学院中学部入学。昭和二十四年三月卒業。

昭和二十四年 (十六歳)

四月、関西学院高等部入学。昭和二十七年三月卒業。

昭和二十六年 (十八歳)

十一月四日、長久牧師により洗礼を受ける。

昭和二十七年 (十九歳)

四月、関西学院大学神学部入学。

昭和三十一年三月卒業。

昭和三十一年 (二十三歳)

四月、同大学院(修士課程)入学。

昭和三十六年 (二十八歳)

神学修士号及び補教師資格取得。

関西学院教会伝道師となる。

昭和三十七年 (二十九歳)

宝塚市立西谷中学校英語教師となる。

昭和四十年 (三十二歳)

一月荒木治子と結婚。同年十一月長女・純子誕生



関西学院大学時計台



関西学院大学神学部



関西学院中学部本館

昭和四十一年（三十三歳） 十月、長男・晃郎誕生

昭和四十三年（三十五歳） 十月 次男・泰二郎誕生

昭和四十六年（三十八歳） 理想とする教育を行うため、玉川大学にて小学校教

員資格取得。

昭和四十八年（四十歳） 宝塚中学の英語教師として転任。

昭和五十年（四十二歳） 宝塚中学を退職。

全人教育を目指す私塾「旦旦塾」を自宅で開校。

昭和五十七年（四十九歳） 甲子園学院高等部英語教師に就任。

平成五年（六十歳） 甲子園学院を定年退職。

退職後一〇年間講師として在職。

平成七年（六十二歳） 「如是」（月刊）、「はまなす」（月刊）、「死を生きる」

発刊。ホームページ「生きる姿勢を求めて」開設。

全国から電話での悩み相談に応じる。

平成一〇年（六十五歳） 九月「芙蓉の会」発足

平成十六年（七十一歳） 四月「あしの会」発足

平成二十三年（七十七歳） 五月二日心筋梗塞にて死亡



最後の講演を行ったオハラホール
(旧宣教師館)



宝塚中学校



西谷中学校

水野吉治氏 略歴

- 1933年 大阪に生まれる
1949年 関西学院高等部に入学
1952年 関西学院大学神学部に入學
1958年 関西学院神学部大学院を卒業
1961年 関西学院教会伝道師に就任
1962年 西谷中学校英語教師に就任
1965年 結婚
1973年 宝塚中学校教師に就任
1975年 巨々塾を開く（全人教育を旨とし）
1982年 甲子園学院英語教師に就任
1998年 芙蓉の会、リーダーとなる
2004年 あしの会、リーダーとなる
2008年 新老人の会に入会
「生命を楽しむ」読書会、リーダーとなる
2011年 5月2日逝去。享年77歳

死を生きる（三） —水野吉治遺稿集—

発行日 2013年6月1日

発行 芙蓉の会
あしの会

兵庫県宝塚市仁川月見ガ丘6-21
水野治子方

印刷 株式会社スタジオ・エフ
